

延喜十三年正月二十五日 二十八日

四六六

〔西宮記〕

○二前 正月下 田家本

內宴

延喜十三年正月廿一日甲子御記云內宴也

三善清行
願ヲ獻ス
御遊

云々三獻了女藏人取若菜羹度御前簀子給親王已下參議已上親王等下座
跪受之去年一獻後給之而三獻御酒後臣下盃未行之前給大納言藤原朝臣奏
事由召清行令獻題先例召二人令奉題選定只故紀朝臣爲參內教坊奏樂公
卿遞起行酒五六度後太宰帥親王起座行酒年來无親王行酒事故式部卿親
則可有故實若是忘却歟讀詩了有御遊數曲後女藏人持御衣給參議已上云

〔撰集祕記〕

廿日內宴事

公卿起座行酒或親王行之延

〔眞信公記抄〕

正月廿五日戊辰○中略除目議始外記政同始

二十八日幸未除目是日前大宰大貳源悅ノ本位ヲ復ス

〔公卿補任〕

中納言從三位源 湛九 正月廿八日轉正
權中納言從三位藤道明八 正月廿八日轉正
參議從三位十世王一 八十宮內卿正月廿八日兼播磨守

六人ヲ超

正四位下藤仲平九 三十左兵衛督正月廿八日兼備前權守

從四位上源當時六 四十右兵衛督使別當正月廿八日兼播磨權守

藤定方四 四十右中將正月廿八日任中納言同日敍從三位

超六人

同清貫七 四十左大辨式部大輔正月廿八日任權中納言即

敍從三位超六人

從四位上藤枝良九 六十正月廿八日任修理大夫春宮亮等如元

從四位下橘澄清三 五十正月廿八日任右大辨勘解由長官等如元

〔公卿補任〕

延喜十五年

參議從四位下藤恆佐卅六 同十三正廿八右近權

中將亮兼國 等如元

〔公卿補任〕

延喜十九年

參議從四位上源悅五十 同十三正廿八任美乃守

又○一本權守 同日從四下

〔公卿補任〕

延喜二十一年

參議從四位下藤兼輔四十 同十三正廿一兼左

少將

〔公卿補任〕

承平四年

參議從四位上紀淑光六十 十三年正廿八少納言

延喜十三年正月二十八日

四六七

延喜十三年正月二十八日

四六八

〔公卿補任〕

天慶二年

參議正四位下藤元方五十、十三年正廿八式部少丞、

〔外記補任〕

二

大外記外從五位下大藏良實 正月廿八日等博士、

紀貞助 正月廿八日任、五十二、

少外記大藏貞明 正月廿八日任、元勘解由判官進士、冊九、

權少外記中原利世 正月廿八日任、元諸陵少允、

〔古今和歌集目錄〕

庶人

平定文

十三年正月廿八日任侍從、

紀淑望

十三年正月廿三日兼信濃權介、

〔中古歌仙三十六人傳〕

藤原忠房

十三年正月廿八日兼近江權介、古今和歌集

目錄二、延喜十二年正月廿六日兼近江介二作此、

〔西宮記〕

恒例一、前田家大永鈔本

延喜十三年九月十七日、除目、大間遣大納言里第、

言里第、

〔貞信公記抄〕

正月廿四日、依召參入、

廿五日、戊辰、除目議始、愚執筆、

廿六日、宿職曹司、

大間ヲ忠平ノ里第ニ遣ス

除目議始忠平執筆

大辨參議上首ヲ越エテ納言ニ任ズル例

廿七日、右大臣依召亥剋參入、丑剋退出、

廿八日、除目、

〔辨官至要抄〕

大辨參議超越上首數輩任納言例、越一人之

參議左大辨從

四位上藤原清貫 延喜十三正廿八任權中納言、元最末、

〔日本紀略〕

醍醐天皇

正月廿八日、前太宰大貳源朝臣依不赴太宰府、召位記、不

毀留官底、此下脱

○源悅ノ位記ヲ收ムルコト、十一年四月是月ノ條ニ見ユ、

延喜十三年正月二十八日

四六九

延喜十三年二月七日 十一日

二月 大 盡
甲 戊 朔

四七〇

一分宣旨

七日、庚辰一分召、

〔貞信公記抄〕 二月六日、下一分宣旨、

七日、一分召、

僧寬藤ヲ天王寺別當ニ補ス、

〔天王寺別當次第〕 寬藤 十禪師治三、(五)延喜十三二任、眞道秩滿替、

〔諸寺別當座主次第〕 天王寺別當次第 寬藤 延喜十三二七、治四、

十一日、申鹿島使ヲ發遣ス、是日、直物アリ、

〔貞信公記抄〕 二月十一日、有直物事、

〔西宮記〕 臨時一内印 延喜十三年二月十日、癸未、鹿島使官符可捺

印、而内侍不候、仍大納言令持外記、度階下付藏人奏之、以少將爲少納言代捺

之、

○鹿島使發遣ノ記事闕ク、式日ニ依リテ、是日ニ掲グ、

穢ニ依リテ、列見延引、尋テ、之ヲ追行ス、

〔日本紀略〕 醍醐天皇 二月十一日、列見延引、依死穢也、

十七日、列見、

〔貞信公記抄〕 二月十七日、依官穢、今日列見、但穢雖未畢、爲無神事、

十四日、亥釋奠、

〔日本紀略〕 醍醐天皇 二月十四日、釋奠、

二十三日、丙申安藝守高橋良成罪アリ、尋テ、遠流ニ處ス、

〔日本紀略〕 醍醐天皇 二月廿三日、安藝守良成犯罪、

〔本朝文粹〕 二見封事 意見十二箇條 善相公 清行 ○

一請依舊增置判事員事略 ○ 中

近曾安藝守高橋良成之罪、大判事惟宗善經、處之遠流、(遠カ)以禦螭魅、奏可已畢、官

符亦下、儻依刑部大錄粟田豐門之駁議、良成之身、幸蒙赦免、朽骨再肉、遊魂更

歸、○下略全文延喜十四年四月二十八日ノ條ニ收ム、

二十五日、戊戌赦後在任ノ吏ニ、赦前ノ雜怠ヲ宥免セシム、

〔政事要略〕 五十九 交替雜事十九

太政官符、勘解由使 應原免赦後在任吏赦前雜怠事

延喜十三年二月十四日 二十三日 二十五日

四七一

粟田豐門
ノ駁議

延喜十三年二月二十五日

四七四

之符到奉行

右大辨橋朝臣澄清

左大史酒井宿禰人真

延喜十三年三月廿五日

二十七日庚子、掌侍藤原長子ヲ復任ス、

〔西宮記〕

復任事

臨時已

前田凶事

延長九三廿八

丙戌

左大臣召二省於梅壺、給

復任宣旨、内侍復任例、

延喜十三年二月廿七日、掌侍藤原長子復任、近
代牢籠不復任、中先一例、天承和年中、以後不復、見云々

二十九日壬寅、殿上賭弓、

〔日本紀略〕

醍醐天皇

二月廿九日、令近臣有賭射事、左右各十人、

〔貞信公記抄〕

二月廿九日、殿上賭弓、

三月

甲辰朔盡

三日丙午、右大臣光ノ事ニ依リテ、神泉苑行幸ヲ停ム、

〔貞信公記抄〕

三月三日、欲幸神泉、而依右大臣忽不覺停止、

○光ノ薨ズルコト、十二日ノ條ニ、神泉苑ニ行幸シ給フコト、五月二十

六日ノ條ニ見ユ、

六日己酉、清和天皇ノ皇子貞平親王薨ズ、

〔日本紀略〕

醍醐天皇

三月六日、三品貞平親王薨、

〔本朝皇胤紹運錄〕

清和天皇

貞平親王

三品

母神祇伯良近女、

女子

京極御息所女房云々、後撰拾遺作者號一條君

〔三代實錄〕

清和天皇

貞觀十五年四月廿一日、乙卯、是日定親王八人、

皇子貞平、母藤原氏、右中辨良近之女、○中略爲親王、

○貞平親王ノ王女一條君ノ事蹟、便宜左ニ附載ス、

〔大和物語〕

上

先帝（清和）の五（貞平）のみこの御むすめは、一條の君といひて、京極の

延喜十三年三月三日 六日

四七五

御世系

親王下爲

御母

一條君ノ

京極御息所
守某
壹岐守
ルノ妻トナ

歌什

一條君ト
伊勢

宇多法皇
ト一條君

延喜十三年三月七日

四七六

御息所の御もとよさふらひ給ひけり、よくもあらぬことありて、まかて給て、ゆきのあみのめよていますかりて、

たまさあよとふ人あらは和田の原なけきほにあけていぬことたへよ

〔勅撰作者部類〕

女部 一條貞平親 後撰集、戀五、拾遺集、雜春

〔後撰和歌集〕

戀十三 一條かもとに、いとあむ戀しきといひにやりたり

ければ、鬼のかたをかきてやること、

一條

戀しくは影をたよみて慰めよ我が打ち解けて忍ふ顔なり

返し

伊勢

影みれはいと心そ惑はるゝ近からぬけの疎きなりけり

〔拾遺和歌集〕

雜十六 亭子院、京極の御息所にわたらせ給うて、ゆみ御覽し

て、かけ物いたさせ給ひけるに、ひけこに花をこき入れて、櫻をどくらにして、やますけを鶯にむすひそへて、かくかきて加へさせたりける、

一條の君 貞平のみこの女

木の間より散りくる花を梓弓えやはとゝめぬ春の形見に

七日、庚戌、女官除目直物、

〔西宮記〕

〇恒例 一 前田家 正月 除目 臨時例

延喜十三年三月八日、右大臣參上、有奏事、昨日、女官除

八日、辛亥、位祿定、

〔貞信公記抄〕 三月八日、行位祿事、

十二日、乙卯、右大臣正二位源光薨ズ、尋テ、正一位ヲ贈ル、

〔日本紀略〕 醍醐 三月十二日、乙卯、右大臣源朝臣光薨、十八、號西三條大臣、

狩獵之間、馳入泥中、其骸不見、有薨奏、

十八日、辛酉、贈故右大臣正一位、以大藏省絹布等賜之、

〔公卿補任〕

四 右大臣正二位源光、六十 左大將三月十二日、乙卯薨、十八日

贈正一位、號後西三條右大臣、參木八年、中納言七年、別當五年、大納言五年、

〔貞信公記抄〕 三月十二日、右大臣薨、

十八日、辛酉、奏右大臣薨由、有贈位事、並別給物、今日不警固、

〔西宮記〕

十二 大臣薨事 臨時 己 前田家本 殿上記、同十三年三月十八日、掌侍藤原

守子參上、奏右大臣去十二日薨由、即下御簾、酉一剋供御膳、戌一剋大納言藤

原朝臣、令奏故右大臣贈正一位々記宣命云々、

延喜十三年三月八日 十二日

四七七

狩獵ノ間
泥中ニ馳
入り其骸
見エズ賜
フ物ヲ

薨奏
贈位ノ位
記宣命

贈位使喪
所ニ進ム

增命ヲシ
テ觀音法
ヲ修セシム

後又延命
菩薩法ヲ
修セシム

官歴

延喜十三年三月十二日

〔西宮記〕

十二 贈太政大臣時已

○凶事 前田家本

光（兼書）延木十三年三月十八日薨奏、即贈正一位、使參議枝良、中務大輔

進公門王
喪所

〔扶桑略記〕

二十 醍醐天皇上

三月十二日、右大臣源朝臣光薨、年六十八、丞相先

年夢、有化人告云、汝以年五十九爲命之限、須早修延命法、覺了憂歎、拜謁增命和尚、令修觀音法、然間丞相夢、有優婆塞身長五寸許、以羽覆面、來相語曰、能留可去之人、是施無畏者也、汝知之耶、謂施無畏者、是叡山座主增命和尚也、汝命已延六年、覺了、感淚如雨、遙拜叡岳、因之丞相常語人云、天台座主者、觀音化身也、其後且令座主和尚、修延命菩薩之法、其時丞相亦夢、有壯年比丘、語云、汝命復加三年、于時丞相年六十八、薨、果如其夢焉、已上傳文、○日本高僧傳要文抄同、

〔愚管抄〕

醍醐 皇帝年代記

右大臣源光、仁明天皇第三皇子、延木元年正月廿六日任、同十三年三月十三日薨、

八十

〔公卿補任〕

四 參議正四位下源光、四十一、仁明天皇第三源氏、貞觀二十一

十六從四上、十五、同三五十四補次侍從、同七正廿美作守、同十四廿九相模權守、同十五廿二讚岐權守、同十八正七正四下、十四日左兵衛督、元慶五二十五兼相模權守、同六二二兼播磨權守、同八年四月一日任參議、左兵衛督、播

二人ヲ超
ユ

服解

磨權守如元、上三、仁和四年三月七日兼相模權守、同五年正月十六日兼備中權守、寬平三年三月十九日任中納言、同日敍從三位、超二同四年二月廿一日兼民部卿、同五年二月廿二日兼左兵衛督、止卿三月六日爲使別當、同九年二月日止別當、六月十九日任權大納言、兼按察使、昌泰二年二月十四日轉正、同四年正月七日正三位、廿五日任右大臣、延喜三年正月七日從二位、同四年二月十日兼皇太子傅、同六年八月廿五日兼右近衛大將、同九年四月廿二日轉左、同十年正月七日正二位、上四、

〔三代實錄〕

光孝天皇 仁和三年三月廿九日、癸卯、晦、前參議正四位下源朝

臣光、正月十九日丁母憂去職、是日有勅以本官起之、

〔神皇正統記〕

村上天皇 仁明（時平）の御子に姓を給る人十三人、大臣にのほる人、多

の右大臣、光（兼大將）の右大臣、

〔小右記〕

長元四年九月十七日、壬戌、中納言來云、略、○中昨日多被補數所別當、

○中勘前例已有、延喜九年贈太政殿下薨、以右大臣源卿兼補其所、八所也、所謂東西、延曆寺、內記、內豎所、內藏寮、穀倉院、陰陽寮等也云々、

〔尊卑分脈〕

仁明 源氏

延喜十三年三月十二日

延喜十三年三月十二日

仁明天皇

光^{皇太子}太子傳侍從左兵督美作守民部卿參議左衛督中納言別當右衛督大納言按察使右大臣左大臣左右大將正一位母新勅作者延喜十三三三十二薨六十八才驚狩之間馳入壘中薨其骸不見云々贈正一位號西三條

靜^{正五下}正五下左少將

淨^{左少將}左少將

興^{從五下}從五下

賢^{左少將}左少將

〔日本紀竟宴和歌〕

延喜六年喜

得譽田天皇

右大臣從二位兼行皇太子傳右近衛大將源朝臣光

渡之弊多流不留幾字喜磯遠須豆年波曾散耶計起毗比喜登保玖幾許遊流

歌○新勅撰和

〔歷代編年集成〕

醍醐天皇

延喜元年辛酉正月廿五日菅丞相右大臣任太

宰權帥坐事此日源光卿^{仁明第三}源氏任右大臣藤定國卿^{高藤男}任右大將云々左

大臣^{時平}讒奏之上以陰陽師呪咀之合力人々光卿定國卿菅根朝臣^{巨勢麻呂}玄孫

參議從四位上○北野緣起太平記異事ナキヲ以テ略ス

〔拾遺和歌集〕

賀五

右大臣源光の家に前裁合し侍りけるまけわざをうごねり橘のすけすみかし侍りける千鳥のかたつくりて侍りけるによませ侍りける貫之

たか年の數どかはみむ行き返り千鳥あくなる濱の真砂を

〔歷代編年集成〕

醍醐天皇

同三年庚申正月廿五日源光卿河原院木上有

金色佛^{略記ニ見テ}佛ノ下皇代守落之誦若以色見我文^{聲求之是人行邪道不能見}

如來金剛云々代略記同

〔今昔物語〕

二十 天狗現佛坐木末語第三

今昔延喜ノ天皇ノ御代ニ五條ノ道祖神ノ道祖神宇治拾遺在マス所ニ大キナ不成ヲ柿ノ木有ケリ其ノ柿ノ木ノ上ニ俄ニ佛現ハレ給フ事有ケリ微妙キ光ヲ放チ様々ノ花ヲト令降シテ極テ貴カリケ京中ノ上中下ノ人詣集ル事无限シ車モ不立敢ス歩人ハ云ヒ不可盡ス如此キ禮ミ惶ル間既ニ六七日ニ成ヌ其時ニ光ノ大臣ト云フ人有リ深草ノ天皇ノ御子也身ノ才賢ヲ智明カ也ケル人ニテ此ノ佛ノ現シ給フ事ヲ頗ル不心得ス思ヒ給ケリ實ノ佛ノ此ク俄ニ木ノ末ニ可出給キ様无シ此レハ天狗ノナト所

延喜十三年三月十二日

四八一

五條樹上
發見ス

爲ソニコ有メレ、外術ハ七日ニハ不過ス、今日我レ行テ見ムト思ヒ給テ、出立
 給フ日ノ裝束直クシ、檳榔毛ノ車ニ乗テ、前駟ナト直シク具シテ、其所ニ
 行キ給ヌ、若干詣集レル人ヲ掃ヒ去テ、サセ車ヲ搔下シテ、榻ヲ立テ、車ノ簾ヲ
 卷キ上テ見給ヘハ、實ニ木ノ末ニ佛在マス、金色ノ光ヲ放チ、空ヨリ様々ノ
 花ヲ降ス事雨ノ如シ、見ルニ實ニ貴キ事无限シ、而ルニ大臣頗ル怪ク思エ
 給レハ、佛ニ向テ目ヲモ不瞬スシ、一時許守リ給レハ、此ノ佛暫クコ光ヲ放
 チ花ヲ降シナ有ケレ、強ニ守ル時ニ佗テ、忽ニ大ルキ屎鴉ノ翼折ニタル成テ、
 木ノ上ヨリ土ニ落テ、多ク人此レヲ見テ奇異也ト思ケリ、小童部寄
 テ、彼ノ屎鴉ヲハ打致ケリテ、大臣ハ、然コレハ實ノ佛ハ、何ノ故ニ俄ニ木ノ末ニ
 ハ、現ハレ可給キリ、人ノ此レヲ不悟スシ、日來禮ミ惶ルカ、愚ナル也ト云テ、
 返リ給ケリ、

○光ノ任大臣ノ後、上表スルコト、元年二月二十九日ノ條ニ、重ネテ上
 表スルコト、同年六月十八日ノ條ニ、光ノ事ニ依リテ、神泉苑行幸ヲ停
 ムルコト、本月三日ノ條ニ見ユ、

十三日、兩亭子院歌合、

左頭 讀人 右方人

歌讀 天皇ノ御 裝束 左右ノ裝 數差ノ童

左右洲濱 ナ上ル 左右音樂 ナ奏ス

〔亭子院歌合〕 延喜十三年三月十三日、

左のとうには、女六の宮かたのみこ、御せうとなかつかさの四のみや、大
(大宰帥致國親王)
 さう五宮、中納言藤原定方朝臣、左衛門督なみつの朝臣、讀人藤原興風、
(依子内親王)
 凡河内躬恆、方人むねゆき、よしかせとなむ、右のとう、女七宮かたのみこ、
(敦實親王)
 御せうこのかむつけの八宮、せいわのさたかす、中納言源のほる朝臣、右
時爲右兵衛督疑本文有誤トアリ
 兵衛督清貫朝臣、○端史料ニ、按此時清貫無兼官、當歌讀是則貫之、かたひ
 と、かねみの大君、きよみちのあそむ、みかどの御裝束、ひはた色のおほむ
 そに、そら色の御はかま、をこ女、右は、あか色にさくらかさね、左は、あを
 いろにやなきかさね、左は歌讀かすさしのわらは、れいのあか色に、うす
 りのれうのうへのはかま、右はあをいろのれうのうへのはかま、方々
 のみこは、あか色、あを色、みあたてまつりたり、かくて左のそうは、みのと
 きはかりにたてまつる、かたのみやたち、みなさうそくめてたうして、す
 はまたてまつる、まうちきみよたりかけり、樂はわうしきてうにて、いせ
 の海といふ歌をあそぶ、右のすはまは、むまのときはかりにたてまつる、
 おほきなるわらはよたり、みつらゆひて、絲鞋はきてかけり、樂はそうて

延喜十三年三月十三日

四八四

うにて、たけかはさいふ歌を、いとしのひやかにあそひて、方宮たちもて
 はやしてまいりたまふ、左のそうは、さくらのえたよつて、中務のみこ
 もたまへり、右のはやまふきよつて、かむつけのみこもたまへり、うた
 はしたのほにちひさくて、おなしこといれたり、かむたちめは、はしの
 ひとり、みきりに、みあわかれて、さふらひたまふ、女藏人四人つゝさふら
 はせたまふ、方のかんしは、女みか一尺五寸はかりまきあけて、歌よまむ
 とするに、うへのよませたまふ、この歌を、たれか見きゝはやして、ことは
 らむとする、たゝふさやさふらふとおほせ給、さふらはすとまうせは、さ
 うくしからせたまふ、右はかちたりとも、かちの御歌ふたつを、くちに
 て出かたれば、みきひとつまけにたり、されとうたはもちもにそしけ
 る、うたは、かすみのうたは山につけたり、うくひすのうたは花につけた
 り、ほどゝきすの歌は卯花につけたり、よるのほは、うふねしてかゝりにい
 れてもたせたり、左方の宮にみきのかゝりたてまつれ給ひける、しろか
 ねのつほのおほきあるふたつに、ちむあはせ、たき物をいれたり、かたの
 人々にみなさうそく給ひけり、

題者 二月、三月、四月なり、

初春 廿首

一番

左持

伊勢

青柳の枝にかゝれる春雨は糸もてぬける玉かこそみる

右

是則

浅みどり染てみたるゝ青柳の糸をははるの風やよるらむ

この歌とも、これもかれもよければ、持なり、

左持

躬恆

咲かさらむ物とはなしに櫻花おもかけにのみまたき見ゆらむ

右

興風 或本貫之、

山櫻さきぬるときはつねよりも峯のしら雲たち勝りけり

○後撰和歌集同ジ、

左はらむふたつあり、右は山さくらまた有とて、ちにあす、

左勝

躬恆

きつゝのみ鳴うくひすの故里は散にし梅の花にそありける

延喜十三年三月十三日

四八五

右

是則

みちとせになるといふ桃は今年より花咲く春になりそしにける
あひい

左勝

伊勢

ほどもなく散なむ物を櫻花こゝら久しくまたせつる哉

右

是則

いそのかみふるの社の櫻花こそみし春の色やのこれる
こそをのみにてことしの心なしとてまく、

左勝

興風うちの御あり、あ

頼まれぬ花の心とおもへはやちらぬさきよりうくひすの鳴
春かすみたちしかくせは櫻花人しれすこそ散ぬへらなれ

右

貫之

うちの御歌なりとて左かつ、

左

上御製

はる風の吹ぬよにたにあらませは心のごかに花は見てまし

紀貫之

御製

右

貫之

散ぬとてありと頼まむ櫻花春はすきぬと我にきかすな
これもかれもなをありとて、ちとさたむ、

或本云、内御歌殊勝也、右歌ナチア(前カ)マリケリトテマケス、(下勝カ)

左

躬恆

我心春の山邊にあくかれてなかくし日をけふも暮しつ

右勝

貫之

櫻ちるこのした風は寒からて空に知られぬ雪そふりける
左歌は、なかくしといふ事にくしくらしとめて、かたすへたるや
うにてつふやけりとて、まくるなり、

左持

躬恆

花櫻いかてか人のおりてみぬ後にそまさる色もいてこめ
(前カ)

右

うたゝねの夢にや有るらん櫻花はかきくみてそやみぬへらある

左持

興風

延喜十三年三月十三日

四八八

さけりやさいはへて花みにくれはさくら小倉山いと霞の立ちかくすらん

右 躬恆

いもやすくねられさりけり春のよは花の散のみ夢にみえつゝ

左 躬恆

ふる里に霞とひわけ行鴈はたひの空にや春をすくさむ

右 躬恆

散る花をぬきしとめねは青柳の糸はよるともかひるらんかきりける

季春 廿首

見てかへる心あかねは櫻花さけるあたりるらんに宿やからまし撰和續後

左持 興風

東雲におきてみつれば櫻花また夜こめても散にける哉

この右の歌をみかこのおほせられけるやうねめをするくはあ

右 頼基 或友則

藤原頼基

をみけむとあ行いへいふにやこのたまはすればさたかたのあそん

のほるのあそむのよとこすかたにごおほゆれとそうしければ御

こきよにてさらはとてちになさせたまふなり

左持 躬恆

うつゝをは更にもいはし櫻花ゆめにも散とみえはうからん

右 是則

花の色をうつしとめよ鏡山春のくれよりのちなんのかけやみゆると

左勝 躬恆

めに見えて風はふけとも青柳のなひくかたにそ花は散ける

右 興風

あし引の山ふきの花散にけりゐての蛙は今や鳴らん

左 みきふるめきたりとてまくるなり

散て行かたをたにみむ春霞花のあたりに立もやらなん

右勝、或本左勝

延喜十三年三月十三日

四八九

澤水に蛙なくなり山吹のうつろふ影やそこに見ゆらん

左勝

興風

あかすして過行かたを呼子鳥よひかへしつゝきてもつけなむ

右

武藏野にいろやかよへる藤の花わか紫にそめて見ゆらん

左持

躬恆

春ふかき色はなけれと山吹のはなの心をまつそ染つる

右

兼覽王

風ふけはおもほゆるかな住の江のきしの藤波今やさくらん

左

躬恆

かけてのみ見つゝそ忍ふ紫ひ歟にしほ染しふちの花そも和歌集

初句チかくてニ三四句チ紫のいくしほニ作ル

右勝

是則

水底にしつめるふちの影みれば春の深くもなりにける哉

左持

興風

兼覽王

源元方

吹風におしみもあへす散ときはやへ山ふきの色もかひなし

右

元方 貫之とも

惜めともたちもとまらて行春をこそいならしせきいの山の關もとめなん

左ち

御製

みなそこに春や暮るらんみよし野のよしのゝ河に蛙なくなり

右

貫之

櫻はな散ぬる風のなこりにはみつかき空に波そたちける古今和歌集同

或本、オムウタマケムヤハトテ、カチトナム、

左持

躬恆

けふのみと春を思はぬ時たにもたつことやすき花の影かは古今和歌集同

右

花みつゝおしむかひなくけふ暮て外の春とやあすはなりなむ

これもかれもおかしとて、ちとなむ、

夏 廿首

左勝

源元方 躬恆とも

けふよりは夏の衣になりぬれどきる人さへは變らさりけり

かたをかあしたの原をうちくれば山郭公けふそあくなる
あちきあしどて、まくる、

一本、キルヒトサヘハトテマク、

左持

興風

山里にしる人もかな郭公なきぬときかはつけもくるかに

右

夏きぬと人もつけこぬ我宿に山ほとゝきすはやもあかなむ

左

躬恆

われにして人にかはつけむ郭公おもふもしるく我宿にかけ

右勝

ほとゝきす聲のみするは吹風の音はの山に歎く成けり

左

興風

夏池によるへ定めぬうき草は水より外よるにすむ方そなき

右勝

山みやまをいてゝまつはつ聲は郭公夜ふかくまたむまつ此所はあけ

左持

紫にあふみつなれや杜若そこの色さへたかはさるらん

右

さよ更ていつくなるらむ郭公ねさめの宿はかす人やもあしき

左勝

いつれをかそれともわかむ卯花の咲る垣ねをてらす月影○萬代和歌集

同、續後撰和歌集よ
み人しらす二作

右

この夏もかはらさりけり初聲はなこしのをかに鳴郭公

左

夏の夜のまたもねなくに明ぬれは昨日けふとも思ひまどひぬ

右

卯花の咲る垣ねは白雲のおりゐるところそあやまたれけれ

左 咲花の散つゝうかふ水のおもにいかてうき草ねさしそめけむ

右

待人はつねならなくに郭公思ひのほかになかはうからん

左

たまくしけふたかみ山の郭公今を明くれ鳴わたるなる

右

郭公のちのさ月もありとてやなかくうつきを過しはてつる

左

○歌
関ク

右

夏なればふかくさ山の郭公鳴聲しけく成まさるなり

戀 廿首

左勝

躬恆

身をもかつ思ひも能^{さい}戀といへはもゆるなかにもいれる心は

右

或本 躬恆

なみた河いかある水か流るらむなど我戀をけつよしもなき

左勝

躬恆

誰ゆへに思ひみたるゝ心にはしらぬそ人のつらさ成ける○萬代
和歌集

同之、續古今和歌集初句ヲ誰
により三句ヲ心ぞこニ作ル

右

はつかしの森のはつかに見し物をなと夏草のしけき思^{戀する}そ

左持

躬恆

人の上とおもひし物を我戀になしてや君かたゝにやみなむ^{ぬる}

右

貫之

あしまよふ難波の浦にひくこく船のつなてあからも戀わたる哉○新拾
和歌

集ふからち船チ行く船ニ作り、萬
代和歌集こく船チ行く船ニ作ル

左

躬恆

うつゝにも夢にも人によるしあへは□新許うれしきはあし

右

玉もかるあまとはあしにきみこふるよごゝもに我衣てのかはく時なき

左

伊勢

あふことこの君にたえにし我身よりいくらの涙なかれてぬらむ

右

勝 是はおくにありあはせぬ歌

行かへり千鳥なくなり濱ゆふに心へたてゝ思ふものは

左

逢すしていけらんことこの難ければいもは我身をありとやは思ふ

右

逢ふことのかたのしるへか泪かは戀しと思へはまつ先にたつ

左

人こふとはかなきしにを我やせん身のあらは社後も逢ひみめ

右

夕されは山のはにいつる月草のうへし心は君はそめてき

左

露はかりたのめをかなむ言葉にしはしもとまる命ありや

右

春雨のよにふる空もおもほえす雲井あからに人こふる身は戦○新歌千

集題しらすニ作り、萬代和歌集よみ人しらすニ作ル、

左

貫之

身に戀の餘りにしかは忍ふれと人のしるらんことそわひりなきしき

右

君こふる我身ひさしくなりぬれはそてイとしに涙もふりぬへらなり

左

逢みてもつゝむ思ひの侘しきは人まにのみそねはなかれける

右

夏草にあらぬものから人こふる思ひしけくも成にける哉

かくて左方に上の御よわたりとて右方のみにうらみまうしたま

ふとさたしめして、

院上

立ちかへり千鳥鳴なる濱ゆふの心へたてゝおもふ物かは

初春廿首

季春廿首

歌題

讀人

延喜十三年三月十三日

題

夏 廿首 戀 廿首

四九八

御製 兼覽王 伊勢 貫之

讀人

躬恆 興風 是則 友則

〔萬代和歌集〕

春歌上

延喜十三年亭子院歌合の歌

藤原興風

山里は春の霞にとちられてすみかまこへるうくひすそあく

〔十訓抄〕

第一可施人惠事

さかさらむ物とはなしに櫻花おもかけにのみまたき立らん

是は延喜十三年亭子院歌合に、らんの字二ありとて病に定らる、

〔袋草紙遺編〕

延喜十三年亭子院歌合寛平法皇也

勅判 臨期爲判者、令尋藤原忠房給之處、不參云々、仍勅判也、

勅判

講師 左、女房云々、御簾卷五寸許云々、

讀師 題者、撰者無所見也、

〔吉野吉水院樂書〕

一延喜十三年歌合、講師、女房、左右分テ、親王マテ青色赤

左右装束
色ヲ異
ニス

色ヲミナタテマツル、スワマハカフサスモノナリ、

勝負亂聲
アリ

〔河海抄〕

玉鬘並四

もろくの勝負の後、亂聲常事也、略中延喜十二(三九)

〔和歌合略目録〕

亭子院歌合 延喜十三年 勅判

十五日、戊午、季御讀經、

〔日本紀略〕

三月十五日、季御讀經、

〔貞信公記抄〕

三月十一日、甲寅、定御讀經、請僧、

十五日、戊午、御讀經始、

十八日、辛酉、御讀經結願、

二十三日、丙寅、東宮御讀經、

〔貞信公記抄〕

三月廿三日、丙寅、宮御讀經始、

二十五日、戊辰、女御藤原穩子退出アラセラル、

〔貞信公記抄〕

三月廿五日、戊辰、御息所退出、今日

結願

請僧ヲ定

延喜十三年三月十五日 二十三日 二十五日

四九九

七日、已臨時旬、

〔日本紀略〕醍醐天皇 四月七日、臨時旬、

十五日、丁亥除目、大納言藤原忠平、二左近衛大將ヲ、中納言藤原道明、二右近衛大將ヲ兼ネシム、

〔公卿補任〕四

大納言從三位藤忠平、卅四四月十五日轉左大將、

中納言從三位藤道明、五十四四月十五日兼右大將、

同定方、四十四四月十五日兼左衛門督、

參議正三位藤有實、六十六左衛門督、四月十五日兼按察使、去督

正四位下同仲平、三十九四月十五日兼春宮大夫、

從四位上源當時、六十四四月十五日兼近江權守、

從四位下橋澄清、五十四四月十五日轉左大辨、

〔公卿補任〕延喜十四年 參議從四位上藤保忠、廿三同十三四十五右大辨、

要○辨官至抄同シ、

〔公卿補任〕延喜十九年 參議從四位上藤玄上、六十同十三四十五右中將、

〔公卿補任〕延喜元年 參議從四位下藤當幹、六十同十三四十五左少辨、

〔公卿補任〕延喜五年

參議從四位下平伊望、四十同十三四十五兼右兵衛佐、

從四位下橋公賴、五十同十三四十五右少辨、

〔貞信公記抄〕 四月十四日、除目議、

十五日、除目、

〔西宮記〕二前田家本 除目 加茂祭前任官例

同十三年四月十五日、任百四人、廿五日祭

○紀貫之等轉任ノコト、便宜左ニ附載ス、

〔古今和歌集目錄〕庶人 紀貫之 延喜十三年四月任大內記、三十六人歌仙傳異事ナシ

〔三十六人歌仙傳〕 從四位下源朝臣公忠 延喜十三年四月任掃部助、

〔魚魯愚鈔〕七轉任勘文 自諸司屬任史例

延喜十三年四月 家原實仁 元主計屬、

二十二日、甲午諸國別納租穀ノ制ヲ定ム、

内給宣旨

〔符宣抄〕

別本

左大辨橘朝臣澄清傳宣大納言藤原朝臣忠平宣奉勅別納租穀宛給位祿衣服等之國既立其限而或國稱有去年過用不奉行當年新自今以後定宛給數之後被下内給宣旨者先檢用殘若無物者勘申其由隨後宣旨不得違失者

延喜十三年四月廿二日

少史菅野清方奉

二十五日、賀茂祭、

〔西宮記〕

○二前田家本

除目

加茂祭前任官例

同十三年四月十五日、

○中廿五日祭

〔西宮記〕

賀茂祭

延喜十三年四月廿三日、乙未、鴨祭、仍警固、但諸衛无佐已

上六位官人奉之、仍上宣、令進佐已上散狀、

〔西宮記〕

○前田家大永鈔本

定禊日前駈

延木十三年四月廿二日、兵衛佐爲

馬助代、

警固

廢務

五月

壬寅

一日、日食、

壬寅

〔日本紀略〕

醍醐天皇

五月一日、壬寅、日蝕、但雨降、今日諸司廢務、

〔貞信公記抄〕

五月一日、々蝕、

〔扶桑略記〕

醍醐天皇

五月一日、壬寅、日食、廢務、

三日、僧寬蓮、勅ヲ奉シテ、碁式ヲ撰進ス、

〔花鳥餘情〕

三習十

備前掾橘良利、肥前國藤津郡大村人也、出家名寬蓮、爲亭

子院殿上法師、亭子院法皇山ふみし給ふ時、御ともしけるよし、大和物語に

のせ侍り、碁の上手なるによりて、碁聖といへり、延喜十三年五月三日、碁聖

奉勅、作碁式獻之云々、

○寬蓮ノ事蹟、便宜左ニ附載ス、

〔大鏡〕

宇多天皇

昌泰二年つちのこのひつし十月十四日、出家せさせ給

ふ、○中肥前のそうたちはなのよしとし、殿上にさふらひける、入道してす

けの御ともにも、これのみつかまつりける、されはくまのにても、ひねといふ

所にて、たひねの夢に見えつるはともよむそかし、人々なみたおとすもこ

延喜十三年五月一日 三日

五〇三

亭子院ノ殿上法師トナル

寬蓮ノ傳

宇多法皇ト共ニ出家ス

初メ殿上ニ侍ス

法皇ニ從テ諸國ヲ行脚ス

仁和寺ノ圓堂ニ住ス

とほりにあはれなる事かな、

〔大和物語〕

上

みかど

みかどおりの給ひて、又の年昌泰二年の秋、御くしおろしたまひて

ところく山ふみし給ひてをこなひ給けり、備前大鏡肥のせうにてた

ちはなのよしとしといひける人、内におはしましける時、殿上にさふらひ

て、御くしおろし給ければ、やかて御ともにかしらおろしてけり、人にもし

られ給はてありきたまひける、御とも内膳にこれなんをくれ奉らてさふらひ

ける、かゝる御ありきし給ふ、いさあしき事なりとて、内より、少將中將これ

かれさふらへとて奉らせ給ければ、たかひつゝありき給、いつみの國にい

たり給て、ひねといふ處におはします夜あり、いさこゝろほそう、かすかに

ておはしますことを思ひて、いと悲しかりけり、さてひねといふことを歌

によめと仰ことありければ、このよしとし大どく、

故郷の旅ねの夢にみえつるは恨やすらん又とゝはねは

とありけるに、みな人なきてえよますなりにけり、その名をなん寛蓮大と

くといひて、後まてさふらひける、

〔二中歴〕

座主歴

圓堂三僧

延喜元年

觀賢

寛蓮

寛超

法皇ニ灌頂ヲ受ク

〔東寺長者補任〕

一 延喜八年五月三日癸酉法皇四十於東寺實世親王法三御子、廿二

并寛蓮卅五、會理、延愀、令授灌頂給云々、

〔血脈類集記〕

灌頂本朝眞言傳法師資相承血脈第五代益信御弟子禪定法皇、付法十三人、〇中

寛蓮、年三十五、東寺定額、小野僧正記云、寛蓮、又清和天皇也、云々、薦九、

同本入道基聖、此人異名也、云々、

裏書 寛蓮 寛照 長憐

仁賀上人

觀肅

圓照

空觀

日藏本名道賢、依藏王御託宣、改日藏、天曆十一年七月十六日入壇

景雲 皇慶 賴照阿者梨 行嚴法橋

六人同時事、

三六九不得同時灌頂式、蓋如來密意也、阿闍梨不見所由云々、六人同時被授之條如何云々、小野六帖四云、傳法灌頂式上堂、先右三匝兩旦

延喜十三年五月三日

五〇六

也、次日前普禮、次著座同禮佛、次九方便、已上、台、移入、介界、旦、先著座普
禮、次五悔等、延喜八年五月五日、(宇多)聖王授大灌頂於法三御子、寬蓮等
日記而已、以上、裏

基ヲ善ク

〔二中歷〕

一十三 能歷 圍基 基聖 寬蓮

說云、基聖者圍基上手之稱也、

〔河海抄〕

二 十 習 させい、たいとくになりて、基勢大徳、肥前、橋、良利、法名、寬蓮

好手也

〔古事談〕

六 亭宅諸道 延喜聖主、召基勢法師、金御枕ヲバ御懸物ニテ、令決圍

基給ニ、數無御勝負、或日基勢奉勝、賜御枕退出之間、以藏人被召返之處、申云、
年來一堂建立宿願候、思而涉日之間、早賜此御懸物歸參シテ、若被打返マキ
ラセモゾスルトテ、ヤガテ退出、自翌日建立一字堂、仁和寺北ニ彌勒寺ト云
堂ハ、此基勢之堂也、

〔今昔物語〕

四 二十 基擲寬蓮值基擲女語第六

今昔六十年代延喜ノ御時ニ、基勢寬蓮ト云フ二人ノ僧、基ノ上手ニテ有ケリ、
寬蓮ハ品モ不賤シテ、宇多院ノ殿上法師ニテ有ケレ、(内)ニモ常ニ召テ、御基

天皇ト圍
基スノ御枕
金ノ懸物ト
シナ給フ

賭物ノ代
ヲ以テ建
勒寺ヲ建
立ス

チ遊ケハレ、天皇モ極ク上手ニ遊シケレ、寬蓮ニハ、先ニ二ツナ受^(旁イ)サセ給ヒケ、常
ニ遊ケル程ニ、金ノ御枕ヲ懸物ニテ遊ルニシケ、天皇負サセ給レハ、寬蓮其ノ
御枕ヲ給リテ罷出ルナ、若キ殿上人ノ勇ナル以テ、奪ヒ取セ給レハ、ニケ
ニ給テハ、罷出ルナ、奪ハセ給フ事、度々ニ成リ、而ル間、猶天皇負サセ給テ、
寬蓮其ノ御枕ヲ給テハ、罷出ケル前ノ如ク、若キ殿上人數追テ奪ヒ取ラム
爲ル時ニ、寬蓮懷ヨリ其ノ枕ヲ引出テ、后町ノ井ニ投入レハ、殿上人ハ皆去
ヌ、寬蓮ハ踊テ罷出ヌ、其ノ後井ニ人ヲ下シテ枕ヲ取上テ見レハ、木ヲ以テ
枕ニ造テ、金ノ薄ヲ押タル也ケリ、早ク實ノ枕ヲハ取テ罷出リ、然ル枕ヲ
構ヘ持ルナリケ、投入レケ也ケリ、然テ其ノ枕ヲ打破ツ、仁和寺ノ東ニ引ク古
ニ事談北邊ニ有ル彌勒寺ト云フ寺ヲハ造タル也ケリ、天皇モ極ク構トテ、
ハセ給リ、ニケ此テ常ニ參リ行ケ程ニ、内ヨリ罷出テ、一條ヨリ仁和寺ヘ行ト
テ、西ノ大宮ヲ行ケ程ニ、袖袴著タル女ノ童ノ穢氣无キ、寬蓮カ童子チ一人
呼ヒ取テ物ヲ云フ、何事ヲ云ニカ有トラム思テ見返リ見レハ、童子車ノ後ニ
寄來テ云ク、彼ノ候フ女ノ童ノ申シ候也、白地ニ此ノ邊近キ所ニ立寄ラセ
給ヘ、可申キ事ノ有ル也ト申セト、候フ人ノ御スル也トナ申スト、寬蓮此レ

延喜十三年五月三日

五〇七

延喜十三年五月三日

五〇八

チ聞テ誰カ言ニカスル有ラム怪ク思ヘト此ノ女ノ童ノ云フニ隨テ車ヲ遣
 セテ行ク土御門ト道祖ノ大路トノ邊ニ檜牆シテ押立門ナル家有リ女ノ
 童此也ト云ヘハ其ニ下テ入ヌ見レハ前ニ放出ノ廣庇有ル板屋ノ平ルカ
 前ノ庭ニ籬結テ前栽ムチナ可有クカシ殖テ砂ナト蒔タリ賤小家トモ故有テ
 住成リタ寬蓮放出ニ上テ見レハ伊與籬白クテ懸タリ秋ノ比ノ事ハ夏
 ノ几帳清氣ニテ籬ニ重ネテ立タリ籬ノ許ニ巾鏑カシ碁枰有リ碁石ノ筒
 可咲氣ニテ枰ノ上ニ置タリ其ノ傍ニ圓座一ツヲ置タリ寬蓮去テ居ハレ
 籬ノ内ニ故々シク愛敬付タル女ノ音シテ此寄ラセ給ヘト云ヘハ碁枰ノ
 許ニ寄テ居ヌ女ノ云ク只今世ニ並无ク碁ヲ擲給フト聞ケハ然テモ何許
 ニ擲給カフニ有ラム極テ見マ欲ク思ヘテ早ウ父ニテ侍リシ人ノ少シ擲ト
 思テ侍カリハ少シ擲習テト教ヘ置テ後絶テ然ル遊モ重ク不爲ニ此
 通リ給フト自然ラ聞侍ハレ憚乍（殿アツシ）咲テ云ク糸可咲ク候フ事カナ然テモ
 何許遊ニカス手何ツ許カ受サセ可給キト碁枰ノ許ニ近ク寄ヌ其ノ間籬ノ
 内ヨリ空薰ノ香馥ク匂出ヌ女房共籬ヨリ臨合タリ其ノ時ニ寬蓮碁石筒
 チ一ツハ取テ今一ツヲ籬ノ内ニ差入ハレ女房ノ云ク二ツ共（ト）給ヒヌ

然テ其ニ置給ヘト申（ト）何テカ（ト）恥カシ擲ム寬蓮糸可咲クモ云ナトカ
 心ニ思ヘテ碁石ノ筒チ二ツ乍ラ前ニ取置テ女ノ云ハム事ヲ開カム思テ
 碁石筒ノ蓋ヲ開テ石ヲ鳴シテ居タリ此ノ寬蓮ハ故立テ心ナト有ハケレ宇
 多院ニモ然ル方ノ者ニ思食ルシタ心レハナ此レヲ極ク興有テ可咲ク思フ
 シルヘ然テ几帳ノ綻ヨリ卷數木ノ様ニ削タル木ノ白ク可咲氣ナル二尺許
 ナル差出テテ丸カ石ハ先ツ此ニ置給ヘト云テ中ノ聖目ヲ差ス手ヲ可受
 申トモ未タ程モ不知ラハ何トカ思ヘハ先ツ此ノ度ハ先テシ其ノ程ヲ知
 ソテコ十廿モ受ケ聞トヘメ云ヘハ寬蓮中ノ聖目ニ置ツ亦寬蓮擲ツ女ノ可擲
 ツ手ヲハ木ヲ以テ教ニフル隨テ擲持行ク程ニ寬蓮皆煞シニ被擲ヌ纔生タ
 ル石ハ結ニ差ニマ手重ク不擲モト大方ヲ衛テ手向ハ可爲クモ非ス其ノ
 時ニ寬蓮思ハク此レハ希有ニ奇異ノ事カナ人ニハ非テ變化ノ者ヘシル何
 テカ我レニ會テ只今此様ニ擲ツ人ハ有ラム極テ上手也ト云フト此ク皆
 煞ハニ被擲ヤト怖シク思テ押シ壞ツ物可云方モ思ハヌ女少シ咲タル音
 ニテ亦ヤト云ヘハ寬蓮此ル者ニハ亦物不云ソ吉キト思テ尻切モ履不敢
 ヘ逃テ車ニ乗テ散シテ仁和寺ニ返テ院ニ參テ然々ノ事ナム候ツル申レケ

延喜十三年五月三日

五〇九

恩賜ノ笙
ヲ棺ニ入
レシム

歌什

ハ、院モ、誰ニカ有ラム不審セカラ給テ、次ノ日、彼ノ所ニ人ヲ遣シテ被尋ケル
其ノ家ニ一人一人モ无シ、只留守ニ可死氣ナル女法師一人居タリ、其レニ昨
日此ニ御座ケル人ハト問ヘハ、女法師ノ云ク、此ノ家ニハ五六日東ノ京ヨ
リ出忌給フ人トテ渡リ給ヒタリ、夜前返リ給ヒニ院ノ御使ノ云ク、其ノ渡
リ給ヒタリ人ヲハ、誰トカ云フ、何ニカ住給ト、女法師ノ云ク、己ハ誰トカ知
侍ラム、此ノ家主ハ筑紫ニ罷ニキ、其レヲ知リ給ヘル人ニヤ有ケム、

不知侍ト、御使カヘリテ、カクト、其後ハ沙汰无クテ止ルニモ此
ノ由ヲ聞食テ、極ク奇異セカラ給リ、其ノ時ノ人ノ云ク、何テカ人ニテ寛蓮
ニ會テ、皆煞ハシニ擲タム、此レハ變化ノ者ノナト來メリケルトソ疑ル、其ノ比ハ、
此事ヲナ世ニ云ヒ合ヘリケル語リ傳ヘタトヤ、

〔古今著聞集〕博奕 同御時、碁勢法師、御前にて圍碁を仕りて、銀の笙をう
ち給はりてけり、生涯の面目に思ひて、死にけるときは、棺に入るへきよし
をなんいひける、

〔勅撰作者部類〕

自帝王至庶人之部

良利五位

新古今集旅

〔新古今和歌集〕

十族歌

亭子院御くしおろして、山々寺々に修行したま

ひける頃、御供よ侍りて、和泉國日根といふ所にて、人々歌よみ侍りけ
るによめる、
橘良利

故郷の旅寝の夢に見えつるは恨みやすらむ又と訪はねは

○寛蓮ヲ殿上ニ召シテ、圍碁ヲ御覽アラセラル、コト、四年九月二十
四日ノ條ニ、寛蓮、東寺ニ於テ、法皇ヨリ灌頂ヲ受クルコト、八年五月三
日ノ條ニ見ユ、

法皇、東寺ニ於テ、入道齊世親王ニ、兩部灌頂三部大法ヲ御傳授アラセ
ラル、

〔儼避囉鈔〕

灌頂作法上

心覺抄云、圓城寺（齊世）法三宮、度々御灌頂、

合七箇度、中略

一東寺灌頂堂、粟兩部灌頂三部大法、

延喜十三年五月三日、寬平法皇傳之

○法皇、東寺ニ於テ、入道齊世親王等ニ灌頂ヲ授ケ給フコト、八年五月
三日ノ條ニ見ユ、

四日、諸道得業生ノ課試期ヲ定メテ滿七年トス、

〔日本紀略〕

醍醐天皇

五月四日、宣旨、諸道得業生、課試期、七年已上、方略試、文章

延喜十三年五月四日

五一

得業生并擬文章生召博士上臈二三入

〔類聚符宣抄〕

文章得業生試

請殊蒙宣旨令遂課試文章得業生等狀○中

伏尋延喜新制秀才課試之期以滿七年爲限延喜末歲已來亦有相准之法以給料之二年當秀才之一年○中

應和二年四月廿五日○下

五日、丙午、藥玉ヲ供ス、

〔河海抄〕

玉鬘竝三

御記云延喜十三年五月五日丙午糸所供奉藥玉

如常、玉替懸差御柱前例也

二十日、西賑給使竝ニ施米使ヲ定ム、

〔西宮記〕

五月 定賑給使事

延喜十三年五月廿日權中納言清貫卿就陣座定賑

給使奏聞云々又召内暨監施米使事被仰訖今年賑給施米等使一日被定也

二十二日、癸亥、厨家所納ノ諸國例進米竝ニ、交易雜物ノ未進勘定ノ法ヲ制ス、

〔符宣抄〕

別本

茶奠ヲ撤ス

別當等ヲシテ返抄ニ署セシム

競馬ヲ御覽アラセラル

馬出勅使

厨家雜事

左大辨橘大夫宣厨家所納諸國例進米并〔金方〕易雜物有未進者可拘留朝集調庸稅帳等返抄之文式條已存今須成彼返抄之日先下勘厨家乃知無未進令厨家別當辨史署其返抄自今以後立爲恆例者

延喜十三年五月廿二日

左大史酒井人眞奉

二十六日、丁卯、神泉苑ニ行幸アラセラル、

〔日本紀略〕

天皇

五月廿六日行幸神泉苑

〔貞信公記抄〕

五月廿六日行幸神泉至暮小雨即止

〔新儀式〕

行幸神泉苑覽競馬事

此間左右大將獻御馬奏〔延喜〕同十三年給饌後

次御馬北上訖仰大臣可遣勅使納言定申人名又仰大臣改御馬番同略書又仰可遣勅使狀○中即以番文給馬出勅使次移東廂大床子略御酒一獻訖出御王卿移就簀子敷○中以手番文給次將召將監遣標所同略將各一人○下略

〔江次第〕

臨時競馬事

大臣先參上

謂當日上卿延喜十三神泉尙侍守子召

王公卿等可召狀暫藤原朝臣參次遣勅使○中勅使五位二人○中略御馬競○註

延喜十三年五月二十六日

五二三

延喜十三年六月七日 八日

五一六

六月壬申盡

七日戊寅女御藤原穩子參内アラセラル、

〔貞信公記抄〕六月七日御息所參入、

八日己卯文德天皇ノ皇女恬子内親王薨ズ、

〔日本紀略〕醍醐天皇六月十八日（行カ）前齋宮無品恬子内親王薨、

〔西宮記〕十二薨奏臨時已○前田家凶事九記云（集書）天曆四十廿四令伊奏昨所作勘文、

薨奏

其文云延喜十三六十四申送恪子内親王薨由、

〔顯昭古今集註〕春一帝王系圖云恬子内親王文德天皇女母同惟高親王、

貞觀元年十月爲伊勢齋王同十八年退之延喜十三年六月八日薨云々、

〔古今和歌集目錄〕詞者齋宮恬子内親王 延喜（十三）三年六月八日薨○一代

ツ、要記同

○古今和歌集目錄一代要記三年ニ係ク今顯昭古今集註ニ據リテ掲

グ、

〔三代實錄〕清和天皇貞觀元年十月五日丁亥卜定恬子内親王爲伊勢齋

十二月廿五日丙午伊勢齋恬子内親王於鴨水邊六條坊門末修禊○中入初

御官歴

齋院

〔三代實錄〕清和天皇貞觀三年八月十八日己未大祓於建禮門前以伊勢

齋内親王可入太神宮故也、

廿九日庚午大祓於朱雀門前以伊勢齋内親王九月一日將入太神宮故也、

九月壬申朔勅遣右大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣良相尙侍從三位

源朝臣全姬向八省院發遣伊勢齋内親王、

〔三代實錄〕陽成天皇元慶元年二月廿三日乙丑遣使伊勢太神宮告以天

皇即位并卜定齋内親王告文曰○中今侍恬子内親王波太上天皇乃太神乃

御杖代止之奉入賜倍流奈利乃今舊例乃隨爾相替天可令奉仕○下略識子内親王係

三月壬寅朔遣刑部大輔從五位上弘道王右中辨從五位上藤原朝臣保則迎

前伊勢齋内親王、

〔本朝皇胤紹運錄〕飛鳥井家本

文德天皇

恬子内親王齋宮母同（紀傳）惟喬

〔古今和歌集〕戀歌三業平朝臣の伊勢國に罷りたりける時齋宮なりけ

延喜十三年六月八日

五一七

御世系

恬子内親王
業平

る人に、いとみそかに逢ひて、またのあしたに人やるすへなくて思ひ
をりける間に、女のもとよりおこせたりける、

読人老らす

君やこし我やゆきけむ思ほえす夢か現かねてかさめてか

かへし

業平朝臣

かきくらす心の闇にまどひにきゆめ現とは世人さためよ

〔伊勢物語〕昔男有けり、その男、伊勢の國にかりのつかひにいきけるを、か

の伊勢の齋宮なりける人のおや、つねの使よりは、此人よくいたはれとい
ひやりけり、おやのいふことなりければ、いとねんころにいたはりけり、あ
したにはかりにいたしたてゝやり、ゆふさはこゝにかへりこさせけり、
かくてねんころにいたはりけるほどに、いひつきにけり、二日といふ夜（男）わ
れてあはむといふ、女はたいとあはしとも思へらす、されど、人目しけゝれ
はえあはず、つかひさねとある人なれば、とをくもやさす、ねやちかくな
ん有ける、女人をしつめて、ねひとつはかりに男のもとにきにけり、男はた
ねられさりければ、どのかたを見いたしてふせるに、月のおほろなるに、人

のかけするを見れば、ちいさきわらはをさきにたてゝ人たてり、おとこい
どうれしくて、わかぬる所にゐていりて、ねひとつよりうしみつまで、物か
たらひけり、いまたなにこどもかたらひあへぬほどに、女かへりにければ、
男いとかなくして、ねす成にけり、つとめて、ゆかしければ、我人をやるへき
にしあらねは、心もとなくて、まちをれば、あけはあれてしはしあるほどに、
女の許より詞はなくして、

君やこし我やゆきけんおもほえす夢か現かねてかさめてか

男いたうゝちなきて、

かきくらす心の闇に惑ひにき夢うつゝとはよひにイ今宵さためよ

とてかりにいてぬ、野にありきければ、心はそらにて、いつしか日もくれな
んどおもふほどに、國のかみの、いつきの宮のかみかけたりければ、かりの
使ありとさきゝて、夜ひとよさけのみしければ、もはらあひこともせて、あけ
はおはりの國へたちぬへければ、男もをんなも、なみたをなかせども、あふ
よしもなし、夜やうくあけなんとするほどに、女のかたよりいたすさか
つきのうらに、

延喜十三年六月八日

五二〇

かち人のわたれはぬれぬにしあれば
とかきてすゑはなし、そのさかつきのうらに、ついまつのすみしてかきつ

またあふさかのせきはこえなん

あくれば、おはりへこえにけり、

〔江次第〕十四 踐祚上 即位 或云、在五中將、中 與 齋宮密通、令生師尚

真人仍高家于今不參伊勢、

〔古今和歌集目錄〕詞著 齋宮恬子内親王 戀三

文德天皇第二皇女、母同惟高親王、貞觀元年十月日爲伊勢齋王、十八年退之、

略、中 業平朝臣爲勅使參伊勢之時、密通懷妊、生高階師尚、依有顯露怖、令茂範

爲子、高階姓世隱秘、人不識之、

高階氏、茂範從五位上攝津守、師尚從四位下備前守、

〔尊卑分脈〕高階

茂範

師尚 從四上、右中將、備前但馬權守、元慶四五廿八卒、五十八歲、實在原業
平子也、密通齋宮、怡子内親王出生、依之此氏族子孫不參宮者也、

〔伊勢物語愚見抄〕下

怡子内親王は、文德天皇之御女、母は正四位下名虎

が女紀靜子といへり、惟高親王と同母也、清和御宇、貞觀元年十月、齋宮に立

給、十八年にて、伊勢を退出し給、延喜十三年六月八日薨とみえたり、業平子

師尚といひしは、この齋宮の腹也、師尚は、高階岑緒が子になれり、系圖など

にも、高階氏の人は、伊勢の神宮にまいらぬ事といへり、齋宮をおかしたて

まつりて、まうけたるものゝ子孫たるによりてなり、

十五日、丙郡司召、

〔貞信公記抄〕六月十五日、任郡司、

〔西宮記〕十二 藤 臨時己 凶事 九記云、天曆四十廿四、令伊奏昨所作勘文、

其文云、延喜十三六略、中十五日、郡司召云々、

〔西宮記〕四 郡司召仰 上卿著廳、申文請、内記挿宣命文杖、奉上卿、以空杖出入

十三年六月十四日、内記

十九日、庚御厨子所ノ乳分配ヲ定ム、

〔西宮記〕十 前 臨時丁 侍中事 又同所延木十三年六月十九日、定乳分配

文云、供御乳、日別三升一合、但依宣旨散用云々者、同 侍中群

延喜十三年六月十五日 十九日

五二一

郡司召宣
命ヲ内侍
ニ付ス

延喜十三年六月二十一日 二十二日

五二二

二十一日、辰除目、是日、雷鳴陣ヲ立ツ、雷亭子院ニ震ス、

〔真信公記抄〕六月廿一日、除目、雷鳴陣立、霹靂亭子院、藤原有時從者童死、

藤原有時
死ス
侍童震
式部輔
等
召シテ
問ス

廿二日、昨依二省不參、除目簿今日夜來、封之納外記、有仰、召式部輔、文章博士等陣頭、勘問評定所奏之詩不好、由、博士等特無所述、仍仰云、此度殊許、從今以後、若有如此事、可勘博士等、

二十二日、巳、上野介藤原厚載赴任セザルニ依リ、前司藤原扶幹ヲシテ、國務ヲ行ハシム、

〔符宣抄〕

別本

太政官符、上野國司

應令前介從五位上藤原朝臣扶幹行國務事

右檢案内、件扶幹朝臣、去四月十日、遭喪解任、新司介藤原朝臣厚載、依有身病、不得早向、國中雜務、必多擁滯、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣忠平、宣奉勅、宜新司未到之間、令件扶幹朝臣、行國務者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、左大辨橋朝臣（登朝）

左大史酒井宿禰

延喜十三年六月廿二日

是夏、大ニ早ス、

〔扶桑略記〕

醍醐天皇

夏月、天下旱魃、

〔日本高僧傳要文抄〕

一

靜觀僧正傳云、（增命）○中

十三年夏、天下大旱、和上千手

增命雨ヲ
祈ル

堂修法祈雨、至于竟日、油雲四合、甘雨滂沱、文、

延喜十三年是夏

五二三

延喜十三年七月一日 三日 十三日

七月辛丑 朔

一日辛丑 旬、官政、

〔日本紀略〕醍醐 七月一日、御南殿番奏、

〔西宮記〕十月後儀 延喜十三年七月一日、權中納言清貫、參議三人、於辨官

廳聽政、大納言藤原忠平、後參著陣座、依可有庭立奏、可覽官書、爰當日上清貫、

狐疑請處分於後參大納言、々々々定可覽當日上之由、午刻天皇御出云々、北

山抄異

三日癸卯、祭主大中臣安則ヲシテ、年穀ヲ大神宮ニ祈ラシム、尋テ、諸社ニ奉幣ス、

〔西宮記〕七月官政 延喜十三年七月三日、於神祇官齋院齋主大中臣安則、令祈

申年穀云々、

〔日本紀略〕醍醐 七月八日、奉幣諸社、

〔貞信公記抄〕 七月八日、有祈年幣使事、

〔西宮記〕四前田家本 八日文殊會 文殊會日、有伊勢幣、延喜十三 七八九

十三日癸丑、律師叡南寂ス、

紫宸殿出
御番奏アリ
大極殿出
庭立ノ奏アリ

法皇御出家ノ師

武德殿出御

裝束ノ事ヲ定ム

試樂

相撲御覽

〔日本紀略〕醍醐 七月十三日、律師叡南卒、

〔僧綱補任〕二興福寺本 律師叡南 七カ 月十三日入滅、

〔僧綱補任〕二興福寺本 權律師叡南 延喜五年八月八日任、律宗、東大寺、

戒壇和尚、禪定法皇御出家師、同十年三月廿二日轉正、

二十六日丙寅、相撲節、尋テ、追相撲アリ、

〔日本紀略〕醍醐 七月廿六日、丙寅、天皇幸武德殿、有相撲節、

廿七日、丁卯、又幸同殿、

廿八日、南殿有追相撲事、

〔貞信公記抄〕 七月一日、向相撲司、

七日、向相撲司、

十三日、向相撲司、

十七日、向武德殿、定裝束事、諸卿會集、

廿二日、向相撲司、今日試樂、

廿六日、幸武德殿、覽相撲節、左勝、宿職、

廿七日、幸同殿、右勝、宿職、

延喜十三年七月是月

延喜十三年七月是月

五二六

皇太子參入アラセラル

相撲人ニ祿ヲ賜フ

王卿以下ニ絹ヲ給フ

舞ヲ奏ス

廿八日、御南殿、覽追相撲、左右樂、日暮召内藏御服絹賜出居以上、皇太子參入、入夜還(五カ)條、

八月二日、召勝相撲人給祿、

〔西宮記〕

七月相撲大節 廿六日、辰四刻御武德殿、舊例、後日無行幸、延喜十三年有行幸、

〔西宮記〕

七月童相撲 延喜十三年七月廿八日、相撲御覽日、自内藏寮以足絹嬰

王卿已下、各二出居一疋、

〔九條年中行事〕

七月相撲節代儀 寂手勝則奏亂聲并舞、次左右各奏舞、喜十三年延喜十三年

年節日、勝方勝負舞之後、重又奏他舞

〔樗囊抄〕

年中行事 武德殿 延喜十三廿六、廿七日同、廿八日追南殿、

是月、相撲人入京ノ期ヲ定ム、

〔小野宮年中行事〕

七月相撲人入京時

以今月十日爲期、延喜十三年符、九條年中行事同、

七月十日ヲ期トス

八月大庚午朔盡

一日、庚午大風、被害多シ、尋テ、罹災者ヲ賑給ス、

〔日本紀略〕

醍醐天皇 八月一日、庚午、從申刻大風吹、折樹木、破舍屋、

五日、甲戌、風損人宅給物、依仁壽二年閏八月十二日例也、

〔貞信公記抄〕

八月一日、大風猛烈、公私屋舍多顛倒、

二日、今日有勅、遣使左右京、令檢被損風宅、爲賑給六位以下、

〔扶桑略記〕

二十三日醍醐天皇 八月朔日、大風、拔木發屋、

五日、甲戌、依仁壽二年閏八月十二日例、計遇害者、凡一千五百十七烟、賜物有

差、

〔河海抄〕

十一野分 玉鬘並六 延喜十三年八月一日、大風、古來相傳云、于今未

有如此之大風云々、

五日、甲戌位記請印、

〔西宮記〕

臨時六内印 延喜十三年八月五日、神位記、僧任符、同捺印事、北山抄同、

八日、丑釋奠、

〔日本紀略〕

醍醐天皇 八月九日、出御南殿、依釋奠論議也、

延喜十三年八月一日 五日 八日

五二七

六位以下ニ賑給ス

被害千五百十七烟

神位記僧任符同時ニ捺印ス

紫宸殿出御

延喜十三年八月十二日 十四日 二十三日

〔貞信公記抄〕 八月九日、上御南殿、依内論議也、

〔西宮記〕 八月 釋奠事 同十三年御記云、旬、王卿等參上時、皆少將先昇、而檢左近

陣年々日記、至此時少將後昇、

延喜十三年、立漆大床子、敷カクム筆云々、

十二日、辛巳季御讀經、

〔貞信公記抄〕 八月十二日、辛巳、御讀經始、

廿四日、癸巳、御讀經始、

○二十四日、御讀經ノ事、便宜合致ス、

十四日、癸未、政アリ、

〔扶桑略記〕 二十三 裏書 醍醐天皇上 八月十四日、癸未、公卿政後、著侍從所後、瑠（號）一隻飛

入取鼠、落中納言清貫卿肩、

二十三日、壬辰、主稅寮ヲシテ、式ニ依リ、過分ノ不堪佃田ヲ勘定セシム、

〔政事要略〕 五十七 交替雜事十七 雜公文事上

左大辨橘朝臣澄清傳宣、大納言藤原朝臣忠平宣、凡諸司行事、須據律令格式

正文、而主計寮勘畢、損戶年調庸例、與主稅寮勘過分不堪佃例、事出一式、勘例

主計主稅
端ノ勤例兩

兩端、仍令民部省定申件二寮勘例、彼省勘申云、主稅寮所申、隨官符旨勘來例也、主計寮所申、全存式文、已有公益者、今如勘申狀、若有上符之旨、理不盡者、主稅寮須執申其由、而偏稱符旨、不守法令、自今以後、任式勘定者、

延喜十三年八月十三日

左大史酒井真人奉

二十九日、戊戌、除目、是日、勅シテ儀式ヲ編錄セシム、

〔貞信公記抄〕 八月廿九日、除目、

〔符宣抄〕 別本

左大辨橘朝臣澄清傳宣、大納言藤原朝臣忠平宣、奉勅、檢諸司式、或云、事見儀式者、而伴式雖有草藁、未畢編錄、卷軸欠失、履行多疑、宜以彼草爲本、勘據外記（局カ）卷式、并諸司記件議式者、

延喜十三年八月廿九日

左大史大春日

〔本朝法家文書目錄〕

延喜儀式一部十卷

- 第一 祈年祭儀 春日祭儀 大原野祭儀 園井韓神祭儀 月次祭儀 釋奠講論儀
- 松尾祭儀 賀茂祭儀 大原野祭儀 園井韓神祭儀 月次祭儀 釋奠講論儀
- 食儀 大 殿祭儀

延喜十三年八月二十九日

延喜十三年八月二十九日

第二 踐祥大嘗

第三 同祭中

第四 同祭下

第五 僧綱位儀

第六 政官廳任擬

第七 同元拜賀皇太子儀

第八 最勝王經日踏歌日賜正女祿十儀

第九 二月十日春列見成錄儀已於三官廳同廿三日賜春夏季祿選目料儀五日

第十 授成選位記騎儀廿八日儀

第十一 授成選位記騎儀廿八日儀

第十二 授成選位記騎儀廿八日儀

第十三 授成選位記騎儀廿八日儀

第十四 授成選位記騎儀廿八日儀

第十五 授成選位記騎儀廿八日儀

第十六 授成選位記騎儀廿八日儀

第十七 授成選位記騎儀廿八日儀

第十八 授成選位記騎儀廿八日儀

第十九 授成選位記騎儀廿八日儀

第二十 授成選位記騎儀廿八日儀

五三〇

儀舉哀贈品位甲儀

第十 儀賜將渤海國使進王啓井信物儀

第九 儀賜將渤海國使進王啓井信物儀

第八 儀賜將渤海國使進王啓井信物儀

第七 儀賜將渤海國使進王啓井信物儀

第六 儀賜將渤海國使進王啓井信物儀

第五 儀賜將渤海國使進王啓井信物儀

第四 儀賜將渤海國使進王啓井信物儀

第三 儀賜將渤海國使進王啓井信物儀

第二 儀賜將渤海國使進王啓井信物儀

第一 儀賜將渤海國使進王啓井信物儀

延喜十三年八月二十九日

五三一

延喜十三年九月九日

九月庚子朔

九日申諸國不堪損田並ニ風水ノ害ニ依リテ、節會ヲ停ム、

〔日本紀略〕醍醐天皇 九月九日、戊申、止節會、依諸國申不堪并風水損也、略記扶桑

書江次第
異事ナシ

〔貞信公記抄〕 九月九日、宿職依有風損、停止節會事、但侍從以上賜菊酒如例、

今日以前、豫申損田廿國、不堪佃田廿四國、

〔九條年中行事〕九月節會事 延喜十三年九月九日、賜水魚、勅使右近衛少

將藤原俊蔭、上卿、挿笏、取水魚置臺盤上、召内豎令分下、勅使令坐、是也式部卿親王

取盞、令飲七杯云々、

〔西宮記〕九月宴 同十三年、依諸國損無宴、王卿著宜陽殿、召侍從奏見參、賜

菊酒、右少將藤俊蔭、賜水魚高坏、式部卿親王執盃、令飲七盃、

〔北山抄〕二年中要抄下事 延喜十三年九月九日、今年諸國多申不堪及

損田、不堪佃田廿四ヶ國、早損九ヶ國 因之停宴、王卿及次侍從已上、召宜陽殿西廂賜

菊酒、于時從御所右少將藤俊蔭、給水魚一高坏、式部卿親王把盃、給俊蔭朝臣、

七盃飲畢、奏復命云々、○江次第撰集
祕記異事ナシ

菊酒ヲ賜

水魚ヲ賜

損耗四十
七箇國

五三二

歌題

○諸國大旱ノコト、是夏ノ條ニ、大風ノコト、八月一日ノ條ニ見ユ、
上皇、陽成院ニ於テ、御歌合ヲ行ハセラル、

〔陽成院歌合〕 延喜十三年九月九日、

惜秋意

左勝

年毎にとまらぬ秋としりなからおしむ心のこりすも有哉

右

おしといひてうみへもさそへ飛渡る何れか秋のわたり成らん

左勝

あたなりと人やみるらん年毎にとまらぬ秋をおしむ心を

右

よそ人も秋はおしきを淺茅生のむへも聲々鹿やなくらむ

左

長月はこしひよりこそおしまるれ今は限の秋とおもへは

右勝

延喜十三年九月九日

五三三

とふ人もなき物ゆへに味氣なくいはんまもなくおしき秋哉

左

神なひの杜によをへて鳴鹿はすき行秋をおしみとめなん和歌抄
ニ、よみひさま
らすト見ユ、

右かつ

聲たてゝ鳴鹿はかりおしめとも過ゆく秋はとまらさり鼻

左ち

時雨つゝ草はもなへてもみつとも常磐の山に秋はとまれり

右

おしめとも秋はとまらすたつた山紅葉をぬさと空にたむけん

左

秋毎に咲すはあらねと女郎花ちりゆくことはおしくそ有ける

右かつ

めにみえて別るゝ秋を惜めはや大空のみを眺めらる蘭

左ち

おしと思ふ心を深きあまの河なかれて秋のとまる成らん

右

いつくへか秋はゆくらんつの國のなからへ行ときかは頼まむ

左

我宿のきくの花しも紅葉ねは過行秋もあらしとぞ思ふ

右ち

はかなくて過る秋とはしりなからおしむ心のなをあかぬ哉

左

いつこにか秋はいくらん跡をたにとめてゆきをは尋見てまし

右かつ

おほ方の秋はおしめとかひもなしなの長月をとめてしかな

左かつ

慕ひてもとめまほしきを今はとて秋の行らんかたそしられぬ

右

紅葉のにしきと見ゆる秋なればたつをおしとや鹿の鳴らん

左 かつ

惜めどもとまらぬ秋としりなからまどふ心はいかにせよとか

右

龍田河わたりし秋にあらぬかな流れて紅葉つねにみるへく

左

草村の心しどゝもにそわたるくれはしぬへき秋のおしさに

右

こりすまに逢ひもみる哉女郎花とまらすかへる秋としるらし

左

我こゝろ慰めかねつ身をすてゝおしむを秋のしゐてすくれは

右

紅葉のはかなき風にちらされは秋は過くともしられさらまし

左

とゝむれと今は限りと行秋のわりなくおしくおもほゆる哉

右

あふ坂の關の紅葉し心あらはくれて行くとも秋をとめなん

左 かつ

秋すくとねをも鳴哉深草のかけとたのめる虫ならなくに

右

いつかたに心をやらんあかすして過行秋を惜みとゝめて

左

まてといひてとまらぬ秋としりなから空行月のおしくも有哉

右

深山なる紅葉の錦色にいてゝおしむに秋のたゝはうからん

左

暮ぬへき秋をおしめは小倉山みねのもみちも色つきにけり

右

おしめども秋は止らぬ女郎花野へにおくれて枯れぬはかりを

左

紅葉のなかるゝ川ををしなへてせきそとゝむる秋のおしさに

右

ちらすなる心のまゝにをのかしゝわかるゝ秋をおしみつる哉

左

大空の心をまどふめに見えてわかるゝ秋をおしむ我身は

右

止むれどとまらぬ秋をおしむとて心にはかるなをやたちなん

左

身にそへてもたらぬ秋をおしむとて暮れむことこそ侘しかりけれ

右

紅葉つゝ時雨ふりいてゝ行秋を峯の朝きり立ちもとめなん

左

今はとて過行秋のかたみには風のをくれに紅葉をや見む

右

種なからとしはくれなむ紅葉をぬさどちらせる山の峯より

左

おしめともとまらぬ秋はときは山紅葉はてぬと見ても許さし

右

年毎にとまらぬ秋と思ひなはて（つ）もろき人もおしまさらまし

左（歟）

秋といへは今いくたひも残らぬをおしむ心もともにつきつゝ

右

おしむにもとまらぬ秋の立ゐては恨をのみやおもひ出にせむ

○本書和歌現在書目録和歌合略目録等ニ見エズ

十一日庚戌伊勢例幣

〔日本紀略〕醍醐天皇 九月十一日、行幸八省院、伊勢奉幣

〔貞信公記抄〕 九月十一日、行幸八省、伊勢幣使如常

十三日壬子諸節及ビニ孟ノ日、宴ニ預ル殿上人ヲ檢ス、

〔符宣抄〕別本

可待藏人所下住見參以（注カ）薄諸節、二孟日、天皇子御南殿賜飲時、殿上五位已上
事

延喜十三年九月十六日 二十五日 二十七日

延喜十三年九月十三日 宣

十六日、^{乙卯}上野勅旨駒牽、

〔西宮記〕

^{八月事}駒牽事

同十三九十六、牽上野御馬、依給人々奏慶、依雨无拜舞、

〔政事要略〕

^{二十三日}二十三

^{八月下}上野勅旨御馬事

延喜十三年九月十六日、

雨儀拜ナ

二十五日、^{甲子}止雨奉幣、

〔貞信公記抄〕

九月廿五日、甲子、雨師二社有奉幣、爲止雨也、

二十七日、^{丙寅}中納言藤原定方等ヲ伊勢ニ遣シテ、齋宮柔子内親王ノ病ヲ

問ハセ給フ、

〔日本紀略〕

^{天皇}醒醐

九月廿七日、丙寅、詔遣中納言藤原定方等於伊勢齋宮、勞

問内親王之病惱、

○柔子内親王ノ病ニ依リテ、大神宮ニ奉幣スルコト、十四年十一月二

十七日ノ條ニ見ユ、

十月 己巳 朔

一日、^{己卯}巳旬、

〔西宮記〕

^{十月}旬

番奏、^{雨儀立承明門}壇他皆效之、^{關司取机經西殿參上}、^{延喜十三年十一月、依}雨付内侍所云々、

三日、^{辛未}未是ヨリ先、東大寺、參議藤原有實ト、因幡高庭莊ヲ爭フ、是日、之ヲ

訴フ、

〔正倉院文書〕

^{東南院文書}七帙第四卷

〔延喜〕^{延喜表}延喜十三知家事以下奥書端

端紛失了、

此難定、須遣彼此公驗、在地之國郡、依實辨糺、未然之間、不能返納、乞衙察之、以

牒、

延喜十三年三月廿三日

知家事八戸善根

書 吏勝

書 吏闕

令長岑、^{貞維力}貞維

代前山城大目土形

御監散位深江忠人、^印○本書去邪行正ノ

延喜十三年十月一日 三日

五四一

番奏

按察家牒

延喜十三年十月三日

〔正倉院文書〕

東南院文書 肆櫃第壹卷

又

按察家牒 東大寺衙

不能忽返納高庭庄田之狀 在因幡國高草郡

牒件田カ依先日衙牒狀送カ晏子內親王カ之由奉牒已了而今衙今月廿三日

須隨牒狀返納件田然而今尋家副代々本公驗賣家

由既以之不能返納但爲衙被相妨之由牒送彼內親家即令辨定事

由然後將以奉牒乞衙察之令勒狀以牒

延喜十三年五月一日

知家事八戶善根

書 吏勝

書 吏闕

令長岑貞雄

代前山城大目土形

御監散位深江忠人印三十三顆ヲ踏ス

按察家牒 東大寺衙

因幡國高庭庄田之狀

本財主晏子內親王家牒狀

牒件庄田須依衙牒狀返納之而依先日衙狀可被辨定之由牒送本財主晏子內親王家已了而于今未被辨定今須隨彼親王家牒狀差專使將奉牒乞衙察之以牒

延喜十三年八月廿九日

知家事八戶善根

書 吏勝

書 吏闕

令長岑貞雄

代散位土形

御監散位深江忠人印二十六顆ヲ踏ス

東大寺

請蒙官裁任寺家本公驗領掌因幡國高草郡高庭庄之狀

合田地沫拾參町捌段沫拾伍步

副進寺家公驗案文一卷

領掌人今陸奥出羽按察使藤原朝臣家并紀高子等

右謹檢案内件庄地去天平年中本願感眞聖武天皇所施入給也即注載寺家驗記帳而去延曆廿年當時僧綱三綱等不經官裁誤賣却於他人因茲後任司

延喜十三年十月三日

五四三

寺家公驗案文 領掌人藤原有實 聖武天皇ノ施入 官裁ヲ經ズ他人ニ

東大寺訴狀

賣却ス
承和五年
ノ官符

等、具注事由、可返領之狀、言上於官、則太政官去承和五年五月五日、差使寺家俗別當正六位上石川真主、可勘領之由、下符彼國、其文云、凡寺家田園、僧綱三綱等、輒非出入物色、若有賣却者、須申官、然後沽却、而偏沽放寺財、事意相違、今須還爲寺地者、爰國郡與使真主等、同共勘領返納、言上亦了、而後後司等、漏忘不領、經數十年之間、更爲他人所領也、爰前別當時、牒送在地國郡、令勘其勘文云、領掌人左衛門督藤原朝臣家并紀高子等云々、未經言上、爰智愷、以去延喜十二年、被任別當、就事之後、任本公驗、可被返納之狀、度度牒送彼家、而返牒云、件田以去寬平七年、從晏子內親王家買納、卽立國郡公驗、領掌既經多年、無有他妨、今事情頗難定、須彼此公驗、依實辨糺、未然之間、不能返納者、因茲令持寺家公驗、重以牒送、而又返牒云、家須隨牒狀返納、然而尋案內、彼內親王家、副代代本公驗、賣寄於家之由、既以分明、仍不能返納者、方今案事情、彼家所陳、頗乖理致、何者、彼家須相合彼此公驗、論定是非、專任正理、而偏稱有彼內親王家公驗、曾不以被承引、暗知內親王家之賣與彼家之公驗、是伺寺家不領之隙、玆輩所賣、彼親王家之券、望請官裁、任本願皇帝施入公驗、返納寺家、將爲佛僧供之資、仍副寺家公驗案文、謹請官裁、謹言、

寬平七年
晏子內親
王家ヨリ
買納ス

玆輩ノ賣
ル所

延喜十三年十月三日

別當傳燈大法師位（目下下向）智愷

上座威儀師傳燈大法師位「離世」

都維那傳燈法師「觀實」

寺主傳燈法師位會祿○本書、東大寺印三四類ヲ踏ス

○因幡國、東大寺ト參議藤原有實ト、ノ同國高庭莊內所領執論ノ官裁ヲ請フコト、五年十一月二日ノ條ニ見ユ、

八日子丙更衣藤原能子ヲ女御ト爲ス、

〔日本紀略〕醍醐天皇 十月八日、丙子、以更衣藤原能子爲女御、

〔一代要記〕醍醐天皇 女御正五位下藤原能子 延喜十四年十月八日補之、

元更衣、右衛門督定方女、

十日寅興福寺維摩會、

〔維摩會講師研學堅義次第〕延喜十三年、癸、講師玄日年六十八、藤五十、去年十月廿一日宣、廿三日講、巨

氏能登 研學常源年四十六、藤廿五、

〔三會定一記〕 一、同十三年延喜、去年十月宣、講師玄日延曆寺、堅義常源、次朝豐

十三日巳殿上菊合、

延喜十三年十月八日 十日 十三日

延喜十三年十月十三日

五四六

〔扶桑略記〕

醍醐天皇上

十月十三日、殿上侍臣各分左右獻菊和歌各十首

○歷代編年集成同

〔九條殿御記〕

殿上菊合

天曆七年十月廿八日、中略又仰云、去延喜十三年、侍臣獻菊、彼日只左衛門督藤原朝臣定方一人候、仍不相分左右、

〔古今著聞集〕

草十九

延喜十三年十月十三日御記云、仰侍臣令獻菊花各十

菊花各十本ヲ獻ズ

十番

十二月九日負態

本、分一二番相爭勝劣、賭以申時、各方領花參入、一番入自仙花、二番入自瀧口、次第進花立庭

〔八雲御抄〕

作法部

一作者試歌合事、

延喜十三之内裏菊合、左七人皆入之、與風季綱、是則、右兼輔、伊衡、貫之、躬恆等也、○中略

作者七人

一物合、次歌合、

内裏○中略

勝負ナシ

〔新古今和歌集〕

冬歌

うへのをのことも、菊合し侍りける次てに、

御製

延喜御歌

〔續古今和歌集〕

冬歌

同しこゝろを、

延喜御歌

散り果て、花なき時の菊なれば移ろふ色の惜くもある哉、○續千載和歌集

集ニ、藤原興風ノ作トシ、菊ナ花ニ作ル、

〔續千載和歌集〕

秋歌下

延喜の御時、菊合に、

藤原興風

藤原興風

散り果て、花なき時の花なれば移ろふ色の惜しくもある哉、○萬代和歌集

ニ、詞書ヲ、延喜十三年、内裏菊合ニトシ、三句以下ナ、菊なればいくたひ折てかさしきぬらむニ作ル、

〔玉葉和歌集〕

秋歌下

延喜の御時の菊合に

平希世

平希世朝臣

〔新拾遺和歌集〕

冬歌

延喜十三年の菊合に、○夫木和歌抄、延喜十三年十月、内裏菊合ニ作ル、

延喜十三年十月十三日

五四七

延喜十三年十月十三日

坂上是則

菊の花冬の野風に散りもせて今日までとてや霜は置く覽

〔夫木和歌抄〕十四 秋部五 延喜十三年十月三日、菊合歌、

坂上是則

なみとのみうちこそみゆれすみのえのきしにのこれる白菊の花

〔夫木和歌抄〕十六 冬部一 延喜十三年十月、内裏菊合、

藤原伊衡

參議伊衡卿

ひとくさにさけるかひなし菊のはあうつりて後は色かふなゆめ

〔躬恆集〕延喜十三年十月十五日、内裏菊合に、右大辨の仰によりて奉る、

菊の花こきもうすきも今までに霜のおかすは色をみましや

初まくれ降そめしより菊の花こかりし色に又そはりぬる○夫木和歌抄

下句ナなかりしえたそ又そはりけるニ作ル

もとよりの色にはあらねと菊の花色にいて、も年へぬるかな

あたなれと我にはきくの花のみてうつろふ色のこさまさりける

君かため心もゑる、初霜のおきて残せるきくにそありける

凡河内躬恆

五四八

十四日、主尚侍從三位藤原滿子二、四十賀ヲ賜ヒ、位一階ヲ進ム、

〔日本紀略〕醍醐 天皇 十月十四日、壬午、於内裏、賀尚侍從三位藤原滿子四十算

即以神筆、給正三位々記、

〔西宮記〕十二 臨時已 賜女官賀事 延喜○延喜ノ上河海抄ニ、十三年

十月十四日、○此下河海抄ニ、是日賜尚侍藤原朝臣卅算賀、於西方未剋撤西

庇障子、渡殿菰、○河海抄ニ、西廂自南第四間鋪御座、西面第五間鋪尚侍座、南

面第六間立棚厨子、有覆四基、一基置薰物宮各二合、一基置納女裝束宮四其

東北施四尺屏風四帖、已上二具、並

申剋尚侍藤原朝臣參上、即供御膳、女藏人等賜尚侍饌、用樣器折敷、打鋪等鋪

七人、持自北方至典侍宜子朝臣給盃四度、訖、召中務卿親王、大宰帥親王、左

下、女藏人等轉賜之、

衛門督藤原朝臣、即參進、即依仰各進盃、其後賜御盃云々、其後侍臣依仰奏絃

歌、主上彈和琴、中務卿等、帥琵琶、克明親于時藤原朝臣、申事由權中納言藤原

朝臣、勅許之後、藤原朝臣參入、把蓋給侍臣等、夜闌之後、被仰云、宜流盃之次、聊

獻倭歌、左衛門督、召伊衡兼茂等、令上題、即伊衡上題、侍臣唱歌、次尚侍、敍正三

位、神筆、即親王已下及藤原氏大夫奏賀喜、權中納言被聽昇殿、其後絃歌數曲、

五四九

宸筆ノ位
記ヲ賜フ
清涼殿鋪
設

尚侍ノ座
ナ南面ト
ス

主上和琴
ヲ彈シ給

和歌ヲ獻
ズ親王以下
慶賀ヲ奏
ス

清貫昇殿
ヲ聴サル
祿ヲ給フ

屏風四帖
ヲ新調ス
其繪ト歌

藤原兼輔

紀貫之

延喜十三年十月十四日

五五〇

至曉給祿親王納言御衣、尙侍從者、聊給饗饌、以內藏（寮）絹卅疋給之、其中高品者六人、加給掛衣、

〔殿記〕建仁三年十一月廿三日、丁亥、今日於上皇二條御所、被賀入道正三位

（藤原俊成）釋阿九十算、公家賜臣下賀之例、○中延喜十三年、天皇於清涼殿西面、賜尙侍

滿子四十賀、件等例、年序久隔、記錄不詳、粗見三代實錄、延喜御記等、多以准據

之例被計行也、○中件屏風四帖被新調、延喜例、四帖被調、四季各一帖也、

〔權中納言兼輔卿集〕こないしのかみの賀、みかどのせさせ給ふに、屏風の

繪、雲井にかりの飛所、

白雲の中にまかひて行雁も聲はかくれぬ物にそ有ける

〔新古今和歌集〕六冬歌 延喜十四年、尙侍藤原滿子に菊の宴給はりける時、

中納言兼輔

菊の花手折りては見し初霜のおきなからこそ色増りけれ

〔紀貫之集〕一 延喜十三年十月十四日、尙侍四十賀屏風歌、依内裏仰奉之、

まねくとやきつるかひなく花薄ほに出て風のはかるなりけり

人家のほとりに、なかれたる水に、くれなるの木有、

水そこに光うつれは紅葉の色も深くや成まさるらん

雁鳴を聞

秋きりは立わたれども飛かりの聲はそらにもかくれさりけり

月のなか

から衣うつ聲きけは月のなかまたねぬ人をそらにしる哉

紅葉の山にみちて、しくれのふりそゝきおつる、

足引の山立くもりしくるれと紅葉はなをそてりまさりける

おこなひ人の馬よりおりてしはし松のもとにやすむに、岸ちかき

石に浪のしきりによせたる、

我のみやかかけとは頼む白浪のたえす立よるきしの姫松

〔躬恆集〕○上歌仙家集本 延喜十三年、内侍のかみの賀の屏風の歌、

あたらしく我のみやみん菊の花うつらぬさきにこん人もかな

〔玉葉和歌集〕十五雜歌二 尙侍藤原朝臣滿子四十賀、大納言清貫し侍ける屏

風の歌に、石井あるところを、 伊勢

わくかこそめには見ゆれど我宿の石井の水はぬるまさりけり

延喜十三年十月十四日

五五一

凡河内躬

伊勢

延喜十三年十月十五日 二十五日

五五二

十五日未、癸法皇、文人ヲ召シテ、詩ヲ賦セシメ給フ、

〔日本紀略〕天皇 十月十五日、太上法皇於亭子院召王卿文士等、令賦菊潭

水自香詩、俗人奏樂、

〔江談抄〕四

寒瀨帶風薰更遠、夕陽燒浪氣還長、菊潭水自香

右承句、詞意清新、能傳家樣、可謂拾虬龍之片甲、得鳳凰之一毛者也、延喜聖主、依太上法皇詔、令評定宴詩、令奏給、御書某言、右近權中將衆樹朝臣、持菊潭水自香、應製詩示之、兼傳詔旨、評定此詩篇可否、臣素無別涇渭之清濁、何足知詩語之識議、一臨藻鑒、推辭露膽、而天旨重降、無地逃命、忘其妄動、鈇彼優劣、抑詩雖舉、編要在被煩辭、故摘一兩句、次第高下而已、無可無不可者、猶反覆不注、勒之、某謹言、

二十五日巳醍醐寺ヲ以テ、定額寺ト爲ス、

〔醍醐寺要書〕上 山城

太政官符 治部省

應以醍醐寺（爲此力）定額寺事

聖寶ノ建立

在山城國宇治郡笠取山醍醐峯

右少僧都法眼和尚位觀賢奏狀、稱、伴寺故師僧正法印大和尚聖寶所建立也、（位此力）先師昔振飛錫、遍遊名山、翠嵐吹衣、何巖不踏、白雲拂首、何岫不探、（然則徒下同之）徒然則刪遁世長往之蹤、未應令法久住之地、適以貞觀末、攀昇此峯、欣然如歸故鄉、嘿爾思建精舍、採樹下草、結成菴居、拂石上苔、安置尊像、地勢相應、雖悅佛力之多靈、天時未來、還歎我功之晚熟、既而至于延喜七年、僧正奉勅、初於此寺、奉行御願造佛像事、同九年秋、閻浮緣盡、寂滅樂催、鵲色爲之變林、鷄足忽以閉石、其後亦依御願、造作佛堂、便勅觀賢、得預其事、方今新堂雙宇、揭焉煙峯之巔、尊容連光、炳然寶殿之內、則知此寺興隆、待明時而開運、先師念願、積多年以畢功、伏望、以伴道場爲定額寺、永修御願、護持國家、但任寺司者、拔僧正門徒之中堪職者、將以舉用、更不爲僧綱、及講讀師所攝、其門徒爲僧綱者、更非制限、然則不出一門之中、可傳萬代之外者、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣忠平宣、奉勅依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

延喜十三年十月廿五日

聖寶ノ門徒ヲシテ寺司タル

延喜十三年十月二十五日

五五三

延喜十三年十月二十五日

五五四

僧綱牒醍醐寺司

應以彼寺爲定額寺事

在山城郡宇治郡笠取山醍醐峯

牒立蕃寮牒備治部省符備被太政官延喜十三年十月廿五日符備少僧都法
眼和尚位觀賢奏狀備件寺故師僧正法印大和尚位聖寶所建立也先師昔振
飛錫遍遊名山翠嵐吹衣何巖不踏白雲拂首何岫不探徒然則刪遁世長往之
蹤未應令法久住之地適以貞觀末攀昇此峯欣然如歸故鄉嘿爾思建精舍採
樹下草結成菴居拂石上苔安置尊像地勢相應雖悅佛力之多靈天時未來還
歎我功之晚熟既而至于延喜七年僧正奉勅初於此寺奉行御願造佛像事同
九年秋閏浮緣盡寂滅樂催鵲色爲之變林鷄足忽以閉石其後亦依御願造作
佛堂便勅觀賢得預其事方今新堂雙宇揭焉煙峯之巔尊容連光炳然寶殿之
內則知此寺興隆待明時而開運先師念願積多年以畢功伏望以件道場爲定
額寺永修御願護持國家但任寺司者拔僧正門徒之中堪職者將以舉用更不
爲僧綱及講讀師所攝其門徒爲僧綱者更非制限然則不出一門之中可傳万
代之外者大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣忠平宣奏勅依請者省宜

立蕃寮牒

承知依宣行之者寮宜承知依件行之者僧綱寮狀依例行定者寺宜承知依件
行之故牒

延喜十四年正月廿一日

從儀師三勝

少僧都

大威儀師

少僧都

大威儀師

律師

威儀師雲秀

權律師

威儀師

權律師

威儀師

權律師

威儀師

權律師

權威儀師慶進○東大寺具書遷ニ作ル

權律師禪安

威儀師在判

律師○東大寺具書權律師ニ作ル下同

威儀師

律師

威儀師

權律師

○十四年正月二十一日ノ僧綱牒便宜合敘ス

延喜十三年十月二十五日

五五五

東宮御註孝經ヲ讀ミ給フ、

〔日本紀略〕醍醐天皇 十月廿五日、癸巳、皇太子始讀御註孝經、

〔貞信公記抄〕 十月廿五日、癸巳、東宮始讀御註孝經、

○東宮始メテ御註孝經ヲ讀ミ給フコト、十一年十月二十二日ノ條ニ見ユ、

十一月 己亥 朔 盡

一日、己亥、日食、

〔日本紀略〕醍醐天皇 十一月一日、己亥、日蝕、廢務、○扶桑略記

七日、乙巳、京都大風、

〔日本紀略〕醍醐天皇 十一月七日、乙巳、大風猛烈、左馬寮顛倒人死、

〔扶桑略記〕醍醐天皇 十一月七日、乙巳、自酉至子大風猛烈、多破京中屋

舍、右馬寮屋轉倒、犬、○日本紀略後愚、春日祭供奉已穢、

九日、丁未、勘解由使ヲシテ、前肥前守小野保衡ノ雜怠ヲ勘判セシム、

〔政事要略〕五十九 交替雜事十九

勘解由使勘判抄○中

肥前前司小野保衡、延喜五年正月、三、九日得替

國分二寺堂舍資財無實破損、

右新司藤原朝臣高堪、延喜十一年八月廿六日解云、今檢延喜十年七月十日詔書、今日味爽以前、大辟已下、已發覺、未發覺、已結正、未結正、罪无輕重、皆咸赦除、其犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、強竊二盜、常赦所不免者、不在此限、但一度竊

延喜十三年十一月一日 七日 九日

五五七

廢務

春日祭ノ供奉人穢ニ遭フ

延喜十年ノ詔書

延喜十三年十一月十四日

五五八

二月ノ官符

盜計贓三端已下者特從放還又延喜六年以往調庸未進在於民身者咸以免之者名例律云會赦者盜詐枉法猶徵正贓餘非見在者從赦免者太政官今年二月十五日符傳赦後在任之吏赦前難怠皆悉原免者伴國分二寺堂舍資財无實破損等前司執狀无實七重塔燈爐并大破灌頂等前々以往時之事也其中造塔料者講師正意受取了者雖然邦隆以前代々放還已了已知辨濟不可更論新注此狀無實者失由不明事涉盜犯須見任令前司并同任吏講讀師三綱等填待了放還破損者或只注大中破皆是少破也須後司相承以例料修理之佛像資財等破損者見任申請通三寶料修理莊嚴莫拘前司

延喜十三年十一月九日

十四日壬子大原野祭

〔貞信公記抄〕十一月十四日壬子參大原野

忠平參向

十二月 戊辰 朔

十一日 戊寅 神今食

〔西宮記〕六月 神今食 散齋日在穢內行神事例

延喜十三年十二月御中院下輦掃部司申少納言不候鈴云々有定遣少納言

左右近將監等取鈴也云々去八年有此事仍遣少納言亥二刻所司供神座其

後少納言淑光領鈴奉進掃部司傳取置殿內云々

〔北山抄〕三年 中要抄下 六月 鈴御辛櫃追取遣例延喜八年同十三年行幸後少納言主

等取遣之鈴近衛將監

十五日 壬午 大學寮晋書竟宴

〔日本紀略〕醍醐天皇 十二月十五日壬午小雪下大學寮有晋書竟宴

十九日 丙戌 御佛名

〔日本紀略〕醍醐天皇 十二月十九日御佛名

〔東寺長者補任〕一 御記云十二月十九日御佛名亥一剋法師等參上而少

僧都觀賢依病俄辭導師不參內仍以景詮法師為初願導師云々

〔西宮記〕十二月 御佛名 天曆四十二廿三御佛名○中延喜十三年 例御導師景詮

延喜十三年十二月十一日 十五日 十九日

五五九

神嘉殿出御

導師ニ祿ヲ賜フ
侍所出御
盃酒管絃
アリ

〔政事要略〕二十八年 御佛名事二十八 延喜十三年十二月二十九日有御佛名、廿一日竟夜、御導師景鈴卷誦錫杖之間、調琴及和琴、導師和音韻如水乳、仍給御阿古女恒佐朝臣給之、僧退出下之後、天皇出御侍所、有盃酒管絃事、次給祿有差四位綾絹下、

二十四日、辛卯荷前、

〔貞信公記抄〕 十二月廿四日、辛卯荷前、

二十九日、丙申是ヨリ先、豐前守佐八幡宮專當、國守藤原是房逃亡ス、是日、權掾八多有臣ヲ以テ、專當ト爲シ、修造ノ事ヲ勤メシム、

〔石清水文書〕

五田中家文書附錄
宮寺緣事抄字佐四官符等

太政官符 大宰府

應以豐前國權掾八多有臣爲專當、令勤彼國八幡大井宮造作事

右得彼府去八月廿日解狀稱、太政官去延喜十一年四月廿二日符稱、彼府去延喜九年十二月廿三日解稱、豐前國解稱、檢案内、伴宮御殿雜舍等以卅年爲限、改作式例、依太政官去元慶四年十二月廿五日符旨、改造、寬平元年七月十三日造了、而改造之後、未及年限、去延喜二年正月十一日得大井宮移稱、宮殿

延喜十一年官符

三十年改造ノ期トス

元慶四年官符改造後早ク破損ス

是房介藤原泰房ノ爲ニ訴ヘラル

破損、雨露濕漏、四方門玉垣等皆悉顛倒、早被言上、將令改造者、國司加實檢、所陳有實、仍言上、大宰府差使實檢、事已有實、仍修理之狀、謹請官裁者、右大臣宣奉勅、宜仰下府司、早令修理者、府差前主神大中臣伊定令行事、而伊定徒積年紀、不勤造作、破損彌倍、望請停修理事、被遣改造使、令勤作事者、同宣奉勅、止停遣使、一向令國司行修造事者、府宜承知、依宣行之、仍須彼國守藤原朝臣是房專當其事、早令畢作事、凡改造之期、限定立程、而造了之後、速令破損、是則府并國司不加實檢、造宮使等疎略之所致也、自今以後、不得重然者、於是守是房專當其事、採備材木之間、爲介藤原泰房等被訟告、推問事由、已爲實造、依法斷罪、已經言上、而間去二月十四日脫禁逃亡、其由言上、日可了カ方今專當之人、已雖逃亡、仰下國宰、令勤作了、然而專當之官、若無其人、造作之勤、恐有稽壅、望請官裁、被定專當、國司早令畢作事者、大納言正三位兼行右近衛大將藤原朝臣忠平宣奉勅、雜言彼國守藤原朝臣是房事之間、以權掾八多有臣宛專當、令勤造作事者、府宜承知、依宣行之、符到奉行、

左中辨源朝臣

左大夫酒井宿禰

延喜十三年十二月廿九日

延喜十三年十二月二十九日

延喜十三年十二月二十九日

五六二

○豐前守藤原是房ヲ專當ト爲シ、宇佐八幡宮ヲ修造セシムルコト、十一年四月二十二日ノ條ニ見ユ、

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

世系

道真ノ子

是歲、大和國ヲシテ、東大寺安居ノ布施稻ヲ、寺家修理料ニ宛テシム、

〔東大寺要錄〕

雜十章之餘

新記廿卷

延喜十三年、仰大和國、每年下行東

大寺大佛安居布施稻、令宛寺家修理料、

左少辨從五位上菅原高視卒ス、

〔尊卑分脈〕

菅原氏

菅家

高視 左少辨、大學頭、山城守、右大辨、從四上、

雅規 略ス、

緝熙 肥後守、從五下、

文時 略ス、

庶幾 大監、物大學頭、從五下、

〔葉黃記〕

寶治元年四月廿七日、庚戌、

勸申文章得業生菅原在匡、與同公長座次相論事、

一依兼國可被定上下薦哉事、○中

寬平五年二月四日、癸酉、以蔭孫正六位上菅原朝臣高視、爲文章得業生、同

延喜十三年是歲

五六三

延喜六年
徵サレ

延喜十三年是歲

五六四

六年八月十六日、任參川掾、件國掾相當從七位上、○寶治元年三月二日、大外記中原師光勸申
〔北野天神御傳〕長子高視、博學洽聞、文花承家、補文章得業生、未及成業、俄敍從五位下、爲大學頭、兼右少辨、左轉土左介、延喜六年冬、有詔徵之、授以本官、進爵一階、年三十九年、

○高視、父道真ト共ニ左遷セラル、コト、元年正月二十五日ノ條ニ、本官ニ復シ、爵一階ヲ進メラル、コト、六年是冬ノ條ニ見ユ、

竹生島社
ルノ鐘ヲ鑄

年末雜載

神社、

〔竹生島緣起〕(延喜)同十三年四月十一日、寺家僧慶照、基然等、爲濟三界六道、普引智識、鑄造銅鐘一口、高五尺、

佛寺、

〔貞信公記抄〕十月十八日、丙戌、極樂寺菊會、

〔正倉院文書〕東南院文書 壹櫃第三卷

太政官牒、東大寺、

應以權上座威儀師傳燈大法師位離世補正員事

右得彼寺牒、謹案、太政官去延喜十一年十月廿六日符、以件威儀師離世任權上座、令濟雜務、但正員上座傳燈大法師位慶贊秩滿之後、不補他僧、便以權任將爲正員者、仍件慶贊秩滿之替、所請如件者、大納言正三位兼行右近衛大將春宮大夫藤原朝臣忠平宣、依請者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

延喜十三年二月廿二日 正六位上行左少史御船宿禰(皇下品)常方牒

正五位下守左中辨源朝臣○本書太政官印 十四類ヲ踏ス

延喜十三年雜載

五六五

慶贊ノ替

極樂寺菊會
離世ナ東大寺上座ニ補ス

公家、

〔類聚符宣抄〕

七文師長上等事

太政官符、式部省、外、

從七位下大宅臣安直

右大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣忠平宣、件人宜補權挑文師若湯
坐家恆死闕之替者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

左大辨(登時)

左少史

延喜十三年十一月十日

〔類聚符宣抄〕

十使上日

上召使眞髮部常雄去年十月一日遣使、今年十一月五日歸京、

右大納言藤原(皇弟)卿宣、件人宜給以往當番上日者、

延喜十三年二月廿六日

少外記伴久永奉

諸家、

〔貞信公記抄〕

正月七日、有產事、

十一月廿七日、乙丑、今夜閑院君著裳、

權挑文師
ヲ補ス

上召使ニ
上日ヲ給フ

忠平ノ家
ニ出產アリ
閑院君著裳

忠平宇治
參向延引
忠平西五
條院ニ歸ル

忠平參內
忠平貞ノ
宅ニ宿ス

鴉鼠ト共
ニ清貫ノ
肩上ニ墜
ツ
小鳥數日
空ニ滿ツ

雜、

〔日本紀略〕

醍醐天皇

八月十四日、巳刻從巽角鴉一雙飛入、一鴉取鼠飛過之間、

共墜于權中納言藤原清貫肩(可駭)上、謂怪○扶桑略、

十二月卅日、丁酉、微雨時々、從去廿三日、小鳥滿空、來往四方、

〔扶桑略記〕

二十三裏書

十二月三十日、丁酉、自去廿三日、小鳥滿空、往來四

方、

延喜十四年甲戌

正月大 戊朔 盡

一日、戊戌節會、去年ノ凶作ニ依リテ、朝賀ヲ停ム、

〔日本紀略〕醍醐天皇 正月一日、戊戌、停朝賀、依去年不登也、

〔日本紀略〕醍醐天皇 延喜十三年十二月卅日、丁酉、中依年穀不登、停明年朝賀、

〔貞信公記抄〕 正月一日、宴會如例、停止朝拜、

〔扶桑略記〕醍醐天皇 正月一日、戊戌朝賀停止、依嘉祥二年、去十一年正月二日ノ等、年穀不登例也、
條參看

三日、庚子仁和寺ニ朝觀行幸シ給フ、

〔御遊抄〕二朝觀行幸 同十四年正月三日、幸仁和寺、御記

四日、辛丑東宮朝觀アラセラル、

〔貞信公記抄〕 正月四日、東宮朝觀、今年初從建春門參入、

七日、甲辰節會、敍位、

延喜十四年正月一日 三日 四日 七日

初メテ建
春門ヨリ
參入アラ
セラル

延喜十四年正月七日

〔貞信公記抄〕正月七日節會如例、雨儀、

〔公卿補任〕^四

參議從四位下橋澄清、^五正月七日從四位上、

從四位上藤保忠、^{廿三}同十四正七從四位上、

〔公卿補任〕^四

延喜十九年 參議從四位上橋良殖、^六同十四正七從四下、

〔公卿補任〕^四

延喜二十一年 參議從四位下藤邦基、^八同十四正七正五下、

二月三日昇殿、

〔公卿補任〕^四

延長元年 參議從四位下藤兼茂 同十四正七正五下、^〇古今

目錄

〔公卿補任〕^四

天德二年 參議從四位上藤元名、^七十四正七從五下、^{陽成院御}

給

〔外記補任〕^二

大外記從五位上阿刀春正 正七敍從上、

從五位下紀貞助、^三正七敍、

〔類聚大補任〕^天

醍醐 祭主安則 正月七日敍正五位下、

〔古今和歌集目錄〕^{庶人}

酒井人眞 十四年正月七日敍外從五位下、

八日、御齋會、是日、女敍位ヲ停ム、

〔日本紀略〕^天

醍醐 正月十四日、辛亥、御齋會畢、有内論議、

〔貞信公記抄〕

正月八日、無女敍位、

十二日、^酉除目、

〔公卿補任〕^四

中納言從三位藤道明、^九右大將、正月十二日兼東宮傅、

參議正四位下藤清經、^六右衛門督、正月十二日兼讚岐守、

從四位下橋澄清、^五左大辨、勘解由長官、同十二日兼播磨權守、

〔公卿補任〕^延

喜十九年

參議從四位上藤玄上、^六同十四正十三兼伊與權守、

從四位上橋良殖、^六同十四正十二日近江權守、

〔公卿補任〕^延

喜二十一年

參議從四位下藤兼輔、^四同十四正十二兼近

江介、^〇三十六人

〔公卿補任〕^天

曆五年

參議從四位上源正明、^九十四正十二美乃守、

延喜十四年正月八日 十二日

〔外記補任〕 二

大外記從五位下紀貞助三五正十二日任豐後守、

伴久永 正十二任、

〔古今和歌集目錄〕

庶人

酒井人真

〔延喜〕

十四年正月十二日任土佐守、

〔魚魯愚鈔〕

五諸二合

親王巡給年給任目例、別給臨時給目雖連綿除之

〔延喜〕同十四年正月

信濃權少目伴春厚 元良親王給、

〔貞信公記抄〕 正月十日、除目議始、

十二日、除目、此夜宿職、

〔西宮記〕

二前田家本 除目

延喜十四年正月十二日、前石見守藤有秋爲

常陸介、前但馬介藤顯相爲讚岐權介、兼有秋未得解由、顯相解由未下前司、殊拔任之、

十四日、亥辛僧綱ヲ任ズ、

〔僧綱補任〕

二興福寺本

權律師增泰 正月十四日轉正〔宋書〕七十三

十六日、丑癸節會、

〔貞信公記抄〕 正月十六日、節會如例、

元良親王
年給

未得解由
者ヲ拔任
ス

十七日、寅申射禮、

〔貞信公記抄〕

正月十七日、依雪不幸豐樂院、仍公卿〔斷文カ〕

十八日、左勝親王公卿等會集垣下、皆有被物、

二十日時、去年ノ凶作ニ依リテ、内宴ヲ停ム、

〔日本紀略〕

天醍

正月廿日、丁巳、停内宴、依去年不登也、

二十五日、戌主外記政始、

〔貞信公記抄〕

正月廿五日、壬戌、外記政始、

二十七日、子申豐受大神宮禰宜等、新撰本系帳ヲ上ル、

〔皇字沙汰文〕

上

延喜十四年正月、官進本系帳云、二宮神主列署

度會神主氏解申進氏、新撰本系帳事、

彦久良爲命、取要、自餘略之、

子大若子命、一名大幡主、

右命、卷向珠城宮御宇、〔聖七〕天皇御宇也、仕奉、支爾時越國荒振兇賊阿彦在、天不

從皇化、取平、仁罷止詔、天標劔賜給、支即幡主罷行、取平、天進之、自時天皇勸

延喜十四年正月十七日 二十日 二十五日 二十七日

延喜十四年正月二十七日

五七四

元慶二年
神祇官符

歡給天大幡主名加給支亦曰皇太神又倭姬命乃御夢爾教覺給久吾一所
耳坐波御饌毛安不聞食丹波國與佐小峴比沼魚井坐道主子八乎止女乃
齋奉御饌都神止由居大神乎我坐國欲止誨覺給支爾時大若子命乎差使
朝廷爾進上天御夢狀乎令申給支即天皇勅汝大若子使罷往天布理奉者
退往天布理奉支是豐受皇太神宮也餘略之

右司去元慶二年二月廿七日符備神祇官今年正月十日符今日到來備仍注
事狀以解

延喜十四年正月廿七日

豐受大內人從六位上神主

神郡檢非
違使目代

豐受宮禰宜外從五位下神主
同宮擬禰宜大內人正六位上神主
大內人外正七位上神主
大內人從八位上神主
權大內人正八位上神主
大神宮大內人正六位上神主
神郡檢非違使目代從八位上神主

高宮內人從八位上神主
瀧原並宮內人外大初位上神主
散位正六位上神主
正六位上神主
從七位上神主
從七位上神主
從七位上神主
從八位上神主
外從八位上神主

延喜十四年正月二十七日

五七五

延喜十四年二月五日 八日 十四日 十五日

二月 大 盡
戊辰 朔

五七六

五日^{壬申}直物、

〔貞信公記抄〕二月五日、有直物事、

八日^{乙亥}、東宮、亭子院ニ參觀アラセラル、

〔西宮記〕^{臨時五}東宮行啓 延喜十四年二月八日、東宮參亭子院、駕庇指御車、宣旨

候御車、行啓如例、其日御祿、白綾大褂、躑躅色綾細長、綾合大口、淺沓宮居銀壺

入沈香也、御馬二疋、殿上人給祿有差、帶刀等疋絹、

〔貞信公記抄〕二月八日、東宮朝太^{字多}上法皇於亭子院、被儲饗祿、賜直丁以上有

差、

十四日^{辛巳}、女御藤原穩子、參内セラル、

〔貞信公記抄〕二月十四日、辛巳、御息所參内、

十五日^{壬午}、公卿等ニ詔シテ、封事ヲ上ラシム、

〔貞信公記抄〕二月十五日、可奉封事詔書出、其儀陣頭内記書之上奏、御畫已

了、給中務少輔朝見、詔書入内記所草、朝見捧筥退^{田カ}□、

十九日、詔書覆奏、其儀、外記以中務所入詔書奉覽上、々覽返給、即刺書杖候、上

詔書覆奏

立軒廊、轉執付内侍奏、

〔本朝文粹〕^二意見封事 意見十二箇條 善相公^{清行}

臣某言、伏讀去二月十五日詔、遍令公卿大夫、方伯牧宰、進讜議、盡謨謀、改百王之澆醜、拯萬民之塗炭、雖陶唐之置諫鼓、隆周之制官箴、德政之美、不能過之、○

略全文ハ四月二十八日ノ條ニ收ム、

二十三日^{庚寅}、前齋宮揭子内親王薨ズ、

〔日本紀略〕^{醍醐}天皇 二月廿三日、庚寅、前齋宮楊子内親王薨、^{文德第七皇女}

〔一代要記〕^{文德}天皇 揭子内親王 延喜十四年二月廿三日薨、

〔三代實錄〕^{陽成}十一天皇 元慶六年夏四月七日、己卯、是日卜定伊勢齋内親王、

無品揭子内親王卜食、

〔三代實錄〕^{陽成}十四天皇 元慶七年八月廿四日、丁巳、伊勢齋揭子内親王、臨鴨

河修禊、便入野宮、中納言從三位兼行左衛門督源朝臣能有、參議正四位下行

皇太后宮大夫藤原朝臣國經陪送、所司供奉如式、

〔三代實錄〕^{光孝}十五天皇 元慶八年二月四日、乙未、太上天皇遷御二條院、遜皇

帝位焉、

延喜十四年二月二十三日

五七七

御官歴

延喜十四年二月二十三日

五七八

十三日甲辰、先是伊勢齋揚子内親王在野宮、是日還本家、

〔皇胤系圖〕

御世系

文德天皇

惟喬親王 母正四下紀名虎女、靜子、

揚子内親王 母伊勢齋、惟喬、

〔本朝皇胤紹運錄〕 井○飛鳥

文德天皇

惟彦親王 母貞主女、

揚子内親王 母同、惟彦、○實相院本同シ、

〔本朝皇胤紹運錄〕 家○前田

文德天皇

惟恒親王 母藤原今子、〔守貞女〕

揚子内親王 母同、〔齊宮〕

○揚子内親王、日本紀略、皇胤系圖等ニ揚子内親王ニ作り、本朝皇胤紹運錄ニ揚子内親王ニ作ル、今三代實錄及ビ一代要記ニ據リテ掲書ス、

二十五日、〔辰〕紀貫之、勸子内親王ノ御屏風ノ和歌ヲ上ル、

〔紀貫之集〕

延喜十四年二月廿五日、〔勸子内親王〕一宮御屏風の料歌、○歌仙家集

五日、女一宮ノ八字ヲ、十二月、女四宮ノ六字ニ、料歌ノ二字ヲ、れ、の、たて、い、じ、ぬ、ん、の、お、ほ、せ、に、よ、り、て、た、て、ま、つ、る、十、五、首、ノ、二、字、ヲ、れ、六、字、ニ、作、ル、

新しき年とはいへどしかすかの我身ふりぬるけふにそ有ける〔にからくイ〕

山みれば雪そまたふる春霞いつと定めて立わたるらん○續後撰和歌

集萬代和歌集同シ、

山風に香をたつねてや梅の花にはへる里に家ゐるそめけん○新勅撰和歌

集三、五句ヲ驚のなくニ作ル、

山のかひたなひきわたる白雲は遠き櫻のみゆる成けり

いかにして敷をしらまし落たきつ瀧のみをよりぬける白玉〔のし〕

爰にしてけふはくらさん春の日の長き心を思ふかきりは

夏○歌仙家集本

月をさへあかすと思ひてねぬ物を時鳥さへなきわたるかな○萬代和歌集

ニ、さへ、ヲ、た、に、ニ、作、ル、新、拾、遺、和、歌、集、二、句、ミ、字、ナ、シ、

延喜十四年二月二十五日

五七九

延喜十四年二月二十七日

五八〇

深^(こほ)みなるまこもえりさけあやめ草袖さへひちてけふや引^(く)らん
住の江のあさみつしほに御そきして戀わすれ草つみて歸らん
歌抄詞書ニ延喜十四年女四宮屏風トアリ、夫〇此和歌

秋^(あき)ナ^(ナ)以^(イ)テ補^(ホ)フ、
歌仙家集本

風の音の秋にも成^(なる)ぬ久堅の天つ空こそかはるへらなれ
かりにとて我はきつれと女郎花みるに心の思ひつきぬる
和歌拾遺

ニ作^(ニ)ル、

常よりもてりまさるかな山^(山)の端^(は)のみちをわけて出る月影
聲をのみよそにきつつ我宿の萩には鹿のうとくも有かな
さくかきりちらてはてぬる菊の花むへしも千世の齡のふらん
吹風にちりぬと思ふを紅葉のなかる瀧の^(たに)ともにおつらん

○歌仙家集本貫之集及ビ萬代和歌集、新拾遺和歌集、十二月ニ係ケ、續
後撰和歌集、夫木和歌抄ニ女四宮ニ作ル、今本書ニ據リテ掲書ス、

二十七日、甲仁王會、

〔貞信公記抄〕二月廿〇日、甲午、仁王會、

内裏穢アリ、

〔本朝世紀〕天慶二年十一月十八日、乙酉、今日藏人仰外記云、十四日、左少將

師氏宅、犬噬入小兒自腰下二足、彼家人交禁中、先例爲穢否可勘申、略中、延喜

十四年二月廿七日等例、勘申了、

延喜十四年二月二十七日

五八一

延喜十四年三月五日 十三日 十六日

三月小 戊盡 朔

五八二

五日壬寅近江權守橘良殖、崇福寺ニ傳法供料ヲ施入ス、

〔扶桑略記〕二十三 醍醐天皇上 三月五日、近江權守橘良殖、志賀寺傳法供料稻一

万束、重進施入、

十三日庚戌權律師禪安寂ス、

〔日本紀略〕醍醐 三月廿日、權律師禪安卒、

〔東寺長者補任〕三十一 三月十三日、權法務禪安卒、聖寶替補法務大也、

〔僧綱補任〕二 興福寺本 權律師禪安 延喜十年三月廿二日任、眞言宗、東

大寺、同十二年五月十五日兼法務、同十四年三月十三日入滅法務、

〔釋家初例抄〕上 非長者權法務初例 律師禪安 宗僧正受法灌頂弟子、

延喜十任律師、同十二年兼法務、同十四年三三入滅、七十

○禪安ノ寂日、日本紀略二十日ニ作リ、釋家初例抄三日ニ作ル、今東寺

長者補任、僧綱補任ニ據リテ揭書ス、禪安ヲ東寺權法務ニ補スルコト、

十二年五月十五日ノ條ニ見ユ、

十六日癸丑 旬、

官歴

紫宸殿出

〔貞信公記抄〕三月十六日、上御南殿、

十九日丙辰御讀經始、一分召、

〔貞信公記抄〕三月十九日、丙辰、御讀經始、一分召、

二十四日辛酉東宮御讀經始、

〔貞信公記抄〕三月廿四日保明親王宮御讀經始、

是月、訴人等ノ留勞地外ニ居住スルヲ禁ズ、

〔西宮記〕臨時六 依訴人愁問人事 延喜十四年三月宣旨、訴人等可留勞者、左兵衛

府西小路以東、南方者、中御門大路以南之由上宣先了、而近代任意越渡彼小

路云々、宜仰檢非違使、加嚴制云々、

訴人等意
ニ任セテ
越度ス

延喜十四年三月十九日 二十四日 是月

五八三

延喜十四年四月二日 二日 八日 十日

四月 丁卯朔

一日、丁卯、日食、

〔日本紀略〕天醍醐 四月一日、丁卯、日蝕、百寮廢務、

〔扶桑略記〕醍醐二十三 天皇書 四月一日、丁卯、日食、廢務、

二日、辰戌失火ノ百姓ニ賑給ス、

〔中右記〕裏書 大治二年二月十五日、

御記云、天曆七年二月略○中十三日、癸亥、○少外記御船傳說勘申失火百姓

賑給例文、二日略○同十四年四月

八日、戊甲灌佛、

〔日本紀略〕天醍醐 四月八日、甲戌、灌佛、

〔江次第〕八日 御灌佛事 同十四年、依仰女房布施、置於東南第二間東偏、當

施机、先々置机上、今年依仰云々、

十日、壬丙光孝天皇ノ皇女簡子内親王薨ス、

〔日本紀略〕天醍醐 四月十日、丙子、無品簡子内親王薨、光孝第二皇女

〔貞信公記抄〕 四月十二日、簡子内親王戊寅、東院公主薨由奏、

東院公主

薨奏

〔北山抄〕上卯 年中要抄上 四月 延喜十四年四月十二日、戊寅、奏簡子内親王薨由、明日當大神祭、使者在路、然年來、件祭當九日時、不止八日灌佛、以前

例、遠祭、使立日齋也、仍相定奏之云々、

〔扶桑略記〕醍醐二十三 天皇書 四月十日、丙子、無品簡子内親王薨、

〔三代實錄〕光孝十六 天皇 元慶八年六月二日、辛卯、略○中從四位下源朝臣簡子、

略○中 依去四月十三日勅書、賜姓隸左京一條、略○中預時服月俸、

〔一代要記〕光孝天皇 簡子内親王 略○上寬平三年十月廿九日爲内親王、

延喜十四年四月十日薨、配陽成院號鈞殿宮、○本朝皇胤紹運錄鈞殿宮、綏子内親王ノ號トナス、

〔皇胤系圖〕

光孝天皇

是忠親王 母皇后班子女王、式部卿仲野親王贈太政大臣女、

簡子内親王 母同、

〔本朝皇胤紹運錄〕

光孝天皇

是忠親王 母女御班子、仲野親王女、

延喜十四年四月十日

五八五

源姓ヲ賜

陽成院ニ配ス鈞殿宮ト號ス

御世系

管絃ヲ能
クス

歌什

皇后宮ノ
五十賀ニ
歌ヲ上ル

女ニ興フ

院藤太是歟爲彈琴之師能管絃之人也

〔勅撰作者部類〕

自帝王至庶人之部

興風

模藤河内大藤相

古今集

春下、三、秋上、一、冬、歌拾此

戀五、一、賀、一、戀二、三、戀四、一、

後撰集

春中、二、秋中、二、秋下、

新古今集

春下、一、戀、一、

戀三、

續古今集

春下、二、戀二、

玉葉集

戀三、

續千載集

秋下、二、戀五、一、

集戀中、二、

風雅集

春下、

新千載集

雜中、

新拾遺集

雜上、

〔古今和歌集〕

賀七

さたやすのみこのきさいのみやの五十賀奉りける

御屏風に、櫻の花のちる下に、人の花見たるかたかけるをよめる、

藤原興風

徒にすくるつき日はおもほえて花見てくらす春を少なき集〇興風

ミ多けれ

〔古今和歌集〕

戀十四

親の守りける人のむすめにいと忍ひにあひて物

らいひけるあひたに、おやのよふといひければ、急きかへるとて、裳をあむぬき置きて入りにける、其後裳を返すとてよめる、

興風

逢ふまでの形見とてこそ留めけむ涙に浮ふ藻屑なりけり集〇興風

ニテ作ル

〔後撰和歌集〕

戀十歌二

女の許より、心さしの程をなむえしらぬといへり

ければ、

藤原興風

我戀をしらむと思は、たこの浦に立つ覽浪の數を數へよ

〔後撰和歌集〕

雜歌二

これかれ逢ひて、夜もすから物語して、つとめてお

くり侍りける、

藤原興風

思にはきゆる物そとまり乍今朝しもおきて何にきつらむ

〇興風、宇多天皇ノ仰ニ依リテ、歌ヲ獻ズルコト、寛平六年四月二十五

日ノ條、及ビ寛平年中、侍臣等ニ勅シテ、和歌ヲ上ラシムル條ニ、寛平御

時、后宮歌合ニ列スルコト、同年中、皇太后班子女王百番御歌合ヲ行ハ

セラル、條ニ、女郎花合ニ列スルコト、昌泰元年是秋ノ條ニ、殿上菊合

ニ和歌ヲ獻ズルコト、延喜十三年十月十三日ノ條ニ見ユ、

二十六日、壬辰調庸進納ノ日、民部省現物ヲ檢シテ、大藏省ニ移送スルノ制

ヲ停ム、

〔政事要略〕

五十一、交替雜事十一

延喜十四年四月二十六日

友ニ贈ル

延喜十四年四月二十八日

五九〇

綱丁ノ留
難チ省ク

左大辨藤原朝臣邦基傳宣（忠平）左大臣宣奉勅調庸之物進納之日民部省先檢見物次移大藏省然後本司相共可檢納之狀法條已存而延喜十四年四月廿六日爲省綱丁留難停勘見物及移送也○中

延長六年閏八月廿八日

左大史錦部春蔭奉

二十八日甲午式部大輔善三清行意見封事十二箇條ヲ上ル

〔扶桑略記〕

醍醐天皇

四月廿八日從四位上行式部大輔三善清行意見

云略○中已上善相公意見之文也

〔本朝文粹〕

意見封事

意見十二箇條

善相公清行

國體ノ美
ヲ稱ス

臣某言伏讀去二月十五日詔遍令公卿大夫方伯牧宰進讜議盡謨謀改百王之澆醜拯萬民之塗炭雖陶唐之置諫鼓隆周之制官箴德政之美不能過之臣某誠惶誠恐頓首死罪臣伏案舊記我朝家神明傳統天險開疆土壤膏腴人民庶富故東平肅慎北降高麗西虜新羅南臣吳會三韓入朝百濟內屬大唐使驛於焉納賄天竺沙門爲之歸化其所以爾者何也國俗敦龐民風忠厚輕賦稅之科疎徵發之役上垂仁而牧下下盡誠以戴上一國之政猶如一身之治故范史謂之君子之國唐帝推其倭皇之尊自後風化漸薄法令滋彰

佛敎ノ弊
ヲ論ズ

國費損毛
ノ一

其二

其三

其四

備中遷磨
郷ニ於ケ
ル戸口遞
減ノ例

賦斂年增徭役代倍戶口月減田畝日荒既而欽明天皇之代佛法初傳本朝推古天皇以後此教盛行自上群公卿士下至諸國黎民無建寺塔者不列人數故傾盡資產興造浮圖競捨田園以爲佛地多買良人以爲寺奴降及天平彌以尊重遂傾田園多建大寺其堂宇之崇佛像之大工巧之妙莊嚴之奇有如鬼神之製似非人力之爲又令七道諸國建國分二寺造作之費各用其國正稅於是天下之費十分而五至于桓武天皇遷都長岡製作既畢更營上都再造大極殿新構豐樂院又其宮殿樓閣百官曹廳親王公主之第宅后妃嬪御之宮館皆究土木之巧盡賦調庸之用於是天下之費五分而三仁明天皇即位尤好奢靡雕文刻鏤錦繡綺組傷農事害女功者朝製夕改日變月後房內寢之飭飲宴詞樂之儲麗靡煥爛冠絕古今府帑由是空虛賦斂爲之滋起於是天下之費二分而一貞觀年中應天門及大極殿頻有灾火儻依太政大臣昭宣公匪躬之誠具瞻之力庶民子來萬邦麇（麇力）至修復此宇葺年而成然而天下費亦失一分之半然則當今之時曾非徃世十分之一也臣去寬平五年任備中介彼國下道郡有邇磨郷爰見彼國風土記皇極天皇六年大唐將軍蘇定方率新羅軍伐百濟百濟遣使乞救天皇行幸筑紫將出救兵時天智

延喜十四年四月二十八日

五九一

水旱消
シ豊積チ

二百五十
年問二十
萬ノ課丁
絶無下ナ
ル推シテ
知ルベシ

天皇爲皇太子攝政、從行路宿下道郡、見一鄉戶邑甚盛、天下詔試徵此鄉
軍士、即得勝兵二萬人、天皇大悅、名此邑曰二萬鄉、後○扶桑略記改曰邇磨
其後天皇崩於筑紫行宮、終不遣此軍、然則二萬兵士、彌可蕃息、而天平神護
年中、右大臣吉備朝臣、以大臣兼本郡大領、試計此鄉戶口、纔有課丁千九百
餘人、貞觀初、故民部卿藤原保則朝臣、爲彼國介時、見舊記此鄉有二萬兵士
之文、計大帳○計大帳ノ三字扶桑略記之次、閱其課丁、有七十餘人、某到任
又閱此鄉戶口、有老丁二人、正丁四人、中男三人、去延喜十一年、彼國介藤原
公利、任滿歸都、清行問邇磨鄉戶口當今幾何、公利答曰、無有一人、謹計年紀、
自皇極天皇六年庚申、至延喜十一年辛未、纔二百五十年、衰弊之速、亦既如
此、以一鄉而推之、天下虛耗、指掌可知、方今陛下、鍾千年之期運、照萬古之興
衰、降惻隱於衆庶、施惠愛於四方、宵起（衣）吁食、夜念朝行、遍頒綸綍、廣訪芻蕘、昔
者虞舜之居、三年成都、仲尼之政、朞月自理、然則民之繁孳、不待五代之後、國
之興復、應期浹日之間、不任抃躍、敢陳狂愚、猶如管中見豹、纔知一斑、井底望
天、不過數尺、謹錄如左、伏待天裁、
一應消水旱求豐穰事

求メ
トチ請フ

祈年
ノ必要
ナリ理由

諸社祝部
新饌幣帛
ナ私シ却
ス馬チ賣却

吉祥悔過
及ビ仁王
會ノ目的

僧綱以下
持戒者少

右臣伏以、國以民爲天、民以食爲天、無民何據、無食何資、然則安民之道、足食之
要、唯在水旱無殄、年穀有登也、故朝家每年二月四日、六月十一日、十二月十一
日、於神祇官立祈年月次之祭、嚴加齋肅、遍禱神祇、乞其豐熟、致其報賽、其儀、公
卿率辨官及百官、參神祇官、神祇官每社設幣帛一裹、清酒一瓮、鐵錡一枝、陳列
棚上、又社或有奉馬者焉、祈年祭一匹、亦皆左右馬寮、牽列神馬、爰神祇官讀祭
文畢、以件祭物、頒諸社祝部、奉本社祝部、須潔齋捧持、各以奉進、而皆於上卿前
卽以幣絹、插著懷中、拔棄銜柄、唯取其鋒、傾其瓮酒、一舉飲盡、曾無一人全持出
神祇官之門者、況其神馬、則市人於郁芳門外、皆買取而去、然則所祭之神、豈有
歆饗乎、若不歆饗者、何求豐穰、伏望、申勅諸國、差史生以上一人、率祝部、令受取
此祭物、慥致本社、以存如在之禮、又朝家每年正月、始自大極殿前、至于七道諸
國、修吉祥悔過、又聖代每年修仁王會、遍爲百姓、祈禱豐年、消伏疾疫、由是人天
慶賴、兆庶歡娛、然猶所以水旱不休、灾殄屢發者何也、僧徒修之者、多非其人也、
臣窺漢國之史籍、閱本朝之文記、凡厥禪徒、未必皆修學俱備、禪智兼高者也、然
而或固守律儀、至死不犯、或偏行菩薩、忘身利佗、故帝皇之誠、依禪僧而易感、禪
僧之念、與如來而必通、而今上自僧綱、下至諸寺次第請僧、及法用小僧沙彌等、

延喜十四年四月二十八日

五九四

持戒者少、違律者多、如此薰修者、三尊豈可感應乎、感應之來、非敢所望、妖咎之至、還亦可懼、伏望、衆僧濫行有聞者、一切不預請用、又諸國司等、公務忪忙、事多不遑、故國中法務、皆委附講讀師、而講讀師多非持律之人、或有贖勞之輩、況其國分僧少人、皆是無慚之徒也、蓄妻子、營室家、力耕田、行商價、而今國司依例令致祈念、望其感應、譬猶緣木求魚、向竈採花也、重望、諸國講讀師、雖成階業、非精進練行者、不得擬補、又國分僧若有濫穢、而講讀師不糺者、解却講讀師、如此則聖主之祈、感速影響、公田之稅、蓄如京抵、十旬之雨、隨節、千箱之詠、滿衢、

一請禁奢侈事、

右臣伏以、先聖明王之御世也、崇節儉、禁奢盈、服澣濯之衣、嘗蔬糲之食、此則往古之所稱美、明時之所規模也、而今澆風漸扇、王化不行、百官庶僚、嬪御媵妾、及權貴子弟、京洛浮食之輩、衣服飲食之奢、賓客饗宴之費、日以侈靡、無知紀極、今略舉一端、稍陳事實、臣伏見貞觀元慶之代、親王公卿、皆以生筑紫絹、爲夏汗衫、曝絕爲表袴、東繩爲鞵、染絕爲履裏、而今諸司史生、皆以白縑爲汗衫、白絹爲表袴、白綾爲襪、菴褐爲履裏、其婦女則下至侍婢、裳非齊紈、服非越綾、不裁、染紅袖者、費其萬錢之價、擣練衣者、裂於一砧之間、自餘奢靡、不能具陳、昔者季路

講讀師國分僧多ハ破戒無慚ノ徒

奢侈ヲ禁セシメテ請フ

侈靡ノ一例

田畝荒蕪シテ盜賊起ル

喪家法事ノ爲ニ家産ヲ傾ケ

貧僧等盛ニ齋供ヲ儲ケ

緇袍、不耻狐貉之麗服、原憲藜戶、猶蔑駟盖之榮暉、此賢哲之高規、非庸人之克念、故見其僭差、則競相放効、觀其儉約、則遞以嘲嗤、富者誇其逞志、貧者耻其不及、於是製一領之衣、破終身之產、設一朝之饌、盡數年之資、田畝爲之荒蕪、盜賊由是滋起、如此不禁、恐損聖化、伏望、隨人品列、定衣服之制、命檢非違使、糺其事、以○事以ノ二字、一本ニ越溢又張格式、而此法常自上破之、令下效之、重望、令檢非違使、張行此制、又王臣以下、至于庶人、追福之制、飭終之資、隨其階品、皆立式法、而比年諸喪家、其七々日講筵、周忌法會、競傾家產、盛設齋供、一机之饌、堆過方丈、一僧之儲、費累千金、或乞貸佗家、或斥賣居宅、孝子遂爲逃債之逋人、幼孤自成流充之餓殍、夫以蒙顧復撫育之愛者、誰無追遠報恩之志焉、然而修此功德、宜有程章、豈可必待子孫之破產、以期父祖之得果乎、況此修齋之家、更設弔客之饗、獻酬交錯、宛如飫宴、初有匍匐之悲、俄成酣醉之興、孔子食於有喪者之側、未嘗飽也、豈其如此乎、但郊畿之內、道場非一、故檢非違使、不遑禁止、伏望、申勅公卿大夫百官諸牧、各慎此僭濫、令天下庶民、知其節制、又維摩最勝、豎義僧等、皆貧道修學之輩也、一鉢之外、亦無他資、而比年令之盛儲、僧綱并聽衆之齋供、非唯積饌成山、猶亦有酒如淮、已乖佛律、亦害聖化、伏望、申誠僧綱、早立此

延喜十四年四月二十八日

五九五

禁、伏以上不率正、下自差忒若卿相守法、僧統隨制、則源澄而流自清、表正而影必直、

一請勅諸國隨見口數授口分田事

右臣伏見諸國大帳、所載百姓大半以上、此無身者也、爰國司遍隨計帳、宛給口分田、卽班給正稅、徵納調庸、於是有其身者、纔耕伴田、頗進租調、無其身者、戶口一人、私沾伴田、曾不自耕、至于租稅調庸、遂無輸納之心、謹檢案內、公家所以班口分田者、爲收調庸、舉正稅也、而今已姦其田、終闕厥貢、牧宰空懷無用之田籍、豪富彌收并兼之地利、非唯公損之深、亦成吏治之妨、今須令諸國閱實見口、班給其口分田、其遺田者、國司收爲公田、任以沽却、若納地子、以充無身之民調庸租稅也、猶所遺之稻、委納不動、今略計其應輸之數、三倍於百姓所進之調庸、爲公有利、爲民無煩、此皆國宰專行、應無殊妨、然而事乖舊例、恐有民愁、伏望、申勅諸國、試令施行、

一請加給大學生徒食料事

右臣伏以、治國之道、賢能爲源、得賢之方、學校爲本、是以古者明王、必設庠序、以教德義、習經藝、而敍彝倫、周禮、卿大夫、獻賢能之書于王、王拜而受之、所以尊道

現口數ニ
隨授口分
田コトケ
ンコトケ
請フコト
百姓ノ分
田ヲ沽リ
テ租調庸
班ガル目
的

大學生ニ
食料ヲ加
給セシメ
トナシテ
請フコト

大學創立

沒官田ト
ス勸學田

出舉稻ヲ
大學寮雜
用學寮生
口味料等
ニ充ツ

學生料

今遣ル所
大炊寮飯
料米及ビ
勸學田ノ
一分ノミ

而貴士也、伏見古記、朝家之立大學也、始於大寶年中、至于天平之代、右大臣吉備朝臣、恢弘道藝、親自傳授、卽令學生四百人、習五經三史、明法、算術、音韻、籀篆等六道、其後代々下勅、給罪人伴家持、越前國加賀郡沒官田一百餘町、山城國久世郡公田卅餘町、河內國茨田澁川兩郡田五十五町、以充生徒食料、號曰勸學田、亦每日給大炊寮百度飯一石五斗、人別三升、五十人料以補照讀之疲也、又有勅、令常陸國、每年舉稻九萬四千束、以其利稻、充寮中雜用料、又舉丹後國稻八百束、以其利稻、充學生口味料、而年代漸久、事皆睽違、承和年中、伴善男訴家持無罪、返給加賀郡勸學田、又有勅、分山城國久世郡田卅町爲四分、其三分給典藥左右馬三寮、纔留其一分、充學生料、又河內國兩郡治田、頻遭洪水、皆成大河、又常陸丹後兩國出舉稻、依度々交替欠、本稻皆失、無有利稻、當今所遺者、唯大炊寮飯料米六斗、山城國久世郡遺田七略ニ七ノ字、政事要、據リテ補フ、町而已、以此小儲、充數百生徒、雖作薄粥、猶亦不周、然而學生等、成立之望猶深、飢寒之苦自忘、各勤鑽仰、共住學館、於是性有利鈍、才異愚智、或有捍格而難用者、或有穎脫而出囊者、通計而論之、中才以上者、曾無十分之三四也、由是才士者已超擢、舉用不才者衰、老空歸、亦其舊鄉凋落、無所歸託者、頭戴白雪之堆、飢臥壁水之湫、於是後進者、

講堂荒廢
無シ曹局人

學生寮家
ニ住セザ
ナレバ薦舉
ナ得ズ

五節ノ妓
員ヲ減セ
請フコトヲ

新制

偏見此輩成群、即以爲大學是連遭坎壈之府、窮困凍餒之鄉、遂至父母相誡、勿令子孫齒學館者也。由是南北講堂、鞠爲茂草、東西曹局、闕而無人。於是博士等每至貢舉之時、唯以歷名薦士、曾不問才之高下、人之勞逸、請託由是間起、濫吹爲之繁生、潤權門之餘唾者、生羽翼而入青雲、蹈闕里之遺蹤者、詠子衿而辭疊舍、如此陵遲、無由興復。先王庠序、遂成丘墟、臣伏以萃人之道、以食爲本、望請常陸丹後兩國出舉本額九萬四千八百束之利稻、二萬八千四百卅束之代、遍以諸國田租穀充給、緣海國半分、坂東國半分以充給學生等食、又罪人伴善男所返給加賀郡田、重亦沒官、令給穀倉院充造道橋料、重望依舊、返給伴田、以爲勸學田、又式云、學生不住寮家者、不得薦舉者、比年雖有此式、不能施行者、依學生之無食也、今須嚴勅博士及寮頭等、諸道學生、雖有才藝、不直寮家者、不得貢舉、如此則挑兮之徒、歸我國冑、皇矣之士、列彼周行、

一請減五節妓員事

右臣伏見、朝家五節舞妓、大嘗會時五人、即皆預敍位、其後年々新嘗會時四人、無預敍位之例、由是至于大嘗會之時、權貴之家、競進其女、以充此妓、尋常之年、人皆辭遁、可闕神事、爰有新制、令諸公卿及女御、輪轉進之、其費甚多、不能堪任、

弘仁承和
ノ二代内
寵ヲ好ム

判事ヲ增
置センコ
トヲ請フ

減員ノ爲
シメ難シ
獄斷

伏案故實、弘仁承和二代、尤好內寵、故遍令諸家擇進此妓、即以爲選納之便也。諸家僥倖天恩、不顧糜費、盡財破產、競以貢進、方今聖朝、修其帷薄、立其防閑、此等妓女、舞了歸家、無預燕寢、然則此妓數人、遂有何用、重案舊記、昔者神女來舞、未必有定數四五人、伏望擇良家女子未嫁者二人、置爲五節妓、其時服月料稍令饒給、節日衣裝亦給公物、若貞節不嫁、經十箇年者、即預女敍、聽令出嫁、若願留侍者、預之於藏人之列、即擇置其替人、亦如前年、

一請依舊增置判事員事

右臣伏案職員、令大判事二人、中判事二人、少判事二人、皆掌決斷人罪也。然而近古以來、大判事一員、常用律學之人、其外五人、未必任明法之輩焉。故去寬平四年有詔、省件大判事一人、中判事二人、(少判事)小判事一人、唯置大小判事各一人、然猶大判事獨用法家、小判事亦非其人、今案事意、此詔之旨、竊有疑惑、何者、聖主之政、刑法爲大、昔阜陶以大賢爲理官、帝舜猶誡云、欽哉、欽哉、惟刑之恤、光武以明察詳刑、桓譚亦奏云、法吏愛憎、刑開二門、然則疑獄之斷、古今所難、而今總萬民之生死繫之一人之唇吻、括五刑之輕重、決之獨見之讞書、已乖閱實之理、恐貽濫罰之科、近曾安藝守高橋良成之罪、大判事惟宗善經、處之遠流、以禦螭

延喜十四年四月二十八日

六〇〇

魁奏可已畢、官符亦下、儻依刑部大錄粟田豐門之駁議、良成之身、幸蒙赦免、朽骨再肉、遊魂更歸、然則法律出入、難可取信、天下喁々、莫不危懼、伏望、依舊置判事六人、皆擇明通法律者、補任之、使之俱議科文、詳定條章、各慥其意、然後奏聞、如此則怨獄永絕、罪人自甘、不待扶南之鰐魚、豈用堯時之獬豸、

一請平均充給百官季祿事、

右謹案式條、二月廿二日、八月廿二日、於大藏省、可給百官春夏秋冬季祿、而此年依官庫之乏物、不得遍賜、由是公卿及出納諸司、每年充給、自餘庶官、則五六年內、難給一季料、伏案事意、上下分階、故祿之多少各異、閑忙殊務、故物之精麤不同、至于頒賜、宜無差別、豈可俱勤王事、別置偏煦之官、同列周行、或此裸國之俗乎、伏望、若可給季祿者、先計物多少、公卿百官一日遍給、一如式文、若官庫無物者、同亦不賜、無有偏頗、如此則鳴鳩在桑、均哺養於七子、單醪投流、期酣醉於三軍、

一請停止依諸國少吏并百姓告言訴訟、差遣朝使事、

右臣伏以、牧宰者分萬乘之憂、受一方之寄、守六條之紀綱、為兆民之領袖、故漢宣帝云、與朕共理者、其唯良二千石乎、必須擇用其才、尊崇其職、重官威而厭民

平均二百
官季祿
充給
請フ
官庫ノ物
乏シ

諸國吏民
ノ告訴ニ
依テテ
使差遣
停メ
トナシ
請フ

屬吏官長
ヲ誣告シ
部民國宰
ヲ怨訴ス

阿波守橘
祕樹ノ例

心、捨小瑕而責大成、而比年任用之吏、或結私怨、以誣告官長、所部之民、或矯公事、以怨訴國宰、或陳犯用官物之狀、或訴政理違法之由、此等條類、千緒萬端、於是朝家收其告狀、發遣使人、使人到國、未問事之虛實、不辨理之是非、偏依使式、每事准擬、領其印鑑、嚴其禁錮、即以官長之貴、與小吏賤民、比肩連口、受其推鞠、若辭對之間、纖芥有違、則立加繯、便填牢狴、若亦雖告訴之旨、事皆不實、而威權已廢、政令不行、爰隣境百姓、轉相見聞、即各輕侮其官長、不肯服從其政教、傷化之源、無甚於此、況亦理劇之任、庶務多端、曉夕僱俛、猶有不遑、而今朝使推問之間、被停釐務、多歷旬月、空廢治政、縱雖免賊吏之名、而猶成任中之怠、秩滿之日、遂拘解由、如此則多致公損、徒滅良吏、助此訴人、報彼私怨也、前年阿波守橘祕樹肅清所部、底慎厥貢、勤王之誠、當時第一、必須殊加獎擢、以勵循良、而依小民之誣告、降朝使之廉問、雖事皆虛詐、告人逃亡、已而祕樹之身、亦為廢人、如此則知耻之士、誰冀為吏乎、方今時代澆季、公事難濟、故國宰之治、不能事々拘牽正法、故或有枉尺而直尋者、或有失始而全終者、昔者龔遂為渤海守、奏曰、請勅丞相御史、且勿拘臣以文法、令得便宜從事、又本朝格云、國宰反經制宜、動不為己者、將從寬恕、無拘文法者、伏望、此等告言訴訟、除謀反大逆之外、一切停止朝

延喜十四年四月二十八日

六〇一

犯過ヲ不
與解由狀
ニ載セテ
勘判セシ
メ

延喜十四年四月二十八日

六〇二

使、專附新司、若實有犯過者、具載不與解由狀、勘判之後、即下刑官、論其罪科、或難云、凡厥貪吏之盜官物、宜速加糾察也、若待其任終、恐倉庫無餘、答云、今假令有人告申吏盜賊、爰太政官即馳輕騎、晝夜兼行、禁遏其奸者、事若可爾、而今訴人告狀、歷三審之程、待奏可之比、擇定使人之間、裝束行程之限、事自彌留、度歷年紀、其間若有心盜犯者、豈遺遺一粒乎、然則與彼（付カ）附後司、有何分別、況此牧宰等、身出帝簡、志報朝恩、非唯求立績於明時、亦皆念垂名於後代者也、故此年陷此罪者、皆爲公謀功未成之間、俄被告言而已、未曾有自犯入己之人焉、靜尋其意、誠是公罪也、伏望、覽褻天旒、照其可否、

一請置諸國勘籍人定數事、

諸國勘籍
人ノ定數
ヲ置カシ
テ請フコト
ナリ

右謹檢案內、三宮舍人、諸親王帳內資人、諸大夫命婦位分資人、諸司勘籍人、諸衛府舍人、式兵二省、載季符者、一年四季之內、稍及三千人、又略計本朝課丁、除五畿內陸奧出羽兩國及太宰九箇國之外、不滿卅萬人、就中大半是無有身、然則見課丁纔有十餘萬人、今十餘萬人中、每年除三千人之課役、傍薄而論之、未盈四十年、天下之人、皆可爲不課之民、然則國宰令何人備進調庸乎、由是國宰奉行蠲符、即除富豪見丁之課役、更以無實課丁、括出計帳、故例進調庸、自然無

富豪ノ課
役ヲ除ク

公損甚シ

勘籍解文
二通ヲ勘
合セシメ
シテ符益
少シ

贖勞人ヲ
諸國檢非
違使等ニ
補スルナ

可徵之門、然則調庸難備、曾非國宰之怠也、都是蠲符猥濫之所致也、而今依此怠、遂爲未得解由、豈不悲乎、或難云、三宮舍人、帳內位分資人等、古來所充給也、然而累代蠲符、無有此妨、今至當時、何出異論、答云、凡諸勘籍人等符、損符益符、通計可載蠲符、具在式條、而今（符カ）比年所下、蠲符之損、百人之中、無符益一人、又近古諸家、一得資人、無復改補、而比年補資人後、即遷轉三宮及諸司內考、重復改請、於是三省史生書生等、因緣爲奸、或不觸本主、不依國解、僞稱勘籍、猥載季符、其尤甚者、本主未補一人、省底已盈其數、如此奸濫、日以加倍、公損之甚、無過於此、伏望、件等勘籍人、隨國大小、每年立其定數、大國一年十人、上國七人、中國五人、小國二人、以載蠲符、此外不得加增一人、又舊例、近江國一年免百人、丹波國免五十人、兩國凋殘、職此之由、今須因准此例、近江國減定十人、丹波國減定七人、又勘籍解文、必二通進官、其一通留官底、一通加外題、即下式部省、省進季符之日、與官底解文勘合、然後請印、又蠲符所載、多符損少符益者、勘返不得請印、但京戶五畿內不拘此制、冀也調庸易納、牧宰無煩、

一請停以贖勞人、補任諸國檢非違使及弩師事、
右諸國檢非違使、掌糺境內之奸濫、禁民間之凶邪、然則國宰之爪牙、兆庶之銜

延喜十四年四月二十八日

六〇三

停メシ
トテ請フ

諸國檢非
違使ノ職
掌師ヲ置
グ目的

我が皇ハ
神功皇
ノ御發明
唐製ニ優

弩射ノ術
シメテ
ヲ練習セ

僧徒舍人
等ノ濫惡
ヲ禁ゼン
フコトヲ請

延喜十四年四月二十八日

六〇四

策也、必須明習法律、兼詳決斷、而今任此職者、皆是當國百姓、納贖勞料者也、徒費公俸、不堪差役、空帶其名、曾非其器、亦猶如畫餅不可食、木吏不能言也、伏望監試明法學生、宛任職（此職）、其試法一如明經國學之試、國中追補（補力）及斷罪、一向委此檢非違使、猶如京下有判事及檢非違使也、又緣邊諸國、各置弩師者、為防寇賊之來犯也、臣伏見本朝戎器、強弩為神、其為用也、短於逐擊、長於守禦、古語相傳云、此器神功、皇后奇巧妙思、別所製作也、故大唐雖有弩名、曾不如此器之勁利也、臣伏見陸奧出羽兩國、動有蝦夷之亂、太宰管内九國、常有新羅之警、自餘北陸、山陰、南海、三道濱海之國、亦皆可備隣寇者也、而今件弩師、皆充年給、許令斥賣、唯論價直之高下、不問才伎之長短、故所充任者、未知軍器之有弩、況曉機弦之所用乎、假令天下太平、四方無虞、猶宜安不忘危、日慎一日、況萬分之一、若有隣寇挑死者、空懷此器、孰人施用乎、伏望令六衛府宿衛等、練習弩射之術、試其才伎、隨其功勞、充任件國弩師、然則人才適名、城戍易守、

一請禁諸國僧徒濫惡、及宿衛舍人凶暴事、

右臣伏見、去延喜元年、官符已禁權貴之規錮山川、勢家之侵奪田地、芟州郡之荆棘、除兆庶之螫蠚、吏治易施、民居得安、但猶凶暴邪惡者、惡僧與宿衛也、伏以、

得度者一
年ニ三百

天下ノ民
三分ノ二
ハ禿首
妻帯肉食
私竊盜及
爲司錢ナ
國司ナ劫
圍シテ略

衛府舍人
國司ナ凌
辱ス
賣官

諸寺年分及臨時得度者、一年之内、或及二三百人也、就中半分以上、皆是邪濫之輩也、又諸國百姓、逃課役、逋租調者、私自落髮、猥著法服、如此之輩、積年漸多、天下人民、三分之二、皆是禿首者也、此皆家蓄妻子、口啖腥膻、形似沙門、心如屠兒、況其尤甚者、聚為群盜、竊鑄錢貨、不畏天刑、不顧佛律、若國司依法勘糺、則霧合雲集、競為暴逆、前年攻圍安藝、守藤原時善、劫略紀伊、守橘公廉者、皆是濫惡之僧、為其魁帥也、縱使官符遲發、朝使緩行者、時善公廉、皆為魚肉也、若無禁懲之制、恐乖防衛之方、伏望諸僧徒、有凶濫者、登時追捕、令返進度、緣戒牒、即著俗服、返附本位、又私度沙彌、為其凶黨者、即著鉗鉢、驅役其身、又六衛府舍人、皆須每月結番、曉夕警備、當番陪侍兵欄、佗番休寧、京洛（東西帶刀町、此其住所也）、若有機急者、又須當番、他番供勤防衛、而今件等舍人、皆散落諸國、或在千里郵驛之外、百日行程之境、豈得門籍編名、宿衛分番乎、此皆部內強豪、民間凶暴者也、國司依法、勘糺其事、則駿奔入洛、即納錢貨、買為宿衛、或帥徒黨、而劫圍國府、或奮老拳、以凌辱官長、凡厥蠹害、非唯疥癬、夫以選置衛卒者、為備警急也、而今遠在甸服、不居京畿、縱令皇都無虞、則此輩何用、若有急者、奔赴無及、然則徒為諸國之豺狼、曾非六軍之貔虎、望請諸衛府舍人充補之後、不得歸住本國、若有寧歸者、各限暇

延喜十四年四月二十八日

六〇五

延喜十四年四月二十八日

六〇六

日、取本府牒、附送國衙、不得限外留連、若猶懈緩不還者、國宰且解其職、且錄事狀、牒送本府、如此則援臂比肩於門欄、狗吠休警於州壤、

一重請修復播磨國魚住泊事、

右臣伏見、山陽西海南海三道、舟船海行之程、自檀生泊至韓泊一日行、自韓泊至魚住泊一日行、自魚住泊至大輪田泊一日行、自大輪田泊至河尻一日行也、此皆行基菩薩計程所建置也、而今公家唯修造輪田泊、長廢魚住泊、由是公私舟船、一日一夜之內兼行、自韓泊指輪田泊、至于冬月風急、暗夜星稀、不知舳艫之前後、無辨濱岸之遠近、落帆棄楫、居愁漂沒、由是每年舟之蕩覆者、漸過百艘、人之沒死者、非唯千人、昔者夏禹之仁、罪人猶泣、況此等百姓、皆赴王役乎、伏惟聖念必應降哀矜者也、臣伏勘舊記、此泊天平年中所建立也、其後至于延曆之末五十餘年、人得其便、弘仁之代、風浪侵鬪、石頽沙漂、天長年中、右大臣清原真人、奏議起請、遂以修復、承和之末、復已毀壞、至貞觀初、東大寺僧賢和、修菩薩行、起利他心、負石荷鍤、盡力底功、單獨之誠、雖未畢其業、年紀之間、莫不蒙其利賢和入滅、稍及三十年、人民漂沒不可勝計、官物損失亦累巨萬、伏望差諸司判官幹了有巧思者、令修造件泊、其料物充給播磨備前兩國正稅、冀也、早降聖朝、援

播磨國魚住泊、請フ、行基五泊、延喜中輪田泊ヲ修造シ、廢ス

天平中魚住泊、天長中修立ス、貞觀中僧賢和重修ス

延喜元年ノ意見

手之仁、令脫天民爲魚之歎、凡厥便宜、具載去延喜元年所獻意見之中、不更重陳、

延喜十四年四月廿八日 從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上

○延喜中、山陽、南海兩道ニ勅シテ、攝津輪田泊ヲ修造セシムルコト、便宜左ニ附載ス、

〔山槐記〕 治承四年三月五日、丁巳、

太政官符、太宰府、

應下知管内諸國、雜物運上船、梶取水手下向時、人別三ヶ日、勤仕攝津國、

大輪泊石椋造築役事、○中

伏尋舊記、粗訪故事、延喜聖代下、繪旨、仰山陽南海之兩道、修輪田船瀨之舊、

泊聖代之政、尤足因准、○中

治承四年二月廿日 ○内閣本攝津國古文書ヲ以テ傍註ス、

延喜十四年四月二十八日

六〇七

延喜十四年五月二日

五月丁酉朔

一日戊戌左京火アリ、六百餘戸ヲ燒ク、尋デ、罹災者ニ賑給ス、

〔日本紀略〕醍醐天皇五月二日、戊戌未剋東京一二兩條有火、燒亡舍宅六百十

小野宮東洞院宮等燒亡ス

七烟入道三宮、小野宮、東洞院宮等也、

〔貞信公記抄〕五月二日、左京有失火、其數六百餘烟、

四日、失火家々給米力有差、

〔政事要略〕男女衣服并資用雜物等事

請禁深紅衣服奏議略中

又十五年、左京大火、燒數百家、先皇太后宮及諸大家、多爲煨燼、略中

延喜十七年十二月廿五日 參議從四位上守宮內卿三善朝臣清行

〔中右記〕大治二年二月十五日、

御記云、天曆七年二月略中十三日、癸亥、少外記御船傳說勘申失火百姓

賑給例文略中同日有例、五月

〔扶桑略記〕醍醐天皇五月二日、戊戌、東京一條二條百十七烟燒亡、

〔扶桑略記〕醍醐天皇五月三日、己亥、失火宅、給米鹽有差、

米鹽ヲ給

紫宸殿出御

○左京大火ハ、深紅衣服流行ノ應ナリトノ説、六月一日ノ條ニ見ユ、

七日、癸卯、出雲守凡河内弘恆等赴任セザルニ依リ、本任ヲ免ジテ放還セシム、

〔類聚符宣抄〕八本任放還事

刑部少錄眞髮部良助 元越前權少目、

甲斐守藤原朝臣貞淵 元上總介、 河内守備平主元山城守、

出雲守凡河内宿禰弘恆 元大隅守、 美濃守源朝臣悅 元大宰大貳、

右大納言藤原卿宣件等人不向任國、宜莫責本任放還者、

延喜十四年五月七日 大外記阿刀宿禰春正奉

十一日、未旬、東宮御帳ノ後ニ在シテ、其儀ヲ御覽セララル、

〔貞信公記抄〕五月十一日、上御南殿、東宮在御帳後、見旬儀、

十二日、申參議正三位陸奥出羽按察使藤原有實薨ズ、

〔日本紀略〕醍醐天皇五月十二日、參議正三位行陸奥出羽按察使藤原朝臣有

實薨、年五十八

〔公卿補任〕四參議正三位藤有實、六十按察使、五月十二日薨、頭五年、參木

延喜十四年五月七日 十一日 十二日

延喜十四年五月十二日

六一〇

官歷

〔扶桑略記〕

醍醐天皇上

五月廿六日、參議藤原有實薨、

〔公卿補任〕

參議從四位上藤有實三十、贈太政大臣冬嗣公孫從四位上中宮

大夫良仁朝臣二男、母從四位上濱主女、貞觀八正十三左近將監、同九正、

藏人、二月十一日兼讚岐權掾、同十正七從五下、兵部少輔、五月廿六日左

少將辨、同十一年正十六補次侍從、三月廿三日兼加賀守、同十二正廿五兼讚岐

權介、同十五正十二兼近江介、同十六正七從五上、元慶二正十一兼阿波介、

代實錄阿波權介二作也、同三十八十七兼伊與權守、同五十七十六左中將、元少七月十六日遷

權中將、十月、藏人頭、同六正七從四位上、二月三日任參議、元藏人頭左中將、

伊與權守等如元、同七年正月七日正四下、仁和二年正月十六日兼近江權守、

上、同四年十一月廿五日正四上、寬平四年正月十一日兼太皇太后宮大夫、

同六年正月七日敍從三位、將止中、同八年正月廿六日兼近江權守、同九年五月

廿五日兼按察使、夫止大、六月十九日兼左衛門督、察止按、延喜三年正月七日正三

位、同六年正月十一日兼伊與守、同十一年正月十三日兼近江守、同十三年四

月十五日兼按察使、去督、

〔類聚國史〕 百一 職官部六 元慶三年正月七日、丁酉、授略 中 從五位上行

世系

攝津守在原朝臣安貞、略中 左近衛少將兼阿波權介藤原朝臣有實並正五位下、

〔三代實錄〕

陽成天皇

元慶五年二月十四日、壬辰、授左近衛少將正五位下

兼行伊豫權介藤原朝臣有實從四位下、

〔三代實錄〕

光孝天皇

仁和元年二月廿日、丙午、以略 中 參議正四位下行左

近衛中將藤原朝臣有實爲肥後權守、中將如故、

〔尊卑分脈〕

藤仁氏孫

良仁

有實 參議正三位、按察使、延木十四五十三薨、六十八

行能 周防守、從五上、女

當門 大宰少貳、從五下

近光 左馬助、攝津權守、從五下

保家 尾張權守、從五下

當國 尾張守、從五下

師保 雅樂助、從五下

延喜十四年五月十二日

六一一

延喜十四年五月十五日 十九日 二十一日

六一二

和歌

〔女子右馬助有好母〕

〔日本紀竟宴和歌〕延喜六年 得日本武尊

參議正三位行左衛門督伊豫守藤原朝臣有實

也末度多介仁之比无賀志乃久爾遠宇知天太飛良介與世之末美古仁波也良奴

十五日辛亥祈雨奉幣

〔扶桑略記〕二十三皇書 五月十五日辛亥奉遣伊勢并諸社幣使是爲祈雨也

〔貞信公記抄〕五月十三日定祈雨使等

十五日辛亥始從伊勢九社遣使奉幣參八省行事

十九日乙卯祈雨御讀經

〔貞信公記抄〕五月十七日定祈雨御讀經僧名

十九日乙卯祈雨御讀經

二十一日丁巳檢非違使等ノ過狀ヲ責ム

〔貞信公記抄〕五月廿一日召時望朝臣於陣頭責檢非違使等過狀是蒙仰之後勘申右兵衛等罪緩息也

勘罪緩息

六月大 丙寅盡

一日丙寅美服ヲ禁シ禁色ノ制ヲ嚴ニス

〔日本紀略〕醍醐天皇 六月一日丙寅禁制美服紅花深淺色等

〔政事要略〕六十七 男女衣服并資用雜物等事

請禁深紅衣服奏議善

天安以前 男女支子 染ヲ用フ 貞觀以來 深紅色ニ 改ム

仁和中 深紅ヲ禁

延喜七八 年以後 左京大火 言ハ火色 妖ノ應

臣清行謹言略 臣伏見天安以往男女貴賤衣袴皆染以支子貞觀以來改以深紅之色當時號之曰火色轉相放口漸似緹縹亦號之曰焦色臣竊以此近服妖也又衣服有焦火之名此語妖也其後无幾宮中及京師頻有火災天下騷動古今未有至于仁和禁制此色略 而延喜七八年以後京師盛好此服朝雖施禁令更亦舒緩較年以來彌增深濃其尤甚者以紅花廿斤染絹一疋略 又十五年左京大火燒數百家先皇太后宮及諸大家多爲煨燼略 由是閭巷之中詭言尤甚遞相警擾夜不能寢此皆火色妖言之應湯若各添添之徵也略 中

延喜十七年十二月廿五日 參議從四位上守宮內卿三善朝臣清行

○左京六百餘戶燒亡ノコト五月二日ノ條ニ見ユ

十三日戊寅諸司國司公使等ノ枉道官符ヲ申請フコトヲ停止セシム

延喜十四年六月二日 十三日

六一三

〔符宣抄〕

別本

右中辨藤原朝臣邦基傳宣、大納言藤原朝臣忠平宣、奉勅諸司并公使等、申請枉道之事、自今以後、宜從停止、若雖下宣旨、國可申返者、

延喜十四年六月十三日

左大史錦良助奉

太政官符、駿河國司

應停止諸國司并公使等取枉道事

右得彼國去正月廿五日解僦、謹檢案

傳數多、遞送甚繁、因茲驛子

逃亡、無人從

年交替之日、所在傳馬之无實、八十餘疋、詔使

定已畢、方今可赴山道諸國司等、申請枉道官符、向於任所、路次郡驛、煩擾彌倍、就中五位守介所用夫馬、其數不少、仍借雇部內人馬、昨日送前驛、未歸之間、今朝重以到來、爰以一驛夫馬、經過多許程、或以仆死、或以下歸、凡彼使等行事、苛酷多端、請取人夫、即號質物、極寒之間、到剝取衣裳、不宛糧食、令擔重荷、經日送夜、不堪飢寒、死中途輩、不可勝計、人民之愁、無甚於斯、望請官裁、被停止取枉道、將絕部內之騷者、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣忠平宣、奉勅依請者、國宜承

遞送繁多、
子逃亡、
ニシテ驛
五守介、
所用ノ夫、
馬少カラ、
驛馬仆死、
人夫中途、
死スル、
モノ多シ

知依宣行之符到奉行、

左中辨藤原朝臣

延喜十四年六月十三日

左大史御船宿禰

十五日、庚辰、洪水、

〔日本紀略〕

醍醐天皇

六月十五日、庚辰、洪水、○扶桑略記皇年代略

二十五日、寅、郡司讀奏、

〔貞信公記抄〕

六月廿五日、讀奏、

二十九日、甲午、郡司召、

〔貞信公記抄〕

六月廿九日、任郡司、

延喜十四年七月二十一日 二十二日 二十八日

七月丙申朔盡

二十一日丙辰季御讀經

〔貞信公記抄〕七月十八日、定御讀經僧、

廿一日、丙辰、御讀經始紫宸殿、大極殿相分修、

二十二日丁巳、大宰府、斷罪ノ事ヲ奏ス、

〔貞信公記抄〕七月廿二日、大宰斷罪事奏、

二十八日癸亥、童相撲アリ、東宮參上アラセラル、

〔日本紀略〕醍醐天皇 七月廿八日、癸亥、於綾綺殿前有童相撲事、皇太子保明親王參上、

〔貞信公記抄〕七月廿八日、綾綺殿前有童相撲、童舞事、左勝、

〔西宮記〕七月童相撲 延喜十四年七月廿八日、於綾綺殿前有童相撲事、東宮候

内、

○清凉殿ニ於テ、童相撲ノ負態ヲ行フコト、八月十九日ノ條ニ見ユ、

紫宸殿大極殿ニテ之ヲ修ス

童舞アリ

雜田ノ返地
子稻正
進シテ混合
稅ニシム
無主采女

八月乙丑朔盡

八日壬申、諸國雜田地子等ノ雜事五箇條ヲ定行ハシム、

〔政事要略〕五十三雜田事

太政官符、民部省

應行雜事五箇條事、

一應返進諸國雜田二千三百六十六町九段五十二步、其地子稻、混合正稅事、

无主采女田卅八町

尾張國六町元料田三町、遺田九町、今定一人 上總國三町 不載格

下總國六町 不載格 近江國十五町元料田八町、遺田廿四町、今定三人

加賀國六町 不載格 出雲國三町 不載格

備中國六町元料田三人、遺田九町、今定一人

紀伊國三町元料田三人、遺田六町、今定一人

右采女田、改定數之遺依格旨、一身之間、爲其料田、死闕之後、不補其替、可爲

无主田、但上總、下總、加賀、出雲、并四箇國不載格、仍同可爲无主田、

國造田四百一十一町五段

延喜十四年八月八日

國造田

延喜十四年八月八日

六一八

伊勢國七町	尾張國六町	參河國四町六段
遠江國十三町	駿河國六町	伊豆國六町
相模國十三町	武藏國十二町	上總國十八町
下總國十八町	常陸國十三町	近江國八町
美濃國廿四町	飛驒國六町	信濃國六町
下野國六町	若狹國六町	越前國六町
加賀國十一町	能登國六町	越中國十二町
丹波國六町	因幡國六町	伯耆國五町
石見國十二町	隱岐國一町八段	播磨國六町
美作國六町	備中國十八町六段	備後國十八町
安藝國六町	長門國六町	淡路國六町
讚岐國六町	伊豫國六町	土佐國十一町五段
筑前國六町	筑後國十二町 ^(三)	豐前國六町
肥前國六町	肥後國十九町	日向國六町
壹岐嶋六町		

管
力
婦
女
田

管力婦女田廿七町三段

尾張國二町

參河國一町三段

相模國二町

上總國四町

下總國二町

常陸國二町^(三)

美濃國二町

越前國二町

越中國二町

伯耆國二町

備中國二町

周防國二町

日向國二町

賜田

賜田八町

下總國四町

美濃國一町

因幡國三町

功田

功田

播磨國九町六段七十二步

唐人田

唐人田

信濃國二町四段

俘囚田廿三町四段二百步

上總國八町一段三百廿步

下總國五町一段二百四十步

備後國十町

延喜十四年八月八日

六一九

延喜十四年八月八日

國益田

近江國二町七段百卅步
 關郡司職田千八百卅町八段
 伊勢國十八町 帳延喜九年
 參河國五十町 帳延喜十年
 駿河國六十六町 帳延喜七年
 甲斐國卅一町七段 帳延喜八年
 安房國九町六段 帳延喜七年
 下總國卅二町 帳延喜七年
 飛驒國二町二段 帳延喜七年
 上野國八十六町 帳延喜六年
 越前國五十二町 帳延喜九年
 能登國卅町 帳延喜九年
 播磨國廿五町四段 帳延喜八年
 備前國廿六町 帳延喜九年
 尾張國廿二町 帳延喜七年
 遠江國廿六町 帳延喜八年
 伊豆國三町 帳延喜六年
 武藏國廿四町 帳延喜七年
 上總國八十八町四段 帳延喜三年
 常陸國百五十二町 帳延喜八年
 信濃國六十六町二段 帳延喜十年
 下野國八十六町 帳延喜七年
 加賀國卅八町 帳延喜六年
 越中國卅九町六段 帳延喜五年
 美作國卅四町 帳延喜八年
 備中國廿七町二段 帳延喜八年

六一〇

延喜十二年
元慶六年
官符

同七年官符

備後國卅四町 帳延喜九年
 長門國三町七段 帳延喜五年
 丹後國二町 帳延喜五年
 伯耆國廿五町 帳延喜七年
 隱岐國十八町 帳延喜六年
 阿波國十五町 帳延喜九年
 筑前國六十四町 帳延喜二年
 豐前國卅九町 帳延喜三年
 肥前國卅二町 帳延喜二年
 大隅國六十六町 帳延喜九年
 日向國卅四町 帳延喜九年
 右得厨家去延曆十二年八月十三日解備案式條位田職田國造田采女田
 膂力婦女田賜田等未授之間輸地子田者檢案內元慶六年八月廿五日下午
 民部省符備大納言以上〇三代實錄并諸道〇三代實錄博士畿外无主職
 田地子混合正稅又備關郡司職田地子同混合正稅者又案內七年五月十
 延喜十四年八月八日

安藝國三町 帳延喜七年
 丹波國十町二段 帳延喜九年
 但馬國廿二町 帳延喜七年
 出雲國六十八町 帳延喜二年
 紀伊國六町 帳延喜八年
 土佐國卅二町 帳延喜二年
 筑後國八十八町 帳延喜九年
 豐後國廿八町 帳延喜三年
 肥後國廿五町六段 帳延喜六年
 薩摩國百十三町 帳延喜九年
 壹岐鳴八町 帳延喜九年

六一一

延喜十四年八月八日

六二二

三日、下諸國符備、得厨家解備、郡司職田地子、元來無主之間、付田地子帳、檢納厨家、而去年八月廿五日、以其田地子稻、可混合正稅之狀、官符被下民部省、々即下符諸國已了、今檢案內、任權官者、每國過半、預榮爵者、每年兼任、其位田公麻田、以乘田被宛行、因茲諸國地子頻稱減少、厨家用途常以闕乏、望請如舊納件地子以充厨用者、右大臣宣、奉勅依請、但民部省符、下知諸國、早令返進者、而年來地子帳、加注大納言以上、諸博士等職田、仍令民部省勘申、其由申云、依太政官元慶六年符旨、以大納言以上、并諸道博士及郡司職田地子、可混合正稅之、省符下知諸國、而依同七年官符、令返進、可以郡司職田地子、混合正稅之狀、省符爰依載一符、返進兩色、其後未有改給、依式履行者、望請大納言以上、并諸道博士无主職田、依元慶符、早被下知、抑以乘田地子、充年中例用、用度之遺、頗有其數、然則前件等田、徒爲地子田、混合納其輸稻、於公有損、爲厨无益、重望請、返進件等田地子稻、混合正稅、但闕郡司職田之數、隨時增減、无定數者、此據近年帳、所令勘申、至於采女田、定額之外、先補之輩、准據格條、一身之後、爲无主田者、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣忠平宣、奉勅依請、

一應諸國乘田、置七分法事、

右得同前解備、案式條云、諸國地子帳、具錄田上中下及損益、附正稅帳、使申送、若不填去年勘出物者、拘留稅帳、返抄者、凡乘田者、上中下品、各有等差、國司須均置其法、注進彼帳、而少置上田、多注下田、或載中下、全脫上田、因之動滅地子、殆闕例進、況乎至于官符用、鎮稱過進、靜檢事情、國內之田、何必下田數多、上田數少、是不設章程之漸也、望請每國率七分法、將置田品、若上田同率者、恐習俗忽難改、仍須注上田一分、中田二分、下田二分、下々田二分、令進其帳、无上田國、令注進中田二分、下田二分、下々田二分、若違此法、拘勘稅帳、但至于未進檢田帳之國、依先年班符、并近年租帳等、可令勘申、然則進彼帳之日、可勘注其數、又自餘雜田、依國例之法、將令進彼帳者、同宣、奉勅依請、此

條誤脫アリ、本書延長六年十月十一日官符ヲ以テ補フ、

一應諸國地子帳立式、例、令造進事、式例

右得同前解備、諸國地子帳、其例各異、未有定法、或不注田品、上下難辨、或交易之直、貴賤无定、此外違戾、觸類有數、望請處分、依件將令造進、即載式條、立爲恒例者、同宣、奉勅依請、

延喜十四年八月八日

六二三

地子田混
租田ニ混
合スルヲ
禁ズ

地子交易
絹綿等
ノノ價ヲ
定ム

延喜十四年八月八日

一應制止諸國地子田混合租田事、

右得同前解備、地子田數、每國有限、一班之後、豈有增減、而諸國司等、好爲以地子田混於租田、實雖所司勘出、徵地子稻、而空置勘出、无期填納、時遷吏替、遂從免除、地子減少、莫不因斯矣、望請下知諸國、將停混合、若習常不改、將亦拘稅帳者、同宣奉勅依請、

一應定諸國地子交易、絹綿調布商布鐵釜等價數事、

- 伊勢國 絹六十疋 直三千六百束別六
 - 駿河國 商布五百段 直五千束別六
 - 伊豆國 絹十一疋 直六百六十束別六
 - 甲斐國 絹卅五疋五丈 直二千七百五十束別六
 - 相模國 綿五百斤 直四千束別八
 - 武藏國 調布九百廿六段 直二万七千七百八十束別卅
 - 安房國 調布百六十六段 二丈八尺 直四千九百九十束 九把別卅
- 九ノ下、別本符宣抄ニ、九分九毛九厘ノ六字アリ、

- 上總國 調布廿段 直八百束別卅
- 下總國 調布千五十段 直二万束別卅
- 常陸國 商布二千五百段 直二万五千束別卅
- 飛驒國 商布五百段 直五千束別卅
- 信濃國 商布千二百段 六尺 直万二千廿二束 三把別卅
- 上野國 商布九百八十段 直九千八百束別卅
- 下野國 商布千段 直二万束別卅
- 若狹國 絹廿疋 直千二百束別六
- 越後國 絹卅四疋 直二千三百八十束別七
- 佐渡國 調布八十段 直二千四百束別卅
- 丹波國 絹九疋 直四百九十五束別五
- 丹後國 絹五十疋 直三千束別六
- 但馬國 絹卅疋 直二千四百束別六
- 因幡國 絹卅疋 直二千三百六十五束別五

延喜十四年八月八日

十四年八月八日

伯耆國 鐵六百六廷 直三千六百卅六束六廷別
 出雲國 鐵千二百廷 直六百束五廷別
 石見國 綿二百五十斤 直二千卅二束八斤別
 美作國 絹卅疋 直千六百五十束五別五
 備中國 鑿四百口 直千二百束三口別
 備後國 鐵二百九十廷 直千四百五十束五廷別
 鑿五百口 直千五百束三口別
 安藝國 鐵二百五十廷 直千五百束六廷別
 絹廿疋 直千二百束十疋別六
 長門國 綿三百九十八斤 直二千三百八十八束六斤別
 伊豫國 絹十四疋 直七百七十束五別五
 筑前國 絹五百疋 直四万束十疋別八
 綿四千屯 直四万束十屯別
 筑後國 絹卅三疋 直三千四百卅束十疋別八
 綿卅二屯 直三百廿束十屯別

六二六

從前例

豐前國 絹廿一疋 直千六百八十束十疋別八
 綿百五十屯 直千五百束十屯別
 豐後國 絹卅疋 直二千四百束十疋別八
 綿十屯 直百束十屯別
 肥前國 絹廿疋 直千六百束十疋別八
 綿五百屯 直五千束十屯別

右得同前解僭諸國物價各有差別、勘納之例何得一同、而承前之例、不依國法、不論貴賤、定納絹一疋、直稻五十束、綿一屯、直百束、調布商布鐵鑿等之無准的、凡物直、高下、國例各異、何依一例、爲諸國法、加以件等物價、未有所據、稽之政途、似无堤防、望請因年來所進地子帳價數、便爲定法、但收物之日、令主計官人、准定價法、注載日收、有龜惡者、即減其直、自餘雜物、依同帳價、將爲勘定、若物直過限、并不填減直、同拘稅帳者、同宣、奉勅依請、以前條事、所定如件者、宜承知、依宣行之符、到奉行、

右中辨藤原朝臣

左少史錦宿禰

延喜十四年八月八日

延喜十四年八月八日

○別本符宣抄、以テ補正ス、

延喜十四年八月八日

六二七

延喜十四年八月九日 十三日 十五日

六二八

○大納言以下及ビ諸博士、諸國郡司等ノ職田ノ地子ヲ正稅ニ混合セシムルコト、三代實錄元慶六年九月二日ノ條ニ見ユ、

九日、癸酉、除目、

〔貞信公記抄〕八月九日、除目、

十三日、大納言從三位源湛致仕ス、

〔公卿補任〕四 大納言從三位源湛、七十 八月十三日致仕、七十、

〔二代要記〕醍醐天皇 源湛、同十四年八月九日辭官、十四日致仕、

○湛ノ薨ズルコト、十五年五月二十一日ノ條ニ見ユ、

十五日、肥前厨家ノ雜事五箇條ヲ定ム、

〔政事要略〕五十三 雜田事

太政官符、厨家

應勤行雜事五箇條事

一 依式例、可行年中例用、并色々雜事等事、式例別

右得厨家去延喜十二年八月十三日解狀、檢案内、年中所納每色有限、例用之數何无色目、而延曆十八年十月廿一日、只定大弁以下季料米數、并兩

式例ニ依
リテ年中
ノ例用雜
事ヲ行ハ
シムルコ
ト、
延曆十八
年ノ制

例進ノ地
外ノ稻ナ
ル地子ハ
充行ハシ
テ

過用ノ愁
ヲ免レズ

例進ノ地
子雜物ヲ
定ム

甘葛煎
種薑

雜事、未有子細條例、仍履行之間、尙多疑殆、望請具立式例、永以遵行者、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣忠平宣、依請、

一 隨遺數、可充行諸國例進外地子稻事、

右同前解狀、檢案内、年中所充列見定考祿、并夏冬頒給料、商布三万八百册段、晦料油雜穀等、直稻卅三万九千五百册三束五把、爰以例進外稻、相准彼料、所遺之數十九万千餘束、而年々之例、不論多少、濫以下符、仍過用之愁、諸國難免、望請先勘稻之多少有无、即隨遺數、乃後下符、抑前件雜用之遺、猶有其數、況班田數增加、應輸地子有增无減、加以度者逃亡、除帳等田亦在此外、但隨時增減、无有定數、須令所司勘申、隨即加充、然則地子无過用之煩、俸祿有用給之便者、同宣、依請、

一定諸國例進地子雜物事、

伊勢國 米百二斛、絹六十疋、

尾張國 米百五十斛、油二斛、

參河國 米三百斛、油二斛、

遠江國 米三百七十三斛、四斗七升三合七勺、甘葛煎二斗、種薑一石、

延喜十四年八月十五日

六二九

延喜十四年八月十五日

六三〇

堅魚煎
中紙
細貫筵
東炮
白米黑米
糯米
小町筵
食筵

駿河國 甘葛煎二斗、堅魚六百斤、甘葛煎二斗、商布五百段、
伊豆國 堅魚三百卅二斤、同煎一斗、甘葛煎二斗、繩十疋、中紙五十帖、
甲斐國 繩卅五疋五丈、商布四百五十九段九尺、
相模國 綿五百斤、
武藏國 調布九百廿六端、細貫筵卅張、鼓一斛、
安房國 調布百六十端^(六)二丈八尺、東炮二百斤、
上總國 細布廿端、東炮百廿斤、商布二千八百端^(段)、
下總國 調布千五十端、
常陸國 商布二千五百端^(段)、
近江國 米九百九十四石一斗三升六合九勺三撮^(七)、白米二百石、黑米七
百九十四石一斗三升六合九勺三才、
美濃國 米五百九十一石一斗^(斗)、白米百石、黑米四百七十二石九
飛驒國 商布五百端^(段)、
信濃國 商布千二百段^(十)六尺、細貫筵二百張、
上野國 商布九百八十段、細貫筵十枚、小町筵七百六十枚、食筵廿枚、

鮭兒
黑葛筵
楚割鮭

下野國 調布千段^(段)、
若狹國 絹廿疋、
越前國 米四百廿石^(石)、白^(米)百五十石、糯米二十石、
加賀國 鮭卅隻、鮭兒三斗、米五十石、
能登國 米六十九石六斗八升、
越中國 黑葛筵二合、納兒鮭五十隻、楚割鮭百隻、米六十三斛^(石)、白^(斗)卅一石
五斗、

墨
雜魚
鮭年魚
雜魚腊

越後國 絹卅四疋、
佐渡國 調布八十段^(段)、
丹波國 米二百十八石、黑米二百三十石、絹九疋、墨十疋、油三石、
丹後國 絹五十疋、
但馬國 絹卅疋、海藻大五十斤、
因幡國 鮭年魚六斗、雜魚腊百廿斤、絹卅三疋、
伯耆國 鐵六百疋、
出雲國 海藻百十斤、鑿千二百口、

延喜十四年八月十五日

六三一

延喜十四年八月十五日

六三二

上紙

鐵

堅鹽

煎鹽

鷹漬鮑

石見國 綿三百五十四斤

播磨國 米二百五十石、白百石、黑百五十石、油七石、上紙二千張、

美作國 絹卅疋、油六石、

備前國 米五百九十二石、白百卅石、黑四百卅石、油六石、

備中國 米百卅石、白五十石、黑八十石、鑿四百口、鐵二百九十廷、油二斛、

備後國 米百卅石、油四石、鑿五百口、鐵二百五十廷、

安藝國 絹廿疋、油一石三斗、米卅五斛、

周防國 白米六十斛、

長門國 綿三百九十八斤、米三百斛、

紀伊國 油一斛五斗、米六十斛、

阿波國 堅鹽九斛、小麥十斛、大豆十石、油一石、小豆五石、

讚岐國 煎鹽二百九十二石六斗六升、貝蛸一石、鯖百隻、米二百五十石、

白百卅石、黑百廿石

伊豫國 油三石、絹十四疋、米二百十石

土佐國 煮鹽鮎二石、押鮎百隻、鷹漬鮑一石六斗、薄鮑卅斤、白米百五十石、

綿

天安二年

ノ官符

元慶三年

ニ晦料油並
ナ定雜穀等

公文八卷
ナ備ヘシ

太宰府 絹五百疋、綿四千屯、

右同前解狀、檢案內、件雜物等、天安二年正月廿九日官符、元慶三年十月十七日定等、具定色數、其後時々下符、頗有改定、因之據勘前後之官符、定置

所進之色數、望請下知民部省、令諸國司依件數進納、若有未進、依式拘朝集調庸稅帳等返勘者、同宣、依請、

一定晦料油并夏冬頒給料及雜穀等事、勘文在別

右同前解狀、檢案內、列見定考祿、已載式條、而晦料油并雜穀等、未有所據、辨行多疑、然而充行之例、年序尙矣、望請因准舊跡、將定件數、但夏冬頒給料、

依延曆十八年十月廿一日宣旨、同爲定行者、同宣、依請、

一合納厨家可備勘據公文八卷事、

式例一卷 例進雜物勘文一卷 造地子帳例一卷 剩田勘文一卷

夏冬頒給晦油雜穀等勘文一卷 地子交易直勘文一卷 度者除帳田

勘文一卷 返進田勘文一卷

右同前解狀、(辨行事)件公文簿爲本、擬勘故實、宜有其備、而年來之間、曾无公文、執行雜事、動有疑殆、是則勾當之官、不慥實錄、并遷替之人、无身累之所致也、望

延喜十四年八月十五日

六三三

延喜十四年八月十六日 十九日 二十五日

六三四

請、永置件公文、將備勘據、遷替之日、若致紛失者、必處重責、不更寬宥、後人不勘領、科責亦同之者、同宣、依請、

以前條事、所充如件、厨家宜承知、依宣行之、符到奉行、

右中辨藤原朝臣

左大史酒井宿禰

延喜十四年八月十五日○別本符宣抄

十六日庚辰大神宮奉幣、

秋稼ヲ祈ル

〔扶桑略記〕醍醐天皇書 八月十六日、庚辰、伊勢奉幣、祈秋稼也、

十九日癸未童相撲、負態アリ、

童舞

〔日本紀略〕醍醐天皇 八月十九日、於清涼殿有相撲負態事、奏絃歌、

〔貞信公記抄〕 八月十九日、有童相撲、負方獻物事、奏童儂、

〔西宮記〕七月童相撲 延喜十四年○中 八月十九日晚頭、於清涼殿有負態事、奏歌舞、笙歌、王卿候御前、以瀧口爲樂所、已上

樂所瀧口ヲ用フ

○綾綺殿ニ於テ、童相撲ヲ行フコト、七月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十五日己丑除目、大納言藤原忠平ヲ右大臣ニ任ズ、

〔日本紀略〕醍醐天皇 八月廿五日、己丑、詔以大納言正三位藤原朝臣忠平爲右

大臣、左大將如元、

〔公卿補任〕四

大納言正三位藤忠平 左大將、八月廿五日任右大臣、

中納言從三位源昇 民部卿、八月廿五日任大納言、

藤道明 右大將、八月廿五日任大納言、

權中納言從三位藤清貫 八月廿五日轉正、

參 議從四位上藤保忠 廿三、八月五日任、右大辨如元、

〔貞信公記抄〕 八月廿五日、有任公卿事、大納言以下來賀、垣下親王四人、

廿九日、遷官公卿兼任如舊、仍召二省仰、

〔新儀式〕任五臨時下 還御間、新任大臣、令藏人奏僚下可給饗之由、即令藏

人傳仰上卿、延喜十四年、藏人傳仰上

〔西宮記〕二前正月下 大臣召 承平三年二月十三日吏部記云、○中以左

衛門督恒佐爲大納言云々、了就新位、拜舞退、延喜十四年、道明任大納

〔扶桑略記〕醍醐天皇 八月廿五日、大納言藤原朝臣忠平任右大臣、年三

十五、昭宣公三男也、○皇代曆二十三日ニ係ク、

延喜十四年八月二十五日

六三五

大納言以下忠平ノ慶賀ス

忠平ニ饗ヲ賜フ

道明拜舞ス

延喜十四年八月二十九日

六三六

〔一代要記〕

醍醐天皇

右藤忠平

正三位左大將延喜十四年八月廿五日

任同廿九日大將如元年四十五

〔一代要記〕

醍醐天皇

藤道明

從三位右大將東宮傅源昇同日任年五十

八同廿九日大將如元

〔玉葉〕

安元二年三月廿四日已今日（藤原實家）余披舊記之處

○中戌日官奏之例○中

雖其例多同初度之例不見但共於無例者以早速可爲先加之延喜十五年二月一日（忠平）貞信公任大臣之後初於清涼殿有奏已戌日也尤可准據

忠平清涼殿ニ於テ始メテ事ヲ奏ス

○忠平任大臣ノ後紫宸殿ニ於テ始メテ事ヲ奏スルコト十月一日ノ

條ニ見ユ

二十九日（忠平）少外記小野美實ヲシテ撰式所ニ直セシム

〔類聚符宣抄〕

十撰式所人

少外記小野美實

右右大臣宣奉勅件人宜令直撰式所者

延喜十四年八月廿九日

大外記伴久永奉

撰式所候人

九月乙未盡

一日乙未大神宮權大司大中臣全臣ヲ大司ニ任ズ

〔類聚大補任〕

醍醐天皇

大司全臣

九月（十一月廿日）一日轉任元權大司在任六年

權大司正六位上正廉 三月日任全臣轉任替在任六年本扶子遭父喪服解或本十五年五月遭喪

○大中臣正廉ヲ權大司ニ任ズルコト便宜合敍ス

二日丙申雨師二社ニ奉幣シテ晴ヲ祈ル

〔貞信公記抄〕

九月二日丙申奉幣雨師二社祈晴

五日己亥諸司ノ別當ヲ定ム

〔貞信公記抄〕

九月五日定諸司等別當昇殿如舊

七日辛丑右大臣忠平上表ス優詔シテ許サズ

〔貞信公記抄〕

九月七日辛丑初度表就中務奉之即日返給中使玄上朝臣仰

云不可更如此言

十五日己酉二度表使邦基朝臣奉之中使俊蔭朝臣被返表章

廿三日丁巳奉三度表

延喜十四年九月一日 二日 五日 七日

六三七

昇殿

初度表

二度表

三度表

廿六日、中使恒佐朝臣至賜勅答、

○忠平、上表シテ、職封ヲ減ゼンコトヲ請フコト、十月二十六日ノ條ニ見ユ、

九日、癸卯、重陽宴、

〔日本紀略〕

醍醐天皇

九月九日、癸卯、有重陽宴、題云、露重菊花鮮、

〔貞信公記抄〕

九月九日、節會如常、但女樂未畢、式部取文臺、女樂了群臣拜舞、勅曰、依舊例、召博士等、令讀詩、稱唯、召當時朝臣、令召博士三人、而於御帳東讀之、理平爲講師、親王以下預聽讀、了宣命見參等奏之、今日有御製、又采女令史取代官供奉御膳前、其人典膳早部直江也、

詩題
女樂ヲ奏ス
博士ヲ召シテ詩ヲ讀マシム
御製

十月小甲子朔

一日、甲子、旬、官奏アリ、

〔西宮記〕

十月

延喜十四年

十月一日、御記、右大臣奏官奏、任大臣後、大臣著

陣、見奏如例儀、或無

〔貞信公記抄〕

十月一日、上御南殿、無庭立、失也、自餘如例、除目後力初有官奏、

三日、丙寅歷代大嘗會記文等ヲ、撰式所ニ貸與ス、

〔類聚符宣抄〕

文六譜

撰式所

請代々大嘗會記文、雜書、并諸節會及諸祭等日記事、在外記、右爲宛撰儀式之勘會、所請如件、

延喜十四年九月廿一日

右史生中臣園繼

式部少錄葛井清明

右大史御船

少外記小野美實

紫宸殿出御

延喜十四年十月四日 十日 十四日 十六日

六四〇

右大臣宣、件等雜書、宜借給者、

同年十月三日

權少外記中臣利世 奉

○延喜儀式ヲ編錄セシムルコト、十三年八月二十九日ノ條ニ見ユ

四日、町不堪佃田使ヲ定ム、

〔貞信公記抄〕十月四日、定不堪佃使、

十日、西興福寺維摩會、

〔維摩會講師研學豎義次第〕十四年、甲、講師良緒、年、藤、去年十月廿五日宣、廿六日講

大中臣氏、右京人、研學圓祥、年、藤

〔三會定一記〕一、同十四年、去年十月廿五日宣、講師良緒、東大寺、花殿、宗、堅義、圓祥、次日、讚

〔僧綱補任〕二、興福寺本、同十四年、甲、講師良緒、花殿、宗、東大寺、去年十月廿五日宣、大中臣氏、堅

者日讚、

十四日、丁除目、

〔公卿補任〕四、中納言從三位藤清貫、八、十月十四日兼按察使、

〔貞信公記抄〕十月十四日、有除目、

十六日、己官曹事類、大同抄ヲ勘解由使ニ貸與ス、

〔類聚符宣抄〕文六譜

勘解由使

請被下宣旨、借行雜書事、

官曹事類一部 卅卷、

大同抄一部 十六卷、

在外記曹司、

右謹檢案内、使司依太政官去延喜十一年五月四日符旨、修撰交替式、而件式
所載官符、其文多疑、案據成煩、如今彼本官符等、皆在件書中、望請被下宣旨、暫
借行、正其紕繆、將遂撰定、但事畢之後、即將返納、

延喜十四年九月十日

主典秦貞興

判官藤原茂幹

右大臣宣、件等之書、宜隨彼使借申借行者、

同年十月十六日

小外記大藏真明 奉

○勘解由使ヲシテ、交替式ヲ修撰セシムルコト、十一年五月四日ノ條
ニ、天長格抄ヲ貸與スルコト、十二年八月二十三日ノ條ニ、内外官交替

延喜十四年十月十六日

六四一

延喜十一年
年官符

延喜十四年十月二十三日 二十六日

六四二

式ヲ奏進スルコト、二十一年正月二十五日ノ條ニ見ユ、

二十三日、丙戌北野雷公祭及ビ四界祭、四角祭ヲ行フ、

〔西宮記〕

臨時御願

延喜十四年十月廿三日、雷公祭試樂、

雅樂々人樂、樂舞、童舞、給

祿、於本殿、東四界祭、以陰陽寮向四界祭、四角祭、陰陽寮宮城、四已上天下有疫之

時、陰陽寮進支度、料物、官宣

二十六日、己丑右大臣忠平、上表シテ、封戸ヲ減ゼンコトヲ請フ、

〔貞信公記抄〕

十月廿六日、己丑、凶會奉減封表、

○忠平、尋デ又封戸ヲ減ゼンコトヲ請フコト、便宜左ニ附載ス、

〔貞信公記抄〕

十二月九日、辛未今日奉請減封四分之一狀、

十日、被返申文、

聽サズ

十一月 大巳朔 盡

一日、巳日食、

〔日本紀略〕

醍醐天皇

十一月一日、癸巳、日有食之、諸司廢務、

〔扶桑略記〕

醍醐天皇

十一月一日、癸巳、日食、廢務、

〔本朝統曆〕

六

十一大朔、癸巳、未日蝕、八分強、午五、未六、

十九日、辛亥勸子内親王御裳著、

〔貞信公記抄〕

十一月十九日、辛亥今上女一公主始著裳、召殿上親王公卿御

前、賜恩盃御衣、又公主簾前有祿、終夜奏管絃、有召吏部王預之、

〔躬恆集〕

下

歌仙家集本

延喜十三年十月九日、おほせによりてたてまつ

る、女一宮の御もきにたてまつらせたまふ御さうすくのものかたに

を、みつへてにて、するれうの歌、

なかれいつる山をし思へはよしの河ふかき心のたらんものかは

また

わたつみの神そしるらんたなしくはあまのかるもをわれにかさなん

〔躬恆集〕

十歌カ

延喜三年十月十九日、仰によりて歌みつ奉る、女一のみこの裳き

延喜十四年十一月一日 十九日

六四三

廢務

親王公卿
恩盃御
衣ヲ賜フ
終夜管絃
アテリ
躬恆ナシ
ヲ御裳ノ
水手書ラ
シム

延喜十四年十一月二十五日 二十七日

六四四

玉ふ時に、内よりさうそく玉ふ、その裳にみつくきかたきにすれる歌、
なかれ出る山(をろ)るしおもへはよしの河ふかき心もたえむ物かは
わたつ海の神もゑるらん同しくは蟹のかるもを我にかさなん
ゑら雲のたちのみわたるくらはしの山に心をおもひつめつゝ

二十五日、皇皇子時明、長明ヲ親王ト爲ス、

〔日本紀略〕醍醐天皇十一月廿五日、第八時明、第九長明等皇子爲親王、

〔一代要記〕醍醐天皇將明親王 無品、母更衣源周子、延喜十四年十一月

廿五日爲親王、年三歲、

長明親王 四品、母更衣藤淑姬、延喜十四年十一月廿五日爲親王、年三歲、

二十七日、未齋宮柔子内親王ノ病ニ依リテ、大神宮ニ奉幣ス、

〔貞信公記抄〕十一月廿七日、己未、依齋宮病、有奉幣伊勢事、

〔未〕○中納言藤原定方等ヲシテ、齋宮柔子内親王ノ病ヲ問ハシムルコト、

日本十三年九月二十七日ノ條ニ見ユ、

十二月小癸亥朔

十一日、酉神今食、

〔貞信公記抄〕十二月十一日、候大忌、

十四日、丙子、東宮御讀書竟宴、

〔貞信公記抄〕十二月十四日、丙子、(保明親王)宮御書竟宴、

○東宮始メテ御註孝經ヲ讀ミ給フコト、十三年十月二十五日ノ條ニ見ユ、

十九日、辛巳、御佛名、

〔貞信公記抄〕十二月十九日、御佛名始、

二十日、壬午、荷前、

〔貞信公記抄〕十二月廿日、壬申、荷前儀如常、

二十二日、甲申、年終斬罪ヲ奏ス、

〔貞信公記抄〕十二月廿二日、奏年終斬罪、

忠平大忌
ニ候ス

延喜十四年十二月十一日 十四日 十九日 二十日 二十二日

六四五

是歲、諸寺年分度者奏上ノ制ヲ定ム、

〔九條年中行事〕申大中納言雜事

諸寺年分度者事延喜十三年以來依格不奏、○中略

以上奏、

〔北山抄〕七都省雜事 申大中納言雜事

諸寺年分度者事延喜十三年以來往奏、其後依格不奏、无續文、○中略

已上上宣、

法皇、東大寺ノ僧圓超等ニ勅シテ、六宗ノ章疏ヲ錄上セシメ給フ、

〔諸宗章疏錄〕上 華嚴宗章疏并因明錄

東大寺圓超大法師奉聖王勅錄上

竊以、佛教之興也、於此有由矣、西天之境、釋迦能仁、駕鹿苑而疏其源、東漢之朝、孝明皇帝、夢金人而尋其蹤、我國家奇異之像來濱、微言之教聞空、磯城嶋金刺宮御宇、欽明天皇十三年、佛法始傳矣、其後至于延喜十四年、經三百五十三年、其間所傳、法藏盡數、分教窮派、書寫經論、競在公私、祕顯章疏、但任人心、或祕不傳、或散不寫、諸宗章疏、漸瀆塞、白馬教法、無由釋焉、伏惟、禪定皇帝字多天皇、五百佛前、親

華嚴宗章疏并二序

唐書

受付囑、一天下中、權現王身、崇重聖教、遠越五天、紹隆顯密、近倍震旦、爰皇帝勅、

寫傳章疏、使六宗碩學、進各宗之錄、圓超苟陪華嚴之末學、忝獻自宗及因明錄、

伏憑後哲之正奏耳、甲戌之歲四月八日、謹序、

十住毗婆沙論十六卷龍樹菩薩造、十地品、至第二地、是舍三藏共羅什譯出、釋

十住論十卷羅什譯、菩薩造、

十地論十卷天親菩薩造、

註十地論二十卷

華嚴論六百卷北齊劉謙之述、

華嚴論百卷見行止五十卷、後魏靈辨述、

法界無差別論一卷提雲般若造、

十地五門實性論六卷釋十地論、

大乘起信論一卷馬鳴菩薩造、

大乘起信論二卷馬鳴菩薩造、真諦三藏譯、

大乘起信論玄文二十卷真諦三藏述、

大品玄文四卷真諦三藏述、

延喜十四年是歲

延喜十四年是歲

九識論二卷 真諦三藏述
 寶性論六卷 堅那摩提譯
 佛地論七卷 親光菩薩造
 金剛三昧論三卷 新羅元曉述
 華嚴經會釋論十四卷 新經李通玄述
 華嚴經探玄記二十卷 古經魏國西寺法藏述
 華嚴刊定記十六卷 新經靜法寺慧苑述
 華嚴疏三十卷 新經義鈔四分本末為六十卷請來錄云演
 華嚴疏十卷 古經元曉述
 華嚴方軌五卷 古經至相寺智儼述
 華嚴疏二十卷 新經宗壹述
 華嚴疏十三卷 智儼述
 華嚴疏七卷 越州靜林寺法敏述
 華嚴疏十二卷 唐大慈恩寺靈辨述
 華嚴鈔十卷 靈辨述

華嚴十地品疏十卷 唐并州武德寺慧覺述
 華嚴疏七卷 齊鄒中曇遵述
 華嚴疏七卷 隋西京大興善寺洪遵述
 華嚴疏七卷 隋西京淨影寺慧遠述
 華嚴疏十卷 唐至相寺智正述
 華嚴疏十卷 唐京師普光寺光覺述
 華嚴疏七卷 魏北臺智炬述
 華嚴疏五卷 齊鄒下大覺寺僧範述又造
 華嚴疏四卷 齊鄒下大學寺慧光述
 華嚴疏七卷 齊治州曇衍述
 華嚴義疏 未知卷數感隋西京空
 華嚴疏八卷 隋相州演空寺靈裕述又造自餘
 華嚴明難品疏十卷 隋西京禪定道場曇遷述
 華嚴入法界品鈔一卷 光統律師述
 華嚴教分記一卷 亦云五教杜順述

延喜十四年是歲

延喜十四年是歲

- 華嚴綱目一卷 元曉述
- 華嚴綱目一卷 法門十藏述
- 華嚴旨歸一卷 法門十藏述
- 華嚴旨歸一卷 靈裕述
- 華嚴旨歸二卷 東晉南林法業述
- 華嚴孔目章四卷 智儼述
- 華嚴問答二卷 智儼述
- 華嚴問答二卷 法藏述
- 華嚴玄明要決一卷 智儼述
- 華嚴旋復章一部 未知卷數
- 華嚴三教對辨懸談 未知卷數
- 華嚴翻梵語一卷 舊經述
- 華嚴梵語及音義一卷 新經述
- 華嚴三昧觀一卷 法門十藏述
- 華嚴教分記三卷 亦名五教章法藏述

- 華嚴玄義章一卷 法藏述
- 華嚴八會章一卷 法藏述
- 華嚴唯識章一卷 法藏述
- 華嚴法界義海一卷 法藏述
- 華嚴遊心法界記一卷 法藏述
- 華嚴發菩提心義一卷 法藏述
- 華嚴關脈義一卷 法藏述
- 華嚴文義要決五卷 新羅表貢述
- 華嚴善財童子諸善知識錄一卷 彥琮述
- 華嚴佛名二卷
- 華嚴菩薩名一卷
- 華嚴三寶禮一卷 法門十藏述
- 華嚴讚禮一卷 法門十藏述
- 華嚴普禮法一卷 天台五禮拜師述
- 華嚴齋記一卷 竟陵文宣王述

延喜十四年是歲

延喜十四年是歲

- 華嚴供養十門儀式一卷 智儼述
- 華嚴十立章一卷 智儼承杜順述
- 華嚴廻心義一卷 顯法師述
- 華嚴文義略纂一卷 顯法師述
- 華嚴十會一卷
- 華嚴品會名圖一卷
- 華嚴法界觀一卷 杜順述
- 華嚴法界觀玄鏡一卷 澄觀述
- 華嚴普賢行願品疏一卷 澄觀述
- 華嚴會請賢聖文一卷
- 華嚴孔目記六卷 新羅珍嵩述
- 華嚴骨目一卷 湛然述
- 華嚴遊意一卷 吉藏述
- 華嚴傳五卷 法藏述
- 華嚴章三卷 大慈恩寺靈辨述

六五二

- 蓮華藏世界海觀及彌勒天宮觀一卷 靈幹述
- 金師子章一卷 法藏述
- 密嚴經疏四卷 法藏述
- 般若心經疏一卷 法藏述
- 梵網經疏三卷 法藏述
- 維摩經疏六卷 法銑述
- 楞伽經疏七卷 元曉述
- 勝鬘經疏二卷 元曉述
- 法華疏六卷 光宅寺雲法師述
- 最勝疏八卷 勝莊述
- 楞伽心玄記一卷 法藏述
- 大乘起信論疏二卷 法藏述
- 起信疏一卷 古譯論大衍述
- 起信義疏二卷 淨影寺慧遠述
- 起信疏二卷 元曉述

延喜十四年是歲

六五三

延喜十四年是歲

起信疏三卷 延法師述

起信疏三卷 大慈恩寺慧明述

起信疏一卷 青丘大衍述

起信疏一卷 曇遷述

起信別記一卷 法藏述

起信別記一卷 元曉述

起信私記一卷 元曉述

起信綱要二卷

起信記一卷 大衍述

法界無差別論疏一卷 法藏述

十地論疏七卷 慧遠述

佛地論疏六卷 靖邁述

十二門論疏一卷 法藏述

中邊分別論疏四卷 元曉述

大乘義章二十卷 續高僧傳云廬山慧遠法師三論華嚴十地品爲五聚法謂教義染淨雜因今載此錄矣

和書

大乘權實義二卷 慧苑述

大乘止觀一卷 曇遷述

止觀二卷 智者禪師述亦名智顛師

會諸宗別見頌一卷 杜順述

二障章一卷 元曉述

一道章一卷 元曉述

自防遺忘集十卷 文超述

綱目記二卷

十門和諍論一卷 元曉述

海印三昧論一卷 明晶述

法華宗要一卷 元曉述

新華嚴經音義二卷 慧苑述

已上唐書

華嚴傳音義一卷 慧叡述

唯識論同異補闕章二卷 東大寺德一述

延喜十四年是歲

延喜十四年是歲

起信論同異章一卷 興福寺智憬述

五教指事三卷 東大寺壽靈述

五教私記二卷 願圓述

維摩經註釋十二卷 勢範律師述 中下不註

已上和書

因明疏并記

判比量論一卷 元曉述

理門論疏二卷 圓測述

理門疏六卷 定賓述

理門疏三卷 淨眼述

理門疏三卷 文備述

理門古迹一卷 太賢述

理門註釋一卷 文備述

入正理論疏三卷 基法師述

正理論疏三卷 璧法師述

因明疏并記
唐書

正理論疏三卷 文軌述

正理論疏二卷 道證述

正理論疏三卷 玄應述

正理論疏一卷 玄範述

正理論疏二卷 清幹述

正理論述記一卷 神泰述

正理論疏鈔一卷 道獻述

正理論略纂四卷 慧沼述

正理論纂要一卷 慧沼述

正理論義斷一卷 慧沼述

正理論義心一卷 道獻述

唯識比量遣偽興真章一卷 行賀述

正理論註釋一卷 崇俊述

廣百論疏十卷 文備述

廣百論撮要一卷 元曉述

延喜十四年是歲

延喜十四年是歲

如實論疏一卷 眞諦三藏述
 基疏記三卷 慧法師述
 基疏記三卷 智周述
 基疏記三卷 清素述
 基疏記三卷 穎法師述
 基疏記三卷 獻法師述
 基疏記三卷 無名有鈔
 基疏略記一卷 智周述
 基疏後記三卷 智周述
 纂要記一卷 如理述
 纂要記一卷 首法師述
 纂要記一卷 周法師述
 纂要記一卷 清法師述
 纂要記一卷 林法師述
 纂要記一卷 憲法師述

六五八

和書

義斷記一卷 清法師述
 義斷記一卷 憲法師述
 義斷記一卷 林法師述
 義斷記一卷 周法師述
 義斷記一卷 擇隣述
 已上唐書
 明燈鈔十二卷 善珠僧正述
 唯識分量決一卷 善珠僧正述
 義骨三卷 莊嚴疏末疏也
 三量撮一卷 東大寺長載述
 勝軍比量集記一卷 興福寺願建述
 六因義集記一卷 願建述
 疏集記六卷 願建述
 纂要集記三卷 願建述
 義斷集記一卷 願建述

延喜十四年是歲

六五九

延喜十四年是歲

已上和書

已上八百八十二部七百八十四卷

天台宗章疏

延曆寺立
日錄上ノ
天台宗章
疏

法華玄義十卷 天台智者大師說

法華玄義釋籤十卷 荆谿湛然大師述

法華玄義科文一卷 湛然述

法華文句十卷 智者說 有神說 通述

法華文句疏記十卷 湛然述

法華文句科文一卷 湛然述

法華經疏二卷

法華觀音品玄義一卷 智者說

法華觀音品疏二卷 智者說

法華觀音品科文一卷 湛然述

法華大意一卷 明曠述

延曆寺立日大法師奉聖王勅錄上

上宮王御
製法華疏

法華懺法一卷 智者說

法華三昧補助儀一卷 湛然述

法華疏四卷 上宮王御製

法華文句私志記十五卷 智雲述

法華文句記六卷 定林述

法華五百問論三卷 湛然述

法華三周圖一卷

安樂行一卷 南嶽大師述

十不二門義一卷 止觀和尚述

釋十如是義一卷

法華輔照三卷 傳教述

法華去惑四卷 傳教述

法華疏記三卷 傳教述

法華註釋十四卷 傳教述

法華疏二卷 竺道生述

延喜十四年是歲

延喜十四年是歲

圓頓止觀十卷 智者說
 摩訶止觀十卷 智者說
 摩訶止觀輔行傳弘決十卷 湛然述
 摩訶止觀弘決搜要記十卷 湛然述
 摩訶止觀文句二卷 湛然述
 摩訶止觀義例一卷 湛然述
 摩訶止觀心要一卷
 摩訶止觀註釋三十卷 廣智述
 摩訶止觀音義一卷
 摩訶止觀大意一卷 湛然述
 摩訶止觀八教大意一卷 明曠述
 摩訶止觀科文一卷
 摩訶止觀三德圖一卷
 八教圖一卷
 略止觀六卷 梁肅述

小止觀二卷 智者說
 止觀記中異義一卷 道邃乾淑集
 禪門修證十卷 智者說
 禪門章一卷 智者說
 禪門要略一卷 智者說
 修禪六妙門一卷 智者說
 六妙門文句一卷
 略釋六妙門一卷 智者說
 口決禪法一卷 智者說
 四念處四卷 智者說
 觀心論一卷 智者說
 觀心論疏二卷 灌頂述
 覺意三昧一卷 智者說
 覺意三昧文句一卷 湛然述
 無諍三昧法門二卷 南嶽述

延喜十四年是歲

延喜十四年是歲

雜觀行一卷 智者說
 觀心誦經記一卷 湛然述
 金光明經懺法一卷 智者述
 修三昧常行法一卷 智者述
 大乘止觀一卷 南嶽述
 四十二字門二卷 南嶽述
 法界次第三卷 智者述
 大乘坐禪法一卷 達磨述
 隨自意三昧一卷 臺山述
 圓教六即義一卷 智者說
 六即義一卷 行滿述
 維摩經玄疏六卷 智者說
 維摩疏二十八卷 智者說
 維摩略疏十卷 湛然述
 維摩疏記六卷 湛然述

上宮王御製維摩疏

維摩疏私記三卷 道暹述
 維摩玄疏記一卷 道暹述
 四教義十二卷 智者說
 三觀義二卷 智者說
 判斷天台四教諍文一卷
 維摩疏三卷 上宮王御製
 維摩科目一卷
 維摩疏六卷 法銑述
 涅槃經疏十五卷 灌頂述
 涅槃再治疏十五卷 湛然述
 涅槃疏記九卷 道暹述
 涅槃疏私記五卷 行滿述
 涅槃私志記百十五卷 智未到述
 涅槃玄義一卷 灌頂述
 涅槃玄義文句一卷 道暹述

延喜十四年是歲